

をおもちでせうか。

松井 そりやア駄目だよ。さう云ふものたちは惜むらくは支那を知らんのぢや、支那はそんなものぢやない。中支の方へは別個の政權ができて行かなければならぬが、それには相当の時間がかかる。その中には××などもこちらの方へやつて来て、さういふものを作らうとする機会を狙つてゐるのではなからうか。現在ではまだそこまで、機運が熟して居ない。尤も大道市政府のやうなものもあるが、あの程度のもではまだ充分とは云へない。どうしても将来もつと大きな勢力が動いて来なければ有力な政府は作れないよ。

山本 いや、どうも色々有難うございました。それぢやこれで……。

松井 さうですか。南京へはいつ頃おいでになりますか。

山本 一月の四五日頃の予定です。そして南京を見て都合によつては杭州へ廻らうと思つてゐます。

松井 おいでになつたら一つよく見て来て下さい。特に外人にお会ひになつた方が面白いことが分るかも知れませんね。

山本 いや御親切どうもありがたうございます。では御大事に。

やまもとさねひこ 一八八五—一九五三 ジャーナリスト、政治家。日本大学卒業後はじめ新聞界に入つて門司新報主筆となり、のちやまと新聞特派員としてロンドン駐在、帰国後大正四年東京毎日新聞社社長に就任した。その後出版を志し、大正八年改造社を起こして総合雑誌『改造』を創刊、大正期の自由主義興隆に率先して、

河邊虎四郎少将回想応答録 〈抜粋〉

本書は竹田宮恒徳王殿下が大本営研究班員として武力戦の見地に基く中央部の統帥に関する御研究資料として事変勃発当時参謀本部第二課々長たりし河邊虎四郎少将に就き昭和十五年七月直接聴取せられたる事項の速記録なり。

竹田宮殿下 支那事変に於て中央が執られた統帥の跡を時期を逐ひまして……例へば斯ういふことは斯ういふ推移で斯うなつて行つたといふ経緯の真相を伺ひ度いのであります。尚今一つは先達つて書いて差上げました研究事項に就てどういふ風に御考へになつて居られるかを伺ひ度いのでありますが……。

前 言

河邊少将 私から初めに一寸申上げて置きたいことは、事変勃発当時私は其の当時の編制に於ける第二課長をやつて居りましたが、之は妙な中間の位置でありまして本当に高等統帥の部分には直接「タッチ」して居りません。

それから色々極内的な方法——謀略的なこともありましたが、さういふこともとは耳に入つて居らないので只ぼんやりと其の当時の記憶が残つて居りますだけです。それからもう一つ甚だ申訳ないのでありますが、私は日記を書いて居りませんから

社運を大いに高めた。昭和初年には『現代日本文学全集』を刊行して「円本」流行の先駆となり、またアインシュタイン博士らの世界的知識人を招くなど、文化運動にも貢献した。昭和五年衆議院議員に当選して政界に進出、第二次大戦前及び戦時中にはしばしば満鮮・南洋などを旅行、戦後は協同民主党の委員長として活躍を期待されたが、昭和二十七年死去した。（平凡社『日本人名大辞典』）

（昭和十五年 参謀本部作製）

つきり日時を逐ふて申上げることが出来ないことが多々あると思ひます。又申上げること前後致すことがあるかも知れません。其の点は御遠慮なく突込んで頂きまして私の記憶を喚起し度いと思ひます。

御趣旨の程は私は寔によく判つて有難いと感謝して居ります。甚だ僭越な言葉で御座いますが機密作戦日誌は真に其の内容を熟知して居る人が書くべきであります。どうも忙しい時にはそれがやれませんから結局大尉とか少佐級のものを書くのですが、それ等には實際の所は耳に入らないことが尠くありません。殊に政治出兵のやうな時には日誌を書く人の想像で書くといふやうなことが間々御座いますので、殿下御親らが御訊問になりますのにも相当不明な所もありませうし、今おやりのお仕事は相当厄介なことと存じますが是非詐らざる所を研究して頂きますれば洵に結構なことであり将来非常に貴重なるものとなるであらうと思ひます。私の今申上げることに恐らく随分僭越なことを申上げ乃至は先輩、同僚の悪口がましいことを申上げるかも知れませんが、それも決して悪意で申上げることでなく實際がさういふ状態であつたといふことを申上げるのでありますから、其の点はどうぞ宜しく御諒解を願ひ度いと思ひます。

殿下 速記したものは取扱ひを慎重に致します。

河邊 此の点は速記録にとり、此の点は速記を止めさせて頂くといふことが一々はつきり区別出来ませんから、申上げました中で殿下が御覧下さいまして之は記録に残すべきでないと思召すことが御座いましたら抹殺させるかどうかして頂ければ有難いと存じます。

殿下 速記の出来上つたものはもう一度之を御覧願ひまして修正を御願ひします。

統帥と政治の関係

殿下 少し本質論に入りますが、全体戦争といふことと統帥の独立といふことの関係はどういふ風になりますか。

河邊 私は異端者かも知れませんが、人の言はれるやうに統帥の絶対を極度に広く考へられぬのですが……。戦争指導即統帥、従つて戦争指導は統帥者の分担分野であると考え、ことに疑問を持つて居ります。

即ち戦争指導とは国務と統帥と合体したものだ、従つて戦争指導といふものは戦時の国務と作戦とを同時に指導することであつて、従つて時に国務の必要大なる場合に於て統帥が束縛されることはあり得べきであると思ふのであります。それが戦争指導である。従つて戦争指導の最高機関は本宮に宮中帷幄の許に文武の重臣が数人居つて構成せられ、それが協力して考へたものを御允裁を仰いで政務と戦務の上に実行せらるべきが本宮であるのではないか、之が戦時大本宮の本質ではあるまいかと思つて居ります。そしてそれから出る政務といふものは内閣が行ひ、戦務は参謀本部、軍令部に移されて純軍事即ち具体的なる作戦指導となつて行くべきであらうと思へるのであります。現在の大本宮は陸軍部と海軍部とでやつて居りま

すが、それよりも一段上に戦争指導機関たる大本宮といふものがあるべきではないかと思ひます。

殿下 統帥なるものをもつと狭義に解釈して兵団の運用、作戦指導といふ風に見ると、之には相当「無理」を伴ふといふのが本質ではないかと思ひますが……。戦争指導といふとそれを反対に抑へるやうな要素が多いやうで、それが為作戦が常に掣肘されて真の折合が出来なくなるではないかといふ気が致しますが……。

河邊 戦争指導と統帥といふものに就て適切な例でないかもしれませんが……。例へば支那事変が始まつた……北支に兵力を使用して事変発端の禍因を武力膺懲し乍ら一方戦略的效果を求めて強力なる陸海軍で上海から南京を衝く……と云ふやうなことは、戦略問題のやうであります。が外国権益にも関係し、総力戦的問題にも関係して来ますから、戦争指導と云ふべき範囲ではありますまいか。それが決まれば其の範囲に於て陸軍も海軍も作戦を行ふ、そこに陸軍の統帥、海軍の統帥が生れると思ひます。又南京から更に武漢に追撃することは戦略的見地から大いに必要であるとしても、全般的大局上之をやめて和平工作に乗り出すを可とするならば、戦略上の不利を我慢しても追撃を行はない、若し又、どんな無理を押しても武漢に向ふ追撃を決定するを可とするならば、国民の鍋釜を集め飯を一合に忍ばせても統帥系統の要求を満足させる……といふやうに、大戦争の実行は国務と統帥とは不可分であり、従つてその根本は文武の最高首脳がはつきりと決めて允裁を仰ぐべきものであり、単に統帥部の意の儘に仕方がないからつて来るといふのでは不可ぬのであると考へます。仰せの如く作戦行動の本質、特に成果の大を求むれば求むるだけ無理を押さなければならぬと思ひますが、その戦

略上の所謂「無理」をよく理解してその押し易きやうにすると同時に、大局上之れ以上絶対に不可といふ点をしつかりと見分けて統帥部を圧するだけの政治家が大切であると思へるのであります。

殿下 統帥と政略の両者に無関係の最高機関がそこに存在して、之がやると考へて良いのですか。

河邊 統帥と政務とを合体し、その二つながらの根本を指導する最高機関が望ましいのであります。これは勿論、上御一人の遊ばすこととありますが、其の真の帷幄に参する士は卓抜なる識見を持つて居る人でなければならぬと思ひます。其の人には統帥のことも政治のことも判つて居る人でなければならぬと思ひます。此の前の欧州戦争の時に上等兵から振り出しました「ヒットラー」が、現在は「ドイツ」の最高指導者であります。その戦争指導がうまく行つて居りますのは、統帥と国務とを一人で把握し、政略の本質を確実に心得て居るからだと思ひます。

殿下 それは実行権を附与された機関ですか。

河邊 その機関そのものは実行権はないもので宜しいと思ひます。諮詢府でありませう。然しそれには総理大臣、両総長其の他若干（小数）の重臣が居られ、そこから出ること及そこで可決せられたことが一面は作命として総長伝宣で出るであるませうし、又一面は政府が勅令として出すものがありませうと思ひます。

殿下 統帥権といふものは其の中に含まれるのですか。根本的な改革だと考へるのですか。

河邊 さうだと思ひます。私は之が決して統帥権を干犯するものではないと思ひます。南京をどう云ふ風に攻略するか、如何なる方法で武漢に追撃するか、斯うしたことをこの機関が兎や角云ふべきで

はないのであります。此の重要な政、戦略の調和を連絡会議で巧くやらうぢやないかといふことになつたのであります。併し思ふやうに巧くは参りませず、其の連絡会議に於ては何時も大切な問題が的確に斯う決つたといふことも少なく、時には政府と軍部とが意見衝突のまま物わかれになつたに過ぎないこともありまして、連絡と申しますものでは本宮のことは出来ません。どうしてももつと強力な決定権を持つものでなければならぬと思ひます。

殿下 そこで根本的に異つた改革が出来なかつたとしても、現在の機構をそれに近からしめる為大本宮といふものの中に政略の一部を取入れてやるといふ案はなかつたのですか。

河邊 一部で考慮したとは思ひますが、大本宮は主として軍事の本宮にするといふ考で進みました。尤も御前会議では全般に亘つてのことを申上げ、さうして本宮の会議をやり、それに従つて御聖断を仰ぐといふことは考へて居たのですが、事実そこまでは進むことなく動きました……。

殿下 宮の中に大本宮を設けるといふ話は……。

河邊 大本宮を宮中の中に設けて、上御一人の近くへ参つてよく申上げて御裁断を仰ぐといふことになるんですが……。

殿下 それは政府との関係も併せてですか。

河邊 それは政府との関係を含んでです。

殿下 あの時に機関は大本宮の統帥を政務から分離したので非常に特色があると考へて居るのですが……。

河邊 之を考へたのは統帥の独立といふことを強く、且広範囲にとらうといふ不言の氣持が動いて居ると思ひます。

殿下 それに就ては色々の案はあつたのですが……。それから飛ん

で直ぐに決定案に行つて居りますね。

河邊 仰せの通りでありまして、本質論に遡つて事態を六つかしくすることなく、大本宮の下に陸海軍が完全に協調したことを表明して国民の気分を引立て、又支那に対する威圧的「ゼスチュアール」にもしようといふやうな考が強かつたと思ひます。

第一回の御前会議の状況を写真に撮つて居ります。けれども此の御前会議もさつき申しました如く之を大切に考へずに、唯陸海軍統帥首脳部が御前に一応揃つて、両軍の作戦指導を叢間に達しようといふやうなことであります。

さうして省部の間も随分変な具合で……陸軍大臣は「俺が大本宮に来て自分の椅子一つ持つて居らん……」といふやうなことを言はれて居たと聞いて居ります。

殿下 服務規定があるやうですが……あれが徹底しなかつたといふことも大体推察出来ませんが……あれが実行出来ればもつと省部間は緩和されたといふことはありませんか。

河邊 あれは運用上もつと勉強してあれで能率を増進したら良いといふことだつたにも拘らず大本宮としての運用を本当にやらうといふ気がなかつたのでありますし、出来ました大本宮の本質が省部の間に改めて考へ直すべきものが少くありませんでした為の状況となり、唯言はば威勢よく大本宮陸軍部の看板を掲げ、之を新聞に出したといふやうなものであります。

所で当時大本宮が出来ますと野戦兵站関係の各長官が色々な問題で大本宮にやつて来て、総長殿下（閑院宮載仁親王）に幕僚として報告して居つたのですが——つまり大本宮といふものの名に於てやられるやうになりましたので——補給関係のことは或る程度よく行

くやうになつたと思ひます。

殿下 其の他に機構は余り変つて居らぬのでありませんか。

河邊 殆ど何も他には変つては居りません。梅津（美治郎）次官も、之は何処が違ふのだという質問をせられた位です。

殿下 大本宮陸軍部の機構に就て何かお考へになつて居ることがあります。

河邊 大本宮陸軍部といふものはあそこに居たのでは具合が悪い、他に移転して現在の陸軍作戦其のものに没頭したら良いのぢやないかといふ気が致します。参謀本部といふものはあつて宜しいのです。之は大本宮の留守部であると同時に対支作戦遂行上間接的な情報（内外）の蒐集とか、外国人に対する交渉機関とする……さういふことにしてあれば良いやうに思ひます。

「ドイツ」の話になりますが、「ドイツ」の大本宮（陸軍部）と参謀本部とは別個に存在してあります。

陸海軍の關係

殿下 陸海軍の問題は色々ありますが、それを一つに帰するといふことは難しいですか。

河邊 日本人は難しい民族だと思ひます。殿下の前で申上げては可笑しいですが、皇族方に之をやつて頂き度いと思ひます。之は日本人は皇族方に絶対服従の信念は生れながら有つて居るのであります。それで之は皇族が本當に中枢の位置にお立ち下さつて頂ければ巧く行くと思ひます。臣下の者での陸海軍の上に超越した偉人が出て来れば別問題ですが……それでなかつたら日本人は世界中で一番「インテリ」の人間ですから理論闘争が多く、何か絶対尊嚴のもの

す。

會議と銘を打つて會議を開き、それに出るからには各自が信念を吐露して申上ぐべきで、又之に対して御下問もあるのが当然だと思つて居ります。此方から御下問案を持つて行つて、それに依つて會議を進めるといふやうなことは甚だ申訳のないことだと思ひます。

……御下問に対して八百長式にお答へするといふやうな會議では誠に申訳ない話であります。

殿下 陸海軍間の問題が解決しなかつたといふことから言へるのです。

河邊 仰せの通りであります。

殿下 青島問題、或い頓挫した南支作戦は何か問題があつたやうです。

河邊 問題があつた為に、開催すべき御前會議も陸海軍會議もやれなかつたといふこともあります。鎬を削つて陸海軍がやつて、それでも結論を得なかつたら御前に聖断を仰ぎ、斯うやらうとお決めになつたら、それを互に一生懸命でやるやうに努力すべきであらうと思ひます。

後で講和問題が起りました時に、秩父宮殿下も斯ういふ問題で次長に喰つてかゝられまして、御前で申上げて、陛下の清らかな御心の鏡におかけして……其の場で決まなくても良いから……後で決めても良いのぢやないかと申されましたが、そんな風に陛下に申上げて聖慮を煩しては相済みぬといふ風に次長は申して居られました。それで下の方で順次纏まりましたものを、総長殿下に御前で御説明を申上げて頂くだけになりました……。

殿下 さうすると結局機関説になるのぢやないのですか。

がなかつたならば各々自我を持して他に譲ることをしません。殊に陸海軍を縛るには之より外に手はないと私個人は思ひます。之は殿下方に於てやつて頂くのが良いと思ひます……私は實際海軍といふものには手古摺り倦いて仕舞ひました。

大本宮會議

殿下 大本宮會議といふのは、あれは大本宮が出来たのでそれでやらうといふ考へに過ぎなかつたのです。

河邊 はい、さうです。

殿下 第一回の大本宮會議が終つてから次長（多田駿）が総理に説明して居りますね……。

河邊 あれは連絡の形で……之は大本宮の會議の内容を言つただけであります。

殿下 連絡會議の一つとしてやつただけであります。

河邊 作戦実施の内容を総理大臣に知らして置くといふ目的で、一応連絡の形であれを告げたのであります。

殿下 軍事参議官會議で何か話をして居るやうですが……誰かがして居るかも知れませんが……之は別に會議があつた訳ではないでせうね。

河邊 別に何も會議があつたからでなく、大本宮會議が纏まつたからといふ意味からだつたと思ひます。

殿下 其の後大本宮會議は度々ありましたが、一体事実には於ける大本宮の會議の内容は既に決したことを會議で決めるといふやうな状況ですね。

河邊 私の感じたのは會議ではありません。之は全部報告でありま

河邊 それは結局一つの機関説となると言へると思ひます。一少佐の書いたものに課長の印を取り、課長は部長の印を取り、部長は次長の印を取るだけでそれが終に御決裁を得る……御親裁になつたものとして出て行くといふことは、事務的の些事はそれで宜しいと致しまして、大問題を有耶無耶の間に妥協的などつちにでもとれるやうにして御前に然るべく御説明を申上げ、允裁を得たとするのは実によくないやり方だと思ひます。

殿下 小さくは参謀本部の中でもさういふ風になつて居るのではないのですか。

河邊 次長〔多田駿〕が書類を持つて行きますにしても、総長殿下はお年を召して居らつしやることでもありますので、次長は御老体に対してといふ氣持が非常に働いて居りました。

殿下 解りました。

河邊 併し本当は殿下の仰せになることに一言もないのであります。

折角作つた大本営といふものは仕事の能率をどの位發揮して居るのか判らないのです。併し之が出来たから害があつたといふことは申上げられませんが……又之がなければどんな故障があつたかといふことも解りません。斯く申す私も苟も作戰課長を拜命して居りまして今自責慚愧の念に堪へません。扱て陸海軍の問題は此の為に少しも變つて居りません。どうも両者の間がどうしても巧いかなめといふのはどういふ訳が不明ですが、秩父宮殿下が只今でも御記憶になつて居らつしやると思ひますが、私が燵の傍にじだらくな恰好をして居る時に突然お出になりまして「どうしたら陸海軍が巧く行くのか」と仰せになりました。私の喧嘩ばかりをして居ることを御

日本は亡びて仕舞ふといふ感じが致します。

殿下 併し今の空軍を独立させる案は出来るとしても、それが為に益々三者が鼎立して具合悪くなつて行くといふやうなことはありませんか。

河邊 それは何んとも申上げられませんが……併しそれは人の關係だと思ひます。「ドイツ」の陸軍の参謀総長が「日本に於て陸軍の航空部隊と海軍の航空部隊と二つに分れて居るといふことは必ずしも理由なしとは思はないが、其の後の方即ち補給源も亦二つに分れて居るのは、之は吾々が過去に於て既に誤つて来たと思ふことをそのまゝやつてゐるやうに思ふ」と言ひました。

空軍の独立によつて、さつき殿下の仰せのやうな害を生ずる心配はあると思ひますが、例へば現在の「ドイツ」空軍長官「ゲーリング」の如く政治的手腕と同時に信望があり、又国家国軍の為め空軍の使命を的確に認識して居る人があつたら心配は要らぬと思ひます。斯ういふ人が三軍を合体した参謀総長になればよいと思ひます。然し現在のやうに我利々々ですと三者が分裂するといふことになりません。

實際残念に思ひますのは、民間の人で私に空軍の建設問題を憑憑した人がありますが、其の人は現在のやうな状態に於かれては資材の配当といふ見地からしても陸、海、空軍が一緒になつて呉れなければ民間が非常に困ると言つて居りました。

洵に相済まぬことですけれども……之は殿下には恐縮なことでありますけれども、陸海軍がごたごたして居つて一寸話が纏らぬといふ時に、皇族方にやつて頂ければ良いと思つたことが度々ござい

覧になつて居らつしやるので、私をお叱りにいらつしたと思ひます。私は直ちに其の時に申上げたのは「到底今の儘では私如きものにはよくやつて行けません。秩父宮殿下が参謀総長にお就りになり高松宮殿下が軍令部長にお就りになつた時でなければ駄目です」と申上げたから、「さうか」と仰せになりましたが、その頃私はつくづく是程こじれつた状態といふものは今迄はなかつたと思ひました。それでもまだ喧嘩して居る時は良いのですが、段々と其の喧嘩が深刻になる時は逆もみつともなくなりません。

殿下 大本営を仕組んだ時は、之で陸海軍の關係は円滑に行くといふ考へではありませんでしたか。

河邊 さういふ風な期待もありましたが、一步もよくならず却て逆行退歩の感がありました。

それから少し話は前のことですが、私は部長の兼任といふことを言ひ出したことがあります。之は部長が陸海兼任をして本当に膝付合はして相談する機構にしたらどうだらうといふのでありますが、之は採用にはなりませんでした。

殿下 参謀本部と軍令部とを一緒にすることは出来ぬものでせうか。

河邊 私は空軍を建設すると同時に三軍の合同参謀本部を作れば、今のやうな陸海軍をも一緒にすることが出来ると考へます。

参謀本部と軍令部を一つにするに就ては、其の参謀総長は誰になすかといふのに問題がありませうが……それは初めは海軍の方にやつて頂いて後で陸軍の大將がなられるといふ風にして一向差支へないと思ひます。兎も角もう少し両方を公正に見て、両方とも自分といふことばかり考へず真に大局の要求するところに進まなければ、

殿下 対立して仕舞つたらお終ひですからね。

河邊 余談で甚だ相済まぬのですが、私が「ベルリン」に居る時に所用ありまして「イタリー」に参り、「ローマ」の我が大使館で駐独伊の我が外交官と陸海軍武官が集まり、色々話が出た後に空軍問題が出まして、或る外交官が「日本に空軍を作つたらどうですか」と言ひましたので、私は「大賛成です」と言ひました所、私の前に座つて居りました日本の海軍武官は「空軍を作つたら其の大臣は陸軍で取らうといふのでせう」と直ぐ言ひましたので実に不愉快になり話をやめました。まあ私の僻みかも知れませんが海軍心理の一つだと考へざるを得ませんでした。

杭州湾上陸作戰

殿下 杭州湾の上陸のことに就て戦争指導班は余り關係しなかつたのですか。

河邊 余り關係致しませんでした。純作戰的な考からやつたのだと思ひます……あれは秘密はよく保たれた作戰だと思ひます。非常に注意深くやつて、部内でも殆ど第三課と第三部だけでやつて居りました。

殿下 あの時分に部長が變つて居りますが……あれで所謂対支主作戦は中支に移つた観がありますが……それに対してどういふ感じを持つて居られますか。

河邊 部長が替りまして、程なく編成が變り、第二課は戦争指導班と作戰班とから成り、私が其の課長を命ぜられました。そして中支方面軍が出来てこゝに上海を完全に封鎖し、浙江財源を南京から断ち切ると同時に増集して居ります約七十師を敲きつけるといふこ

となり、大規模の上海作戦が本腰になってやられたと思ひます。

殿下 そこで中支に対する目的は変つたではありませんか。

河邊 はい、さうです。

殿下 初めは居留民の保護をするといふことだったのが遂に上海を孤立せしむるといふことに變つたではありませんか。

河邊 はい、さうです。

殿下 その頃第二課長になられたのですね。

河邊 第二課長になつたのです……第二課に作戦が入つて来たのです……結局昔の編成になつて来た訳です。戦争指導といふものと作戦といふものとを纏めて、一つの課長の下にやらせたら何とかか折合がつくだらうといふ理由で一緒にになりました。

殿下 中支に變つて行つた時の気分は部長更迭が大きな原因をなしに居るではありませんか。

河邊 私はさう思つて居ります……参謀本部の聲が高くなりました……それから北支軍あたりは兵隊を幾らでも出してやらうといふ気分になつて来ました。

殿下 それで第十軍が出来てから指揮關係で問題があつたやうですが……

河邊 私が作戦の方もやることになる前です……直接には「タツチ」して居りませんのではつきりは聞いて居りませんが、柳川〔平助〕閣下と松井閣〔石根〕とは前から仲が悪いといふことを聞いて居りました。

第十軍の進出方向及南京追撃

殿下 それから第十軍が行つてから作戦をやられたのですか……第

十軍が上陸を始める前、進出方向に就て問題が起つて居りますが其の経緯はどうですか。

河邊 松井閣下の上海派遣軍が方面軍になつた時は、参謀長は塚田〔攻〕少将でしたが……之は最も中央の企図をよく了解して居られるといふので出て行かれたのですが……

当初の柳川兵団の運用、其の後の作戦指導といふものは……松井方面軍司令官以下中央の気分をよく飲み込み、中央の意図の通りになつて居りました……塚田参謀長も「柳川兵団にどうしても言ふことを聴かせんならぬ」と努力せられて居りました。そこで初めにあそこへ上りました当時は、松井方面軍司令官は主力を上海に近く引張つて来るといふことを考へに持つて居られました。所が上海は柳川軍の上陸と前後して敵の総崩れとなり、爾後如何にすべきやを現地とも相談するため私は命ぜられて上海に参りました。其の時の現地の気分を申し上げますと、軍司令官は依然積極的な考を持つて居りまして……「大丈夫南京は取つて見せるから是非やらなくちゃ不可ぬ」といふ非常に熱心な御意見でありました。但し「只今は軍隊が疲労して居るから、今直ぐにとは言はぬ」と言はれ、それから参謀長の気持も「もう兵隊は相当疲労して居る」と言つて居りました。

他の司令部に就ても、西原〔一策〕上海派遣軍参謀の如きも「師団司令部あたりが軍司令部に文句を言ふやうになつては駄目だ。今迄何の文句も言はず黙々服従して居た第九師団がぼつぼつ文句を言ふやうになつたのは疲れた証拠だ」と言つて居りました。又塚田少将は「非常に軍も疲れて居るから何処かで一端停止しなければならぬ」と云ふことを言つて居りました。そこで大体当時中央の案でありました蘇州、嘉興の線で兎に角一遍停止整頓しようといふ氣であ

が行く前から積極的ではなく、某範圍を劃して軍を一旦集結する考へで居られました……部長はさういふつもりで見て来て呉れといふ話でありました。

然し大体に於て部長は中支方面に対して非常に積極的でありまして……戦況に就ても前から看破して居つたのではないかと思ひます。

殿下 蘇州、嘉興の線がなくなつたといふ経緯はどうでしたか。

河邊 大した経緯はありません。中央では近く廣東の作戦を企図し、重慶〔千秋〕支隊と第十一師団を南方へやるといふ考案でしたので、松井方面軍の兵力は減るし、南京に急迫といふことは簡単に往かず、先づ一応蘇州、嘉興の線で次期の準備をしようといふことと此の線は決まりました。

殿下 さうして此の作戦地域を廃するのは事実部隊が出てからです。

河邊 あれば部隊で出る前だつたと思ひますが……

殿下 出てから廃止したといふことになつて居りますが……

河邊 はあ、さうですか。南京作戦が容易に決しなかつたからでせう。

殿下 それから南京追撃ですが……追撃命令が出たのが非常に遅れて居るやうですが……

河邊 「敵国首都南京を攻略すべし」といふ命令ですか。

殿下 はい、さうです。

河邊 決心は何時ですか。

殿下 決心は……十一月二十六日かに内報を下して居ります。決定して居るのは十二月に入つてからです。

河邊 それは矢張り南京攻撃をやるかやらんかといふことが根本問題から論議がありましたから……。

南京攻撃に一番不同意だったのは多田次長です。積極的な考へをして居つたのは部長で「私が見て来てやらう」といふ意見でありました。次長は「戦面を拡大しては不可ぬ……此の蘇州、嘉興の線すら前過ぎるではないか」と言つて居られたやうに思ひます。それで此に就ては大分永い間次長からお許しが出なかつたのです。私はずつと前から南京はやるべきであるといふ意見でありましたが、軍そのものの能力如何の見方は現地で得た印象から部長よりも稍々低くありました。然し帰任後現地の意見に従つて、それから直ぐにやらうと部長の意見に賛意を表しました。部長は度々次長に意見を述べべられました、「ただ現地側の強硬な意見に動かされて大局上の不利弊害を忘れては不可ぬ」といふ次長の御意見で、仲々お許しがないのです。併し執拗に部長が意見具申をされたので遂に御採用になつて、二十六日次長の名前で内報を出したのですが……それが為に遅れて居ります。然し其の時も次長は非常に躊躇されました。

部で武藤副長と話をした時、雑談に副長は「南京をやつたら敵は参る」と申し、私は「南京はやらなければならんがやつても蔣はまだ参らんよ」などと水掛論をやつたことを思ひ出します。

殿下　其の気分は東京でも現地でも同じやうに持つて居つたのではないのですか……当時山東問題があつたやうですが、之も振り切つて上海に持つて行つたら敵は手を上げるだらうといふ考へがあつたのではないのですか。

完全に封印し、首都を陥れ、同時に南方の大切な呼吸口を塞げるだけ塞がうといふのであります。然し其の時には戦面が広いものですから作戦上の技術的にも容易な作戦ではありません。仲々困難なことがありました。

殿下 海軍の意見具申が之を促進した動機になつて居りますか。

河邊　海軍は、当初から此の作戰には非常な乗氣ではありません。南支作戰は矢張り之は戰爭指導課あたりの主張に依つて其の機運が向いて来たと思ひます。生意氣な申分ですが、私が作戰をも分担するやうになつてから之をやるやうに具体的に進んだと思ひます。前から私等が主張して居りました時、即ち私がまだ作戰を分担致しませぬ前には「勞効相償はない」といふやうな第三課の反對的意見がありました。

殿下 あのために御前会議をして居りませんか。

河邊　あのためにの御前会議はありません。

殿下　あの……南支をやることは海軍其のものは初めは同意して居るのですが……それを止めるに至つた動機は色々其の理由はあるでせうが……あれに就て何か……。

河邊　後から色々雑音は聞きました……突然或る日、海軍の作戦課長（福留繁）が中止又は延期論を持って来ました。彼の言ひますのには、実は方面艦隊から参謀が軍令部へ中止の意見具申を持つて来て、軍令部で大いに研究した結果是を認めることになつたから、陸軍も同意して呉れと云ふのであります。

殿下　丁度あの際に「パネー号」事件なんかがあつたが……それに
関係してですか。

河邊 はい、さうです。

河邊 はい、さうです。

南京攻略と共に敵を参らせたい、之が為には同時に小さくとも廣東方面に一部隊の行動をやらせたら効果はあるだらう……斯う考へました。そこで中支方面軍から上申して来た作戰計画によりますれば、南京の攻撃開始は一月中旬でありますから、之に呼応して廣東方面に対する作戰を実施しようと企画しました。力強くない廣東作戦ではありましたが、南京攻略と相前後してやるならば敵側に与ふる衝撃力は相当に強いだらう、そこで南京攻撃が計画より稍々早くなることを考慮し、十二月二十五日頃に南支作戰をやらうといふ考へでありました……二十五日の「クリスマス」の朝やらうといふ考へでありました。作戰問題に関して私のやうな下級のものに総長殿下が直接に仰せになりましたのは唯一回でありましたが……「南京よりも前にやらなくちや不可ぬよ」と仰せになりました。それで其のつもりで準備を進めて居りますと、幸か不幸か南京は予定よりも一月も早く取れて仕舞つたのです。

それでも南支作戰は意味がある。首都の攻略によつて敵には勿論内外に対する刺激は大きなものがあり、ぼつぼつ構和问题もほの見えて来たやうであり、此の時機に決行するのは益々成果を大きくする所以だと考へまして、その儘予定通りやるつもりで居りました所が、それがすつぱりやめることになつたのであります。

殿下　今の南京と南支は策応して考へて居られたのですが……之を策応せしめる目的はどういふ所から生れて来たのですか。

さういふことが矢張り海軍の方に影響して居ると思ひます。海軍の出先から意見具申を述べて来て中止されたといふことになつたのであります。

殿下　陸軍の方の實際の目的は航空基地の占領といふにあつたのに、其の航空部隊の主力たる海軍が反対したら目的の達成が出来なくなつたということになるのですか。

河邊 はい、さうです。

航空部隊の主力は海軍のものを胸算して居りました……つまり人の揮で相撲をとるといふことになるのです。

殿下 其の発意は陸軍ですか。

河邊 はい、そうです。

殿下 海軍が同意したけれども、後でまだぐずぐずして居つた訳ではないのですか。

陸軍の作戰を何か拘束したいといふ意向があつたと思ひます

……そういう風なことが先入主になって居つたと思ひます。

又私の実際の考へでは、**陸軍**にはそれだけの航空兵力の余力が今

はとてないから、陸軍部隊で航空基地を確保し海軍の航空部隊の一部と共に、九龍鉄道の遮断を行ふと共に廣東への脅威を与へる程度に考へて居りました。海軍の中央の方では当初同意して事を進めましたが、出先では航空の威力といふものはそんなに強いものぢやなし、又此の香港真近で「パネー」号式飛火は避け難い、如何に注意を加へても不慮の事件は保証が出来ぬと言つて来たらしいのであります。又海軍中央でも、陸軍は当初の言ひ出しは如何様にあらうともきつと其の中に廣東方面に戦場を拡大する下心があるのだと心配して居たやうであります。

殿下　それが止めになった時に、中止が延期かと云ふことの真相はどうですか。

河邊　中止か延期かと云ふことが問題になりました。

さつきも申しましたが、それは十二月二十日頃だと思ひます。軍令部の課長が来まして……夕方でありましたが……何時も笑つて来る男が其の時は不愉快な顔をして……今の中止の問題を言つて来ました。其の理由を聞きますと……其の経緯は、方面艦隊とさうして軍令部とが非常によく研究した結果、総長殿下（伏見宮博恭王）も之をやめることを是として御決裁になつたと斯ういふことを話しました。私は今に及んで之を云ふ彼に對しまして頗る意外の旨を述べますと共に「パネー」号の如き問題も最初から吾々は十分に考慮し、従つて統帥命令に不必要とする制限など……つまり詳しい指示が出されて居ります……を附けられであるのぢやないか、それを今更おかしいではないかと頻りに述べましたが、彼が英と米と合同海軍力のことなどを並べてどうしても実行は出来ないと言ひ、中止が無理なら少し「ホトボリ」の冷める迄延期して呉れぬかと云ふのであります。

私は斯うした大問題を自分の一存で「イエス」とも「ノー」とも言へぬから、兎に角一応上の方へ海軍の意向を報告すると答へました訳ですが、実は諸部隊は二十二日に高雄附近に待機集合する為に既に航海中のことであります。延期と言つて何時迄といふ基準も得られない次第でありますから、私は第一案決行、第二案は止めるといふ案で……課の者と相談をして、それを次長に申上げました（當時部長は病気で休んで居りました）所が、次長も大いに困惑せられた結果やはり第一案決行、第二案中止論で海軍の次長とも協議せら

出師準備

殿下　出師準備といふものに就ては非常に不足だつたといふのであります。特にどういふ点が悪かつた或は将来どういふ点に注意しなければならぬかといふお考に就て何か……。

河邊　彈丸基数あたりは、余程前ですが前の欧州大戦の直後程なく作戦準備研究委員会とかいふものが出来て居りまして、今の航空本部の鈴木（幸道）中將等が中心になりまして研究せられ彈丸の基数といふものなども決つて居つたのですが、事實はそれに應ずる現物が出来て居らない……又其の基数に依つては上海の戦線では非常に不足だといふことを発見しました。それで兵站の連中は非常に悲鳴を挙げまして、もう一ヶ月も大場鎮の占領が遅れたら大変だつたらうと思はれる位に彈丸の準備は出来て居りませんでした。又あゝ云ふ戦でありますので、彈丸の比率即ち輕砲と重砲、榴散弾と榴彈といふやうな比率は、前に考へられて居つたのとは全然違つて現はれたやうであります。勿論研究されて居つたことではありませうが、あゝいふ特別の上海の作戦に應ずるやうなものが事實の上に出来て居なかつたのであります。實際に於て非常に其の準備が足らなかつたのであります。

それから南京が済んで爾後逐次軍備の充実、つまり漸次新しい師団や部隊を作らなければならぬといふことになりました時にも、之は私自身も驚いたことでありますが、小銃が足らなくなつて参りました。まさか小銃がと思つて居りましたが、之が一番先に足らないと云ふ事實が現はれて来りました。

それで中学校の教練用の小銃を引上げるかといふ話もありました

れましたが、私等課長相互の話と全然同様でありますし、聞けば本日宮中であつた機会があつたらしく、其の際參謀総長は直接軍令部総長に御同意を表されたと云ふことも聞きました。

そこで先づ実行はせぬことに決められ、全然此の際この作戦を中止することにするか又は一時延期といふことにするかは課内でも論議があり、私は此の際あてどもなく延期などとは言はず「止める」といふこととしそして第十一師団を滿洲に転用、重藤支隊は現地に於て復員して仕舞ふと考へ、これは課内で井本（熊男）大尉も主張して居りましたが、併し結局私が軟弱で大勢に引き摺られ、作戦を止めるといふことは余りに潔癖にすぎる……それから止めて第十一師団を滿洲にやることは支那軍に對しても恰好が悪いといふので、一時的中止延期といふことに致しました。此の意見を次長に申上げて承認を経たる上海軍にも通告し、直ちに台灣軍には「別命ある迄発進を待て」といふ大作命を出すこととせられ、各部隊は台灣に上陸することになつたのであります。もともと此の作戦に就て熟慮し準備して海軍に同意をさせたが、實際に及んで斯ういふ非常に拙いこととなり洵に申訳ないといふ自責の念にかられました。

殿下　其の後遂に海軍の方ではやる決心をするに至らなかつたのですが、之はどうですか。

河邊　結局私の在任間には再興の論も起りませんでした。ともかく海軍は無線電信一本で直ちに中止、再興は出来ませんが、之式に陸軍の統帥指揮を考へてやつて来られると実に困るのであります。

殿下　其の頃海軍は青島に問題があつたと思ひます。
河邊　さうであるかも知れませんが、私はそれと関係があるとは考へませんが……。

が、之には陸軍省でも不賛成でありましたし、私もそれを引上げるのは余りに貧弱なることの暴露で、戦争が始つた許りにいきなり学校教練用の小銃を引上げねばならぬといふことは、国民に對してもどうも適當でないと思ひました。そんなことで外国から買ふといふことになつたやうであります。

當時野砲の余裕はありました。特に三八式野砲は残つて居りました。其の外に存外輕易な武器に於て方々で不足を生じ、而もそれが軍需動員の未だ十分整理されて居らぬ時期に要求されて来ましたがのですから非常に心配させられました。其の頃のことは誰か御進講申上げたと思ひますが、今の燃料廠長、當時陸軍省の戦備課長長谷川（基）大佐がやつて来て「自分でも自信を有つて居た軍需動員が職工が思ひ以上に多数召集された為に田舎の工場あたりはとても予定通りに動かなくなつた」と申しました。斯んな状態が開戦後二・三ヶ月経つてから判りました。

今後はあゝいふことは大いに考へられるだらうと期待して居ります。斯ういふ風に民間工場の職工を二も三もなく兵隊に取り上げるといふことをした關係で今日も非常に方々で困つて居るやう聞きます。それで当初先づ必要な武器關係の軍需工場に欠陥が出て来たので早速動員主務課の方へ何んとか之をもう少し緩和する方法はないかと言ひました所、今の規則上急速に改変は出来ない。併し今後主なる者には多少手心を加へる考案を立てると申して居りましたけれども、矢張事務的には聯隊区司令部で急に大きく切り換へることは出来ぬといふやうなことで思ひ通りには参りませんでした。さういふ風に人員の關係——動員の組織と言ひますか——さういふことは此の武器彈藥のことに見ましても兎に角大規模の戦争を行ふ態勢

——準備的事項が整つて居ないのに戦が始つたといふことは言へるのであります。でございましてから實際思ひ切つて相手を敵かうといふ案——之をやるといふ案を出しましても恐らく實際はそうは出来なかつたらうと考へられます。だからちびりちびり出して終にはどうしてもやらなければならぬといふことになつたと思ひます。殿下 輸送力の關係で兵力を一遍に持つて行けなかつたといふことはありませんか。

河邊 私輸送力の關係で或る限度しか送り得ないといふことは聞きますでして。

対「ソ」判断

殿下 それから対「ソ」關係を終始考慮し心配して居りましたやうですが、其の結果が悪い言葉で言へば兵力の逐次使用になりあの不拡大方針を捨て切れなかつたといふことはありませんか——。即ち支那に対しても積極的な意味でなくて二正面作戦を避けるといふ消極の意味でもつと速戦即決に持つて行くとか、或は対「ソ」問題を支那事変を完遂する為に思ひ切つて執るべき方法があつたかどうかといふ問題に対しては如何にお考へになりますか。

河邊 私は今からそれを思へば後の方で殿下が仰せられましたことが至当であらうと思ひますし、又それも可能であつたらうかと存じます。当時吾々は「ロシア」に対する認識が足りなかつたのであると申したいのであります。又相当な考へがあつたとしてもそれに徹底するだけの用意が吾々になかつたのであります。私は戦争指導の課長をやつて居りましたのでさういふことを最もよく考へなければならぬ立場にあつたのであります。私は前に「ロシア」に居つ

まらんといふ氣になつて前の構和问题もつと巧く行つたかも知れません。兎も角国防の實力と其の機構態勢に於て特む所が少くしてははつきりした考へを定めて進み得ないものであることを熟々考へさせらるゝ次第であります。

中支に対する觀察

殿下 今と関連して北支では敵を逐つて段々南下して行く當時に不拡大といふ点から上海への飛火を努めて避けるやうにして居られたことは判りますが、之は結果論として寧ろ初めから対支作戦の重点は中支である、依つて作戦重点を中原に置くことに依つて敵を参らすといふことが出来ると云ふ考へから、中支に主力を持つて行けば北支の敵は寧ろ後へ退るといふ考案はなかつたのですか。

河邊 私の方ではさういふ考案はして居りません。

但し稍々あとになつてからではあります。一部の意見としてさういふことを言ふ人も居りました。

長期に亙る根本計画

殿下 中央の方針として自主的に長期に亙る根本計画といふものはどの程度に立てゝあつたのですか。

不拡大、現地解決といふことを初めは方針として居り其の後にも不拡大といふ方針を堅持せられて居りましたが此の不拡大といふことは希望と見るべきであつて——相手のある問題ですから——所謂不拡大といふ希望と同時に拡大することあるべき事実に即した方針があつて然るべきではないかと考へるのであります。所謂北支処理方針といふものはありますがあゝしたものが他に何もあつたのですか。

た時代の印象から前にも申し上げましたと思ひますが、「ロシア」は大丈夫だと思つて居りました。それは「ロシア」は日本が南の方即ち支那に向ふことは喜んで居ると信じて居たからであります。併しさうは思ひ乍らも万々一立つて来たら日本は非常に困るといふ不安感的の心理が働いて居りました。そして当時若しも「ロシア」が立つた場合に日本の軍備態勢はどうなるかといふことに就て私は必要以上に内容を知り過ぎて居りましたので心配が多く後髪を引かれる思ひでありましたから、結局何れにも徹底した意見を立て得られないと云ふ私自身それを認めて居たのは事実でございます。当時一般の人は私個人よりもつと余計に「ロシア」を恐ろしく見て居られたのでないかと思ひます——。「ロシア」の出て来る公算が頗る多い——斯ういふ風に見て居られた人の方が多かつたと思ひます。それは然し大体の觀念論からでありましたが、それ迄「ロシア」は政治問題に強硬な態度を執つて居りましたから此の際積極的に出て来るだらうといふ判断をして居る向は相当にありました。それで「ロシア」に対する態勢を出来るだけ崩さない程度に於てやらう、又其の程度に於て支那をやつつけやうといふ考へ方が支配的であつたと申し上げたいのであります。其の時にもつと徹底した考を持つて居つて「ロシア」が入つて来たならば此方は守勢を取るの肚を決め關東軍の貯蓄して居る武器彈藥を支那に廻はして来て徹底して支那をやつた方が良かったかとも思ひます。

斯様に「ロシア」と支那とを両天秤にかけてやつて来たといふことが蔣介石をして日本の足許を見透させて仕舞ひ、此方も逐次戦力を消耗し向ふに抵抗力持久力をつけて仕舞つたのだと言ひたいのですが、之を流行の新聞用語で申します電撃的にやれば或は之はた

河邊 あれが唯一の當時の方針であります。それで希望と同時に之が方針になりました不拡大といふことから兎に角此方側としても戦争を拡大しないといふ考へ方であり——斯ういふことが殆ど原則になりました——殊に之は多田次長は其の方針を堅持して居られまして、南京に行くことなど非常に躊躇されました位でありますから、此方から進んで大きな手を打つといふことは努めて避け止むを得ざるに及んで逐次に抜けて行くといふことになつたのであります。従つて長期に亙る計画といふものはなく先づききに申しましたところの半年と其の次の半年といふ具合に半年づつ刻んで居ります。そして第三期の半年といふものも当初は曲線の下るべきものとして立案したのであります。

殿下 それは企図ですか。

河邊 はい、さうです。企図として一年もたつたなら今迄一師団を持つて行つた局面には四分の一師団で賄はう、又賄へるだらうと考へたのでありまして當時のことを憶ひ出して見ますれば吾々も亦何ば何でも一年も過ぎたならば先づ大体守備的占拠に必要な兵力を出して置いて事が済むだらうと、そこに仰せのやうに希望に捉はれて前途を樂觀して居たのであります。

殿下 不拡大方針でやつて行くといふ場合に於ても若しかするとそれが長期持久になるといふことは考慮せられると思ひますが、然らば其の長期持久に対する計画といふものはどうでしたか。

河邊 皆さういふ点に就て、——或る時期からは戦争指導上の見地に於て特に対内的人心統一の観点から長期持久の覚悟を要することと言ひ出しましたが、併し長期持久に対応する為に具体的の問題にどれ丈の準備をせられたといふことは余りなかつたのであります。

今の軍需動員計画はもとも其の心組みの下に出来たのでありませうし、国家総動員法にしろ企画院或は資源局の調査及作業にしても追々進んでは来て居たのでありますが、ほんとの長期戦準備に就て具体的に何処をどうしたといふことは私ははつきり申し上げられせん。

上海派遣軍と第十軍に就て

殿下 それからさつき大場鎮の時のお話に出たのですが……此の時は第十軍の派遣といふことに依つて上海派遣軍が戦場心理上焦り出したといふ感を呈して居るやうに思ふのでありますが……又それから其の後の上海派遣軍の企図と第十軍の進出方向といふやうな關係で始終色々な問題があつたと思ひます。其の点如何ですか。

河邊 此の点即ち松井軍の心理は私の記憶に残つて居ることを申し上げる材料はありません。今殿下が仰せられましたやうにどうしても松井軍だけでは大場鎮は抜き切り得ず、遂に柳川軍の作戦を行はるゝに至つたといふことは松井軍にとつては非常な苦痛であつたらうと思ひます。だが元々第十軍は松井軍を刺戟する為に出されたといふやうには何つて居りません……第十軍は上りまして非常に調子よく参りますし、すべての意見は極めて積極的且威勢のよいものでありました一方松井軍……方面軍ではありません……元の松井軍即ち上海派遣軍の司令部に私が参りました當時に印象は申し上げましたやうに、當時飯沼〔守〕参謀長の下に西原大佐、川上〔清志〕中佐等の人々が居りましたが……今言ふと怒られるかも知れませんが、追撃戦になつて居りまして志気は寧ろ沈痛といふやうな風で一方から言へば非常に疲勞して居られると感じました……言

ひ過ぎかも知れませんが敵情を過大視する、さういふ気分があるやうに思はれました。それに反して第十軍は南京追撃の決心など非常に威勢の良いものでありました。経過した戦況が部隊及司令部の爾後の心理に大に影響するものであることがよく判ると思ひます。併し何しろあれだけの苦戦をして一日に百米づつしか前進出来なかつた上海派遣軍に対しては誰も彼も同情は致して居りました。さういふ風な状況を現地で見て参りましたから私は僭越でありましたが朝香宮殿下が軍司令官でお出になる其の時に「何か課長——部長代理——から聞くことはないか」との御下問がありましたから「悪口を言ふのではありませんが……率直に申して殿下の隷下に入ります兵団も司令部も心身共に非常に疲れて居るやうでありますからお含みの上御督励頂きたい」と云ふことを申し上げました。當時はそれ以上に支那軍も苦しかつたものですから段々退却して支離滅裂になりましたので、矢張り、何んと言つても追撃しなければならぬと決めたのは至当のことであつたと申したいのであります。

構和问题

河邊 それから後、前にも申し上げました「トラウトマン」の構和问题であります。「トラウトマン」があそこで口出しをしたと云ふことは誰か殿下に申上げた人がありますか。

殿下 いや、ありません。経緯に就ても色々電報を見ましたがよく判りませんでした……。

河邊 私自身「トラウトマン」が仲介に出るやうになつた出発点が支那側にあるのか日本側にあるのか、若し日本側とすれば誰が之を仕向けたのであるか今も一切存じません。疑問で居ります。只之は

全くお含みにお聞き願ひ度いと思ひますことは、次長が私に起案を命ぜられたもので當時伯林の大島〔浩〕武官（當時は未だ駐独大使にあらず）に電報を打つたことがあります。當時部長は石原少将でありましたが次長からの電報として「適当ナ時機ニ——日本ニ取ツテ有利ナ時機ニ支那ト構和ニ入り度イガ「ドイツ」側ニ此ノ斡旋ヲヤツテ呉レル氣ガアルカナイカト云フコトヲ知りタイノダ」と云ふ意味のものであります。當時大島武官からはそれに対して返電は来て居らぬやうに思ひます。又どういふ工作をせられたかも存じません。其の後私が伯林へ行きましてから何の話も聞きませんでした。さういふことは極く内緒で……石原〔莞爾〕部長、多田次長……私と三人しか知つて居らぬことと思ひます……。或は中島〔鐵蔵〕少将（當時総務部長）も少少位は知つて居られるかも知れませんが……そこで之との關係の有無は不明ですが其の後ズツと遅れて私は外電の傍受で始めて「トラウトマン」の問題を知りました。それは南京に居つた「アメリカ」の領事か公使かが「今、日支の間に「トラウトマン」駐支独大使を通じて構和条件の問題がある日本側は斯う云ふ条件を出して居る」と言つて数ヶ条の案件の電報を打つたのを参謀本部で傍受しました。それに従つて私は始めて「トラウトマン」が工作して居ると云ふことを知つた次第であります。所が其の時に之が省部の間に大きな「センセーション」となりまして一番初め疑を蒙つたのが私であります。石原少将のことを当時軟弱だから——ひどい言葉であります——「敗戦主義者」と言つて居た者すらありました……其の時は転出して居られなかつたので……そこで私は「敗戦主義者」の残党のやうに見られたのでせうか——。先づ私の内部工作とでも疑はれ「之は兎に角第二課長が臭い」といふ

ことになつたらしく、陸軍省の諸君と會議することとなり最初に次のやうに詰問を受けました「此の問題は第二課長は知つて居られるでせう——知つて居られることを吾々には言つて呉れぬのか」と言うのであります。併し私は實際に知らないといふことを述べますと、そこで参謀本部でなければ之は外務省だらうと云ふことになり廣田外相の工作だらうと云ふ話でありました。所で私は今になつて推断されるのは或は廣田外相の工作であつたかと思つて居りますが、之は決して悪いことであるとは思ひません。寧ろ斯うして我が態勢の良い時機に和平工作を進めるのは外務当局の為政家として試むべき立派な一つの案だと思ひます。どういふ風な方法でやられたかと云ふことは存じて居りません。それから此の問題が起りました時に省部の間は矢張り氣持に於て二つの考へ方が対立したと思ひます。即ち「敵が弱氣になつた強い条件を出してへこますか聽従しなければ更に強力な武力行使をやるべし」と云ふ考へ方と「此の時機を失したら兎々長期戦に陥るから多少の不滿を忍んでも構和成立に導くべし」と云ふ考へ方でありました。

多田次長はあとの方の考へ方で非常に強硬な意志を以て、どうしても構和に導かうと云ふ氣持で動いて居られました。それに全然反対ではありませんがそれ程非常に進んだ氣持は陸軍省には動いて居りませんでした。

併し参謀本部、就中私等は兎に角持久戦になるといふことは頗る不利だと云ふことを考へて居りましたから条件なんか強過ぎることを言はぬで大抵の所で手を打つべきであり、之がまた東亜の大局から見て善いことだと思ひ之に努力致しました。然るに他の者には日本は戦勝者ではないか、だから取るものは取らなくちやならん、そ

れに依つて言ふことを聴かなければ更に降伏する迄やれば良いではないかといふ意見もありました。それで色々ゴタゴタがありまして政府との連絡会議でも屢々問題になりましたが、政府側ははつきりした定論……即ち政府として一致した方針が確立して居なかつたと思ひます。そこで参議の意見も聞き、又民間の反響をも収集して居たやうであります。参議中末次(信正)大將あたりは大に支那側を敲きつけろといふ、強硬な意見であつたやうであり、荒木(貞夫)大將などもさうであつたやうであります。「一番弱いのは参謀本部だ、軍人は一番強いのが当然だのに一番弱いと云ふことは怪しからん」といふ批難が立つて居たやうでありますが、多田次長は噂や批難に屈することなく真に大局的見地に於て此の際講和をすべきであると真剣に奮闘せられました。之等の結果から一応当方の講和談判開始上の基礎条件を示し、之に拠つて談判を開始する意図があるかないかを聴かう、そして其の回答要求に期限を附けやうといふ話になり、其の案を随分練り上げて先方に通ずる方法を執つたのであります。其の条件を作為するにも相当に探めました。そして談判が開始せらるゝやうになるものとして談判と休戦との關係をどうするかといふ問題もあり、私は其の前から清日露両戦役終末の史実をも調査して居りましたから其の例を参考としてやる案を立て、居りました。

殿下 其の時期限附の要求をしたのではありませんか。

河邊 はいさうです……。一月十五日ですが其の日には返事が来なかつたのです。上海へも之はなかつたのです。然し参謀本部は期限までの時間の關係もあり、又、支那側にとつても重大な諸案件が含まれて居るのであるから今少しく時を待つてやるか或は回答の促進

を図る方法を取るならば何等かの回答を取り付け得るであらう。今直ぐに支那側に和平を欲するの意図なしと断定すべきでないとして此の考で次長は軍令部次長とも打合せ兩統帥部の意見として連絡会議で主張せられましたが、政府側は最早支那側に誠意を認め得ずとし……次長から伺つた話でありますが……最後の時に米内海相が次長に対し「結局、参謀本部は支那側に誠意なしと断定せられぬのは外交当局たる外務大臣の判断と異なるものであつて外務大臣の判断を基礎として国策を進めて行くべき政府と反対の意見である」と云ふことになる。即ち参謀本部は外務大臣に対し不信任といふことと同時に政府を不信任といふことになる。さうすると統帥部と政府との意見が違ふといふことで戦争指導を統帥部と手を取つてやつて行けな」と言はれたのであります。次長は此の時「明治天皇は朕に辞職なしと仰せになつたと聞いて居るが、此の重大時期に政府の辞職々々とあなた等がお考になる氣持が判らぬ」と声涙共に下つた場面があつたのであります。

当時第一部長は居ませんでした……。私は部長がどうして居らなかつたのかはつきり知りませんが……。

殿下 部長が更迭して北支から未だ橋本(群)閣下は来て居らなかつたのではないですか。

河邊 あゝさうかも知れません。次長は右のやうに連絡会議が物わかれとなつて来たのを申されましたから私は政府の態度は威しだらうと言ひました。「講和問題で強いことを主張した政府が弱いことを主張した陸軍の意見で罷めるといふことがあつては非常に具合が悪ういといふことを見せつつ威して居るのではないか」といふこと

を申上げました。所が次長は「いや、さうではないらしい——近衛は本当に嫌がつて居るらしい」と言つて居られました。殿下 それには議會の關係もあつたのでせう。河邊 はい、さうです。「何かきつかけを作つて罷めたいらしいぞ何か外務大臣(廣田弘毅)は罷めるやうに決したと私に言つて居つた」と次長は言はれました。

さういふ悲劇までありましたが結局総務部長(中島鐵蔵)第二部長(本間雅晴)も同席協議の結果、此の際統帥部と政府との対立が外に現はれることは頗る不適当であるから政府に一任するといふ態度をとることに決められ、そして其の旨はつきり上奏しようといふことになりました。即ち参謀本部は信ずるところあるけれどもこゝに意見を固執すれば政府の立場上其の辞職問題をも惹起し内外に及ばず影響甚だ宜しくないと思ふから、本件政府に一任するといふことに致しますと云ふ意味を有の儘上奏することとなり上奏文も出来たのであります。所でそこで一つ奇怪なのは統帥部の名前で海軍も同じことを言はうと云ふ話で軍令部次長と話合が決まつたと聞きましたが、實際海軍の上奏は一寸時間が遅れて行つて居ります。其の内容は此方とは反対でありまして政府の意見に同意であるといふ意味になつて居ると聞きました。

殿下 葉山に行かれたのですか。其の時には外相の奏上前総長殿下が上奏するといふことで侍従武官府と何かあつたのではないのですか。

河邊 秩父宮殿下が葉山にお出になりましたことは知つて居ります——宮中ではなかつたでせうか——行つてお出になつて然るべき時節ではありましたが……はつきり記憶して居りません……

……。殿下 それから講和問題で同ひ度い点は南京をやる時機に何んとか事変を終結に導き度いといふ思想から南京を武力戦で圧迫した時機に、そこに講和問題を織り込ませると云ふ氣持はあつたのではないのですか。

河邊 さう云ふ氣持はありました。

殿下 事実は南京が先に陥ちて仕舞ふと云ふ状況となり結局南京作戦とは別物に話を進めると云ふことになつたのですか。

河邊 初めは南京攻略以前に於て南京攻略は何時でもやり得る態勢を取つて、講和の内探査といふつもりであつたらしいのですが、それと無關係に作戦はグングン進行し南京はスルスルと陥ちました。そこで今度は首都が陥ちた以上、此処らで何んとかすると斯ういふやうなことで話が進んだと思はれます。

殿下 其の講和問題と関連して事變の終結を結ぶと云ふ頭から南京追撃の許可が還延したと云ふことはないですか。

河邊 之は全然ないと思ひます。万一上の方にさう云ふ氣持があつたかも知れませんが……。私共の方ではさう云ふことは少しも聞かされて居りませんし、又考へては居りませんでした。

殿下 講和条件の研究が段々進んで来て居るのにそれを向ふに示して居りませんがあの経緯はどう云ふ風でありますか。

河邊 あれは随分こんがらがつて居りますが、要するに種々の意見が出まして容易に纏まりませんでした。例へば余り具体的に多くの条項を並べる必要はない、ごく題目的のことだけを先方に通じてあとは談判委員が出て来てから示せばよいぢやないかといふ意見もあり、或はそんなやり方では先方が不安でたまらないから談判を開始

しようと思ふ意志を持つ訳がない。少くも必要の条件を明示し談判を開始してから不信だと思はれるやうなことはないやうにすべきだとか、又例の賠償金を入れるか入れないかといふ問題でも参謀本部ではそれを入れるのは適当でないといふ意見でありましたが、梅津閣下は賠償金を取れと主張され昔から媾和談判の時に戦敗者が戦争費用を払はないと云ふことはないといふことを言つて居られました。結局あれは入れる案になつて居つたと思ひます。

殿下 交渉途中の頃向ふから受けると言つて来た条件は余程前に廣田さんが示された条件ですか。

河邊 吾々は知らなかつたのですが廣田氏が出したといふ条件は全てあれは廣田氏のみならず参謀本部なんかとしても考へて居つたやうな条件であります——非常に懸け離れたものではないと思ひます。

殿下 所がそれに対して廣田はその条件では南京は陥ちて仕舞つた以上今の状況に合はぬと云ふ考へであつたやうですが……

河邊 お前等は負けたのだからモット下手に出て来いといふ考へもあつたと思ひます。

殿下 南京を武力で圧迫し——之に伴つて和平の話を進めようと云ふことがあつたのでせうが——其の媾和条件は国内的に進展しなかつたと云ふ点はありませんか……南京攻撃も早きに過ぎたが外務省、陸軍省、参謀本部との間の意見が一致しない為に媾和条件が進まなかつたと云ふ所があつたのではないのですか。

河邊 南京攻略につれて多少内々で話を進めて居りましたが、南京の作戦が始まりましてからは少くも私等は事務的にも媾和問題どころではないと云ふ忙がしさでありました。

殿下 媾和問題はそつち除けになつて仕舞つたのですか。

居たとのことであります。

殿下 結局結論としては所謂統帥部と政府との連繋が悪かつたと云ふことになりましたか。

河邊 はい、さうであります。さうして勢に乗じて来るという心理的に強気が勝つて参りますと本当に敲きのめして向ふを軍門に降らすといふ気持が強くなるのだと思ひます。それだから何も此方から遠慮することがあるものと云ふ気持があつたのではないかと思ひます。向ふが降参した参つたといふ時にやつて来たら良いぢやないかと云ふ気持があつたと思ひます。威勢の良い時に自分から媾和に導くと云ふことは非常に難しいことと思ひます。

殿下 「ノモンハン」あたりも同じやうでありますね。

河邊 侍従武官府の四手井（綱正）大佐あたりも私の所へ参り……彼は戦史家ですから……昔の「フールドリツヒ」大王などは何時も媾和の時期をよく選定した、今非常によい「チャンス」だと思ふ。今は媾和のよい時期だ」と言つて居りました。所があゝいふことで結局不成功になつて仕舞ひました。

南京戦當時に強気に言つて居た人達の思想が二年半後の今日果して満足な結果を得られたかどうかと斯う云ふ風に私は考へるのでありまして、矢張り本当に意志の強い政治家——軍略も政略も解つて居る人——が居りまして、適当と考へる時機に自分の思ふことを断然しない限りは必ずつまらんことを繰返して居る丈だと思つて居ります。

さう云ふことが出来ないと云ふならば初めから考へを決めてやると思ふことが必要であります。向ふを武力で抑へて頭の上らぬやうにして置くと云ふことも必要だと考へて居ります。

河邊 はい少くも私等はさうでありました。之は戦捷気分が酔つたと云ふよりも南京後の追撃戦、「パネー」号事件、英艦砲撃事件、「バイヤス」湾作戦問題等仲々の忙がしさでありました。

殿下 南京が落ちてから其の効果を利用して何んとかやうといふ考へはあつたのですか。

河邊 はい、さうです。南京が陥ちたら蒋介石も何んとか考へるだらう、彼が下野する公算は非常に多い、何と言つても首都を敵に屠られて彼は国民に対しても晏然とは居れぬだらう、さうすれば彼のを引き受けた者は平和を請ふであらう……斯んな風に私は思つて居りました。所が南京は取られたに拘らず支那側の態度が變らず、談判の基礎条件にも敵は参つたと云ふ気持が見えない。だから之にはもつと敗戦感を与えるようにひどく追込まなければならぬと云ふことを言つた人もありました。

殊に政界参議あたりにはさういふ感じがあつたやうであります。更に私は当時の所感として記憶に残つて居りますことは日本の政治家は無暗に右翼系の鉄砲の弾丸を怖がつて居る。だから口で強さうに言つて居れば大丈夫だと考へるように思ひました。よく考へて見ますれば軍人が長期持久戦を心配する以上に文官が之に關して深思熟考すべきではないか。戦期の長びくことも戦面の拡張をも考へず、只相手を敵けといふことは間違ひだと思ひます。私は当時の印象ではさう云ふ風に思つて居りました。之は手前味噌かも知れませんが或る民間実業界の紳士は——政界に關係して居らぬ人ださうです——次長の所へ来て「私は参謀本部の主張を承つたがそれに対して同意すると云ふよりも非常に感謝して居る、大本営は国家全般のことを考へて戦争やつて呉れるので有難い」と云ふことを言つて

殿下 媾和問題期限附の要求は相手の態度が不遜だから出したのですか。又其の回答らしきものが来ましたが其の時に陸軍はもう二三日待つたら良いではないかと言つて居るが其後實際更に回答は来しましたですか。

河邊 其の後結局回答は来ません。十五日が期限でしたが……十六日と記憶して居りますが、「蒋介石を相手にせず」と云ふ声明を出して居ります。十六日にも回答は来ませんでした。期限附といふことは私の記憶に間違ひがなければは参謀本部が言ひ出したことではないと思ひます。

初めに先方が媾和談判の基礎条件として応ずると言つて来ましたがその言ひ方が怪しからんと云ふことで、問題にせぬと云ふ空気が出ましたが冷静に研討すればそんなに怒るべきこともないと云ふことになり、兎も角之を幾らか修正補修し期限を附して回答を求めようと云ふことになりましたが、結局回答は期限までに来ませず、その後も参りませず、而も逸速く「蒋介石を相手にせず」と声明せられましたから、仮令その後に来たとしても之は取り上げぬと云ふことになつた訳であります。

殿下 其の頃に戦争指導班で媾和条件を起草して居りますがあれは向ふへは行きませんでしたか。

河邊 結局あの形では出て行つて居りません。

尚何んとか支那側の回答をとるために日本に大使として来て居つた許世英を通じて動さうといふ考へもあつたと思ひます。即ち日本を疑ふ必要のないことを伝へるといふ案もありましたけれどもさういふ風にならずに済みました。

殿下 其のずつと前未だ石原閣下が居られた時分に直接南京に乘込

んで媾和談判をやらうと云ふ問題がありました……。

河邊 はい、ありました。八月頃だったと思ひます。あれは石原閣下の発案でありませう。それには今田〔新太郎〕中佐あたりも非常に気合をかけて居りました。

要するに事態の拡大の虞があると云ふので考へられたのです。

閣下 上海に事件を起すからといふのです。

河邊 兎に角相手の気持で……今にも事件が起るぞと云ふ風な気がする、之に引き摺られてズルズルと戦になると云ふことは甚だ相済まぬから兎に角やるのかやらぬのかと云ふことは本当に大政治家が向ふへ行つて突つかつて見るべきだと云ふ、石原閣下の考であつたと思ひます……。多少策動されたいのですが……私は「さういふことを言はれますけれども日本の政治家ぢやそれはやり得ますまい」と言ひました。今田も多少策動して居つたと思ひます。秋山定輔が手裏を求めて南京へ行くと云つたけれども結局それも有耶無耶になりました。

私は石原少将のやり方を讃美する訳ではないのですが、あれは「ヒットラー」式のやうにやると云ふのが石原少将の考へでありました。

閣下 軍部の人が飛んで行くと云ふ考へはなかつたのですか。

河邊 なかつたと思ひます。石原少将は近衛総理大臣が行かなくてはいかぬと強調して居りました。

戦面不拡大方針決定の経緯

閣下 それから、あの前後に——二月上旬に——戦面不拡大方針と云ふものを決定して居りましたがその経緯はどうですか。

「斯う云ふ訳で二月末から三月初にかけて廻つて来ました其の時各軍司令官の大体言はれたことは、「よしそれぢや文句を言はぬ、其の儘大本営の仰せの通り承る」と言はれましたが寺内〔寿一〕閣下は斯う云ふ風に言つて居られました。「無論大本営の示されることに反対はしないが意見としてはあるぞ」と云ふことでありました。そして「どうしても徐州はやらなくちやならぬ、そして八月以降になると氣候の関係で非常にやり難い、又敵情も之を許さぬだらう併し一応は承つて置く」と云ふことでありました。蓮沼〔蕃〕閣下も「俺の所は直接関係は少ないものだが承つて置く」と云ふことでした。関東軍も余り直接関係がございませぬが東條〔英機〕参謀長、石原参謀副長もどつちかと言へば之に同意だつたと思ひます。朝鮮に参りましたが之も殆ど直接の関係はございせんけれども小磯〔国昭〕閣下は全く個人の意見として言はれたのですが、強硬に徐州作戦を唱へられました。「苟も支那を討つものが徐州に手をつけないと云ふことは嘘だ、併し俺は漢口をやれと云ふことは言はぬ」と言つて居りました。又鄭州に一石を打つて置けと云ふことを言はれました。それで私は「閣下の仰せになりますことに對し御意見に不同意などとは申しませんけれども兎に角今の軍隊は至急に一応の整理をしなければならぬのであります」と斯う言ひました所「判つた」と明白に言はれました。非常にはつきりして居りました。そこで要するに此の爾後の作戰指導と云ふものは大体さう云ふやうな考へで八月頃の新態勢をとる迄一時徐州、鄭州と云ふことは考へないで其の後の情勢でやるべきだと云ふことになりました。従つて引続き徐州会戦が起ると云ふことは全く考へませんでした。其の後私が浜松へ行きまして（浜松飛行学校に転任）一ヶ月も経たぬ

河邊 第二軍を大体濟南に停め第一軍を黄河迄進めて山西の方を掃除させる為に黄河の線まで出す、さうして此處で態勢を建て直さう、陸軍部隊の新編成もやらう、さうして戦争指導全面的に持久戦と云ふ肚を決めて腰を落ち付けてやらうと大体この方針でありました。此の時は廣東攻略と云ふ話もまだ出て居りません、本当に持久戦と云ふ肚を決めよう、それが為には軍部内の態勢を整へると云ふ意見でありました——之には陸軍省も同意でありました——さういふやうなことが動機になりまして新設五ヶ師団が出来る迄……八月迄を……目処として作戰指導方針を決めよう」と云ふことになりました。二ヶ月頃相談しました。

それに就て起つて来た問題は津浦線に沿つて南北を繋ぐこと、第一軍の黄河の南岸鄭州方面に足場を取つて置くこと。又廣東攻略の問題或は漢口に威力を及ぼす方法はどうかと云ふやうなことが問題になつて居りました——之は相當に研究致しました——海軍とも話を進めました。私は故意に自分の本當に思つて居る以上と言つた一部もありましたが、兎に角私達の方針として八月迄絶対に新作戰をしないと云ふのを原則として此方の態勢を固める為に専ら兵団の整理、軍紀を肅正しなければならぬ。南京あたりで変な事が出来た後でありますから其の悪い連中を掃して独立混成旅団が四つか五つか出来て来るからさうしたら之等を入れ替へて新鮮なはつきりした軍隊を八月迄に作り直すのだと云ふつもりで、その考へも全部海軍に話しました所、海軍は「安慶だけを取つて呉れ」といふ希望でありました……飛行場に使用する為には……「安慶を欲しい」と云ふことを言ふので「安慶は二ヶ大隊位で飛行場は取れるかも知れぬが安慶、蕪湖の間を繋ぐなければならぬから之には相當の兵力を要す

中には徐州会戦が起つたので非常に驚きました。あれが起つた動機は知りませんが、二月に於ける方針はさう云ふ風な考へでお決めたのであります。

殿下 其の時は長期に亙るものを定めると云ふ確固たる方針で起案する考へがあつたやうであります、実際の計画は三月迄ですか、七月迄ですか。

河邊 はい先づ七月迄です。別に本当に持久戦の具体的なことを立てつつあつた訳ですが、編成動員、作戰資材斯う云ふやうな方面に亙る長期に亙る計画や又外国から品物を買ふとか何とか云ふ方法を別途に研究はして居りましたが、御前には申上げる程度に出来てはなかつたのです。併し事務的には相当深刻になつて居りました——第二課、第三課戦争指導と云ふ見地、兵力資材の關係を顧慮し全く持久の形で研究をして居りましたが未だ御前に申上げる迄には至つて居りませんでした……。成文化迄は行つて居らぬ時代でありました。

殿下 さうすると先づ其の研究が出来たならばやると云ふ思想だつたのですか。又其の實際の根本方針は持久と云ふ事であつたのですか。

河邊 蒋介石を相手にせずと云ふ声明から持久態勢に変はるといふやうになつたのであります。

私共はもともとなるだけ持久戦にしないで行きたい。従つて一旦和平するのだとあの年末年始に奔走したのであるが、それにも拘らず私共の志と違つて持久戦になつて仕舞つたのだから我々は持久戦のためには如何なる要求をしても良いぢやないか——我々は遠慮なく大きなことを吹つかけても誹られる事も亦彼等に文句を言はれる

河邊 はつきり憶へて居りません。

殿下 大体経過を追ふた事実に就て私の伺ひ度いことは之で終りました。

河邊 私の記憶が非常に粗漫でありまして余り御参考にならぬかと思ひますが、又将来も御下問があれば随時何処へでも参つて申し上げます。

殿下 又伺ひます。

此の前送りましたことに就いて（武力戦の見地に基く中央部の統帥に関する研究事項）何かお氣附きになりましたことがありましたらお話を頂き度いと思ひます。

河邊 もう少し考へを練りましてからにして頂き度いと思ひます。

統帥と國務の統合と云ふ問題は非常に難しいことで独逸の「ヒツトラ」のやつて居る状況を私は臆気ながら見て來ましたが、日本としてはどう云ふ風にやつたらよいかといふことが一番難しい問題であると思ひます。其の中必ず御答解を申し上げ度いと思ひます。

了

〔註〕 河邊虎四郎 24期大正十年陸大卒。昭和九年八月関東軍参謀（作戰）、十年八月同第二課長（大佐）。十一年三月近衛野砲兵聯隊長。十二年三月より十三年三月まで参謀本部戦争指導課長、同年十月作戰課長。

こともなく、又言はさない筈だ——徹底した持久即ち大規模な計画を立てて本當の持久戦でかからうと云ふ気持ちになつたのです。

殿下 其の頃参謀本部では意見が完全に一致して居つた訳ですか。又陸軍省は其の頃積極案になつて居つたのですか……今の構和問題は陸軍省は反対の立場だつたと思ひますが……

河邊 陸軍省は構和問題に反対だつたとは申しませんが……次官、軍務局長（町尻量基）、軍務課長（柴山兼四郎）あたりはそれを望んで居りましたけれども……併し見事な構和条件を何とかもう少し余計欲しい。参謀本部のやうに遠慮せずにもつと向ふに強く言つてもよいといふ気持ちであつたと思ひます——各種の研究討議の上でもさう云ふ感じが強く致して居りました——。然し構和と云ふことが出来ればと望んで居たことは事実であります。

殿下 構和条件が破棄された後の梅津閣下が徐州をやれと云ふことを盛んに言はれて居つたのではなかつたのですか。

河邊 梅津閣下が徐州問題を喧しく言はれたのは之は構和問題の後です。その前にもさう云ふ考へがあつたかと思ひますがはつきり判りません。併し山東問題は前から主張されて居りましたが私が他の用事で次官室へ行きました時に「どうだ山東はやらぬのか」と言つて居られました。徐州に関してはつきり言はれませんでした。

殿下 濟南作戦は何処で止めると明瞭に指示しなかつたのですか。

河邊 地線を示した筈だと思ひますが……。

殿下 地点を示して居つたのですか。

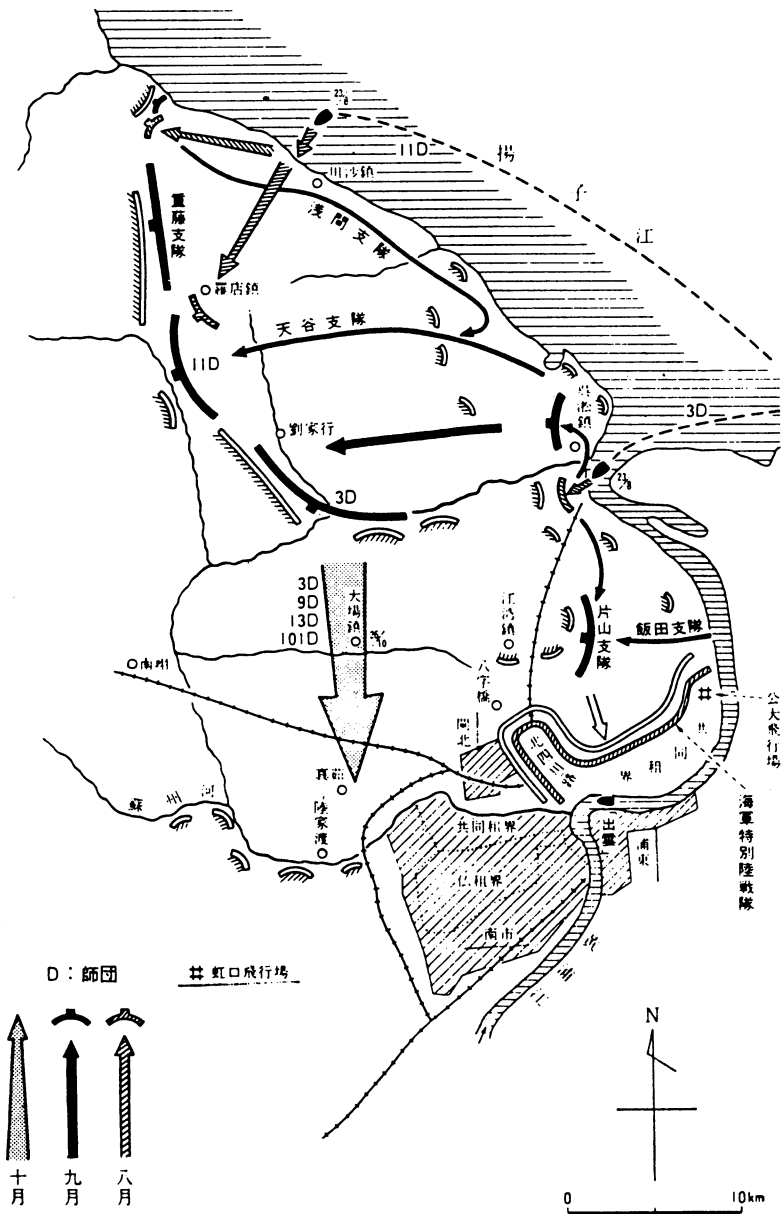
河邊 地点を示したと記憶して居ります。

殿下 南へ出るなといふだけだつたと思ふのですが……。



第十軍の輸送船団

上海付近戦闘経過要図
(昭和十二年十月末に至る)



『第11師団戦史』による

対支那中央政權方策

(昭和十二年十一月二十一日 参謀本部第一部第二課)

方針

一、現下時局解決のため現状に於ては尚現中央政權(蔣政權若くは其繼承政權)をして譟意我に提携せしめ全支の問題を統一処理するの方針を堅持す。

此の際北支内蒙及び上海等の問題は全支問題の部分として之を処理し此等各方面の既成自治政權は支那本然の事態に即し中央宗主權下に於ける範圍の存在として之を繼承承認せしむ。

本項の目的達成の爲には現中央政權が一地方政權たるの實に墮せざる以前に於て長期持久の決心に陥ることなく其面子を保持して媾和に移行する如く我諸般の措置を講ずるを要するものとす。

右努力は主として本年内に尽さるべきものなりとす。

二、前項目的達成のための努力奏効の望無きに到り南京中央政權飽く迄長期持久の策を執り事實に於て一地方政權たるに移行せる場合には一時全支分裂主義を容認し各方面共反蔣反共政權を樹立し政略上の攻勢に転移す。

本決心の時機は来年初頭と予想す。

理由

一、東亜経綸の大局的見地より

静に支那本然の姿を観るに近世の歴史東西南北悉く侵略受難ならざるはなし支那人ならずとも排外思想勃発せざるを得んや我亦友邦の爲に之を憂ふる所以なり而して排欧米就中共の問題は支那の爲には国内の問題にして東亜のためには日支共同の関心事なり。

東亜の経綸は支那の解放と日支の提携とより始まる而して支那最近最大の苦悩は日本の威力と「ソ」邦の赤化なるを思ふとき日本が支那を善導するに道を以てし所要の統一を助け其脅迫感を除くとき日支提携の大道此に通じ支那は欧米勢力就中赤化より自己を解放するに専念するを得べく

近き将来に予想すべき諸般の事態に処して支那を以て東亜經綸の伴侶たらしむるを得ん。

二、日支問題解決上の見地より

日支全般の問題を根本的に綜合して解決し次期の東亜經綸に前進せんがためには支那に中央政權の存在を必要とし之がためには反省せる蔣政權若くは其繼承政權の存続を必要なりとす。

蓋し蔣政權（繼承政權）の否定は彼等を反日の一点に逐ひ込み窮鼠反嚙の勢を馴致し其崩壊と否とに拘はらず結局相当年月の間に亘る全支分裂の出現となるべく此の間必然的に「ソ」英米策源の推進と相俟ち此に永久抗争のため帝國は永き将来に亘り之に莫大の国力を吸収せらるべく且東洋を駆て欧米輩の好餌に供し東亜經綸の前途を誤る所以なればなり。

以上の見地に基き若現政權倒壊したる場合に於ても可及的速に統一政權の樹立に努力すべきものなりとす。

而して現政權一派の眞の翻意に関する可能性は寧ろ将来に於ける我が国力の充備と我が対支政策とに懸る問題にして既に日本の威力と欧米の不信とを體驗したる今日抗日の不利を認め過酷ならざる条件下に媾和に入らんとしあることは想像に難からざる所なりとす。

現政權が媾和条件を現実に履行せざる場合若は戦後支那内部の事情我所期と異なる場合には一時分裂（反蔣）主義を

認容すべく此の際之が実行を可能ならしむる為には媾和の際に於て其条件を保障として確立し置くべきものなりとす。

三、防共上の見地より

支那赤化を最少限度に極限するが為には中央現政權一派の統制力崩壊するの以前に於て本事を終結するを可とし又赤禍の駆逐には事变後の将来に於て現中央政權一派をして西面せしめ之を赤系分子の清掃に推進するを以て東亜經綸大局上の上策とすべし。

蓋持久長きに從ひ蔣勢力の衰微と共に分裂の形勢を馴致し赤禍の擡頭を予想すべく又何れの型式なるに拘らず媾和發生の場合には赤系分子は分離して奥地に残存すべければなり。

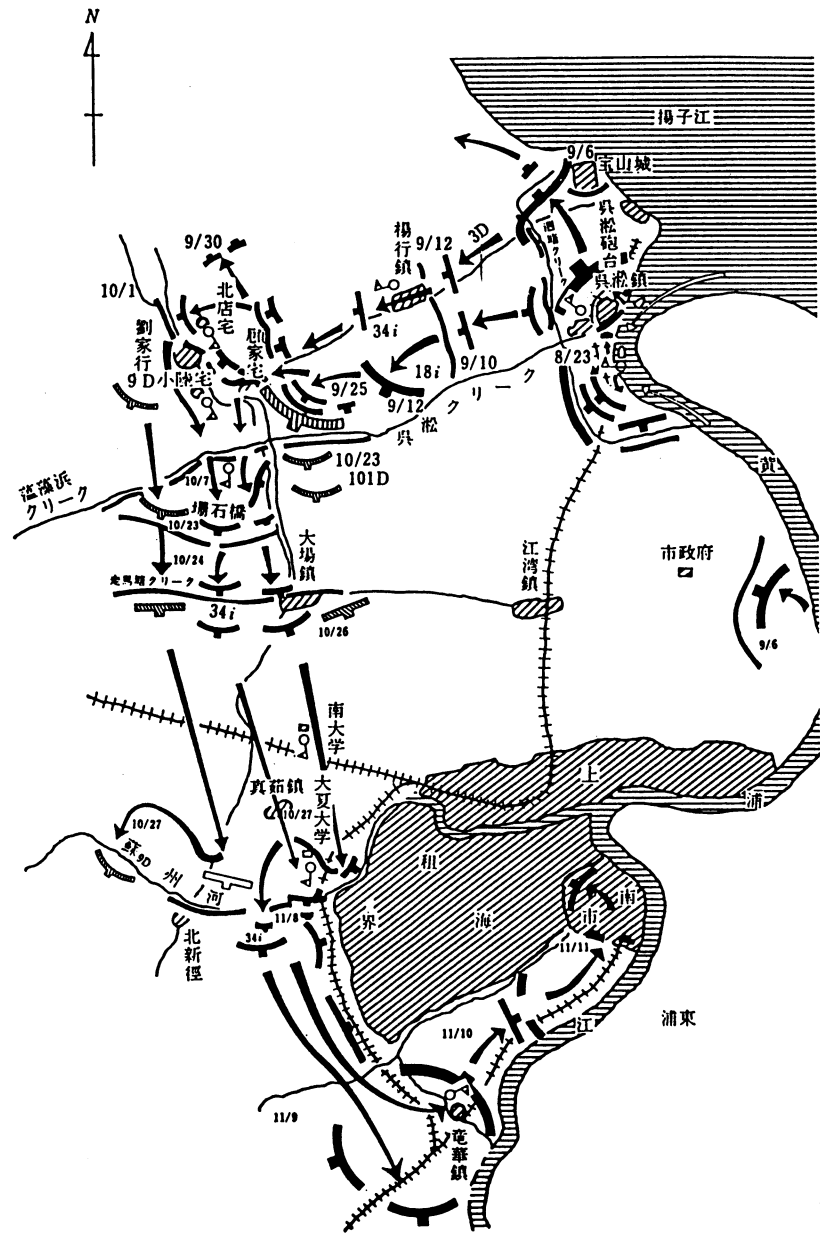
而して最悪の場合依然として排日統一政權の存続することあるも之が容共ならざる限り其我に對する不利は分裂に乗ずる赤化が日滿兩國に及ぼす損害に比ぶれば尚輕易なるものと謂ふべし。

昭和十二年八月十五日、昭和十三年二月十五日

上村利道日記

上海派遣軍參謀副長・歩兵大佐 22 期

第三師団上海附近戦闘経過要図（自昭和12年8月23日至同11月11日）



◇八月十五日 晴

〔欄外〕上海派遣軍参謀副長ノ内命ヲ受ク
出務、上海派遣軍参謀副長タルノ戦時命課ノ内報ヲ受ク、真ニ予想セサルトコロ寝耳ニ水ノ感アリ、サレト此選ニ入レル無上ノ光栄ト共ニ緊陣一番大ニ努力スヘク覚悟ヲ定ム

早速保管考科表ノ補修訂正ヲ了シ〔参謀本部〕庶務課長ヲ諒山中佐ニ申継ク、但何等特別ノコトナシ
今井次長遂ニ病癒エス、第十一師団長多田駿中將ト交代セラル、夕刻挨拶ニ参上ス

本夜本田氏夫妻及文子サン来宅、其他細川中佐、山崎曹長ナト来ル、夜寸暇ヲ得テ若干ノ買物ヲナス

◇八月十六日 晴

動員第一日 応召軍司令部員続々到着ス、陸軍大学校ニ送り出ス
応召者中ニハ表外ノ者ナトアリテ任務ノ分課見当ツカサルモノアリ
午前十時軍司令官、総長殿下ヨリ訓命拝受テ本部ニ於テ乾杯、
後事務所タル陸大二至ル、午後軍司令部挨拶、後更ニ大学校ニ至リ
帰宅八時三十分

◇八月十七日 晴

動員第二日軍司令官拝謁、参謀長、賢所拝、予ハ終日大学校ノ事務所ニ在リ

◇八月十八日 晴

動員第三日

午前九時勅語伝達式、同十時（九時予定ノカ延期）3D参謀長11D作主参謀ヲ集メテ欣要ノ事項指示、正午陸相官邸ノ送別午餐ニ出席、爾後陸軍省ト連絡後大学校、慌タシキコトナリ
種痘予防注射

◇八月十九日 晴

〔欄外〕長中佐同行ス、漢口引上ノ状況ナト話ヲ聞ク

動員第四日、軍司令部ノ第一梯団、軍司令官以下二十数名東京ヲ出発ス

○自宅ニテ祝杯、多田夫妻、山城曹長、湯瀬母室等来宅 ○午前十時明治神宮参拝 ○午前十一時午餐会食 ○零時十分大学校発宮城ヲ車中ヨリ遥拝 ○午後一時かもめニテ名古屋ニ向フ、東京駅ニテハ本田氏、重藤氏ニ会ス
名古屋着3D長、留守3D長等ノ出迎ヲ受ケ八車八勝館ニ宿ス、
時二七時ナリ

軍司令官ニ下賜セラレタル金員三円分賜ヲ拝受ス

東京駅ニハ町尻侍従武官其他、閑院、梨本、東久邇、朝香、北白川ノ各家御使ノ御見送ヲ受ケシ外、近衛首相其他高官連ノ見送多シ

◇八月二十日 晴

午前七時過宿舎発、熱田神宮参拝後九時卅分岸壁発、十一時三十分出港（乗艦足柄）速力二十四次テ二十六節、雄姿堂々航進十二時

三十分山田沖ニテ皇大神宮選擇一路平安ナリ
船室ノ暑サ極メテ猛烈、流汗玉ノ如シ
夜安眠ス

◇八月二十一日 晴

平穩ナル航海ヲ続ケ十一時三十分集合地馬鞍群島ニ仮泊ス、月明
カニ波静カニシテ征夫ノ胸ヲソソル

◇八月二十二日 晴

〔欄外〕軍司令部由良ニ移乗（吳淞沖ニテ）

朝五時半西原大佐ノ一行上海ヨリ来船、既ニ立案セル上陸作戰計
画ヲ軍司令官ニ示シ其嘉納スルトコロトナリ各師団ニ命令ヲ下達ス
午後五時神通ニ移乗、次テ駆逐艦ニ移乗、揚子江ヲ溯江ス
正午予定ノ吳淞沖到着更ニ巡洋艦由良ニ移乗、此ヲ当分ノ間ノ軍
司令部トス
月明ニシテ昼ノ如シ、然モ浪静カナリ

◇八月二十三日 晴

〔欄外〕江上月明銀波躍 殷々森々地軸動

遂成功敵前上陸 將軍揺胸謝神明
敵前上陸決行

本晚3、11両師団ノ先登上陸ヲ開始ス

第三師団方面開始午前三時、先之海軍ノ砲擊猛然ニシテ尖光
閃々、探照灯ノ光芒閃キ正ニ壯觀ナリ

第十一師団方面午前二時予定ハ舩母、配當遅レテ午前四時ニ至ル

ス

北支方面軍編成、寺内大将司令官、西尾中将第二軍ノ司令官トナ
リシ由

大臣、総長等ノ上陸作戰ノ成功ニ関スル電報漸ク本日到来ス

◇八月二十七日 晴

〔欄外〕11D小尾參謀連絡ニ来ル

軍司令部ノ第二次輸送船着（部長及押目航空兵少佐）

3D左翼方面ハ股行鎮迄進出ス、該方面ハ陸戰隊トノ間ニ挾撃サ
レ午前十時頃間股路ヲ壊走スル部隊ヲ海軍猛撃ス、11D方面羅店鎮
ヲ爆撃シ志氣昂ルモ本日無為、敵兵力ハ逐次増加シ五、六千ヲ算ス
ト瀏河鎮方面消息不明ナルモ未タ占領スルニ至ラス、夕刻小尾參謀
ノ連絡ニ依レハ羅店ハ二十五日既ニ工兵三十名進入シ一時ハ之ヲ占
領セルモ後続歩兵大隊到達セス其大部ハ行衛不明ナリ
本日海軍ノ病院船朝日丸上海ニ入港ス、陸軍ノ患者輸送船モ近ク
来ル筈（梅丸）病院船ハ九月初旬内地出航ノ筈
要スルニ無理ナル作戰系統セス此ニ上陸後ノ行動ハ一頓挫ヲ来ス
ノ已ムヲ得サル状態ナリ

◇八月二十八日 晴夕刻驟雨、稍下ル

〔欄外〕11D羅店鎮占領

第十一師団ハ正午頃羅店鎮ヲ占領ス、今度ハ確實ナル事実ナリ、
聊カ明朗ナル氣持ス、3Dノ吳淞鎮攻撃尙策定マラス徒ラニ焦慮セ
ルヤノ感アリ、11Dニ救援ヲナサシメントセシカ軍司令官ハ師団ノ
面目ヲ思ヒ之ニ同意セス、武士ノ情モツラキモノナリ

両方面共無事上陸五時過祝杯ヲ挙ク

後ニテ聞ケハ11D正面上陸行動間ハ極メテ近距離ニ於テ左翼隊方
面敵ノ射撃ヲ受ケ右翼隊方面ニ上陸後射撃ヲ受ケテ損害ヲ生セリ、
尙9時頃司令部敵航空機ノ対地射撃爆彈投下ニ依リ下坂參謀モ戦死
セル由、3D正面亦數回ニ亘リ敵ノ逆襲ヲ受ケ且ツ吳淞鎮ノ敵砲兵
相当ニ射撃セシ由ナリ

◇八月二十四日 晴

3D正面ニ於テハ大隊長ノ戦死等ニヨリ相当志氣衰エアルカ如
ク、吳淞鎮ノ攻略亦殘敵ノ關係上成功ノ望ナシ。本日ハ上海方面ニ
對スル戦果ノ拡張ヲ努メシム

10・00遼江、11D正面ノ情况ヲ視察ニ軍參謀等數名上陸、師団司
令部ヲ訪問ス

海軍ト碇泊場司令部トノ意思稍疏通ヲ欠クモノアリ、各々其立場
ヲ異ニセル觀察ナリ

◇八月二十五日 晴

大ナル變化ナシ

◇八月二十六日 晴

3D吳淞鎮攻略ハ遂ニ實施セス實施ノ意志ナキナリ、夜芳村、二
神參謀此中止ヲ意見具申、西原大佐一蹴ス

山室部隊正面ノ敵四、〇〇〇、羅典鎮未タ略取ニ至ラス、藤田部
隊正面二四、〇〇〇、同部隊全ク敵ニ圧迫セラレアル感アリ

第十一師団方面ノ情况漸ク明瞭トナル、同方面敵ノ兵力逐次増加

各部長本日軍司令官ニ申告ノ為メ来部、兵站諸部隊ノ一部亦到達
ス

本夜吳淞方面ノ敵或ハ撤退セサルヤヲ思ハシム（羅店鎮方面友軍
ノ進出）尚本日珍ラシクモ吳淞水道通過ノ商船及軍艦ニ對シテモ射
撃シ商船ノ運轉士炊夫傷クニ至ル、本夜吳淞北方地区ニ於テ銃砲声
旺ナリ

支那軍ノ強キコトニ就テノ挿話逐々茶話ノ種トナル、洗濯物出来
繻絆ヲ取り替エ氣持宜シ

◇八月二十九日 晴、曇

〔欄外〕倉永61長戦死

由良遼江川沙鎮江沖ニ至ル、上陸シテ軍需品ノ集積状況ヲ視察ス
流汗瀝リナリ

倉永歩六長本朝戦死ノ報アリ午前五時半頃戦況視察ニ本部ノ家屋
ヲ出デシ途端、小銃彈飛来シ胸部ヲ貫通セシ由ナリ、氣ノ毒ナリ
吳淞鎮攻略ノ要愈々切ナルモノアルヲ覺エ、軍司令官ハ3Dノ面
目ヲ重シシ本日モ11Dノ一部ヲ以テスル此攻撃ヲ承認セラレス、3
Dハ明後三十一日午前十時實施スル予定ニシテ目下準備ヲ實施中
本日閑ヲ得テ理髮ス

◇八月三十日 晴

〔欄外〕軍司令部ノ後続部隊到着

本日モ案外閑散ナリ、昨夜ヨリ昼間及本夜モ吳淞附近ノ敵砲兵余
リ射撃ヲナサス静肅ナリ、軍司令部ノ残置人員見大佐ノ引率ヲ以
テ到達ス、船内ニ留メオク筈ナリシカ揚陸セリ

3Dノ呉淞攻撃ニ11Dノ僅カニ一大隊BA一中ヲ以テ協力セシムルノミニテ軍ノ意圖ニ合セス、然モ此大隊長ハ一番鈍重ナルモノナリト、聊カ軍ト師団トノ間ニ於テ感情ノ疎隔ヲ来セルモノナキヤ
11D參謀櫻井少佐本夜到着、參謀本部ニテハ当方ノ情況サツバリ判ラスト称シ居ル由、アレ丈發電セルカ此電報力到着シオラヌ模様ナリ

◇八月三十一日 晴

〔欄外〕 68 i 呉淞鎮ヲ占領ス

午前十時ヨリ開始セラレタル3Dノ68 i 主力ノ呉淞鎮攻略ハ見事ニ成功ス、海軍ノ協力ノ効大ナルモノアリ、周密ナル計画ノ下ニ断行スルトキハ成功間違ナシ
長少佐帰来、11D方面ノ戰況頗ル苦境ニ在ルヲ訴フ、考慮スヘキモノ多シ

N大佐ニ対スル反感相当醸成セラレツアルヲ見ル、是亦考慮スヘキ事項ナリ

小尾參謀、二神參謀ニ軍司令部復帰ヲ命ス

軍司令官幕僚ニ注意ヲ与ヘラル、支那軍ヲ正確ニ認識シテ情況判斷ヲ誤ルコトナク、師団ヲ信頼シ其勞ニ同情スヘキコト及各其本分ヲ尽シテ協同ヲ十分ニスルコト是レナリ

本夜人見大佐連絡ニ来ル

◇九月一日 晴

3D右翼方面(68 i)ノ力攻大ナル進展ヲ見ス僅カニ進捗セルノミ、特ニ呉淞砲台方面ハ艦砲射撃、爆撃等アラユル攻撃ニ屈セス尚

頑強ニ抵抗スルコト敵ナカラ天晴レナリ、宝山城ヲ根拠トセルカ如ク獅子林砲台ヲ本夕六時遂ニ11D淺間支隊ノ占領スルトコロトナル、運送船多数輻輳スルモ陸揚効程之ニ伴ハス、夜間敵ノ射撃ヲ受クルモ之ヲ力行スルコトトス
28日迄ノ大毎ヲ觀ル師団長級ニ多少ノ異動アリ、事変インフレノ感アルモノアリ

◇九月二日 晴 暑サ強

〔欄外〕 淺間支隊獅子林砲台ヲ占領ス(1/9)

天谷支隊到着ス

68 iハ呉淞砲台ヲ掃討シ宝山泉域ニ迫ル、但シ平地方面ハ余リ進展セス夜間尙輕度ノ銃声ヲ聞ク、淺間支隊ハ獅子林砲台ヲ占領セルモ其後余リ進展セス、天谷支隊本夜到着予定、其使用方面師団ノ意見ト相異アリ、司令官ハ大局ヨリ觀テ3D方面ニ上陸シテ羅店鎮ノ側背ニ迫ル如ク処置ス

◇九月三日 晴

〔欄外〕 昨日ニ比シ幾分涼シ

68 iノ呉淞攻略ハ日和見ニシテ成功セス、淺間支隊ノ進捗亦遅タリ、軍司令官聊カ氣ヲ揉ミ出サレシ感アリ、何レモ連日ノ戰闘ニテ戰闘力衰減ノ結果ナランカ

天谷支隊長命令受領ノ為メ来艦、此部隊ノ戰闘行動コソハ一ノ標準ト見ルヲ得ヘキナリ

3Dノ公大飛行場攻略ニ就テ海軍満足ノ感ヲ与ヘス、陸海軍ノ協同ニ龜裂ヲ生セントス

參謀本部ノ西村少佐本夜命ヲ受ケテ来部

◇九月四日 晴

此日作戰ノ進展見ルヘキモノナシ

參謀本部派遣ノ西村少佐ヨリ狀勢ヲ聞ク、軍ハ現在ノ兵力ニテ消極的任務ニ甘ンセサルヘカラサル現狀ニ在リ

陸軍省派遣ノ太田天梧画伯来レルニ会ス、又松井国民特派員来艦ス、普通人トシテ司令官ニ面接ス

◇九月五日 晴

〔欄外〕 天谷支隊日浦鎮方面ノ敵攻撃ヲ開始ス

天谷支隊68 iヲ超越進出ス、安達聯隊宝山城ヲ占領セリトノ報ヲ聞クモ状況全ク不明、天谷支隊ト3Dトヲ手ヲ握ラセス成功ノ際ニ委シタルハ軍トシテモ不十分ナル点アルモ、3Dカ協力ノ意嚮ナキハ遺憾ナリ

軍司令部ハ結局来ル七日移乗スルコトニ決ス、之レニテ手配ヲ進ム

3D參謀長ヨリ西原大佐宛干涉差控エラレ度強硬ナル電報来ル、面師団共難局ニ在リテ氣ノ立チアル勢力平常ニ於テ見ラレサル光景ナリ、由良乘組員將校ト記念撮影ヲナス

午後再ヒ石炭棧橋附近上陸ノ軍司令部位置ヲ再点檢ス、七時頃着大ニ疲労ヲ感ス

◇九月六日 晴

〔欄外〕 敵軍正ニ「ダニ」ト蠅ノ如シ、陣地ニツケバ「ダニ」ノ如

離レス一掃スレハ蠅ノ如ク又集マル

天谷支隊モ予想外ニ進展セス、将来ノ戰闘推移亦概ネ予想シ得ヘシ、俘虜六百殲滅セシ由(兵營ニ於テ)、歩二九旅(團)元氣大ニ挙リアル由ナルモ師団ハ未タ前進ヲ命セス、午後一時過キ敵兵退却ノ途ニ就キアリ、師団ニテハ地歩ノ獲得ヲ命セシモ余リ進況ヲ觀ス、3D司令部ニ使ス忠実ニ命令ヲ奉シアルカ如キモ其手段方法積極的ナラス、軍司令官トノ間ニ兎モ角モ執リ成シ置キタリ、軍司令部ノ移乗ニ就テ尚兎角ノ論アリ

宝山ニ位置セシムヘシナト説クモノアリ、既ニ海軍トモ相談シ協議ヲ進メアル今日變更ハ態面ニ関ス、運ヲ天ニ任セ天祐ヲ祈ル

公大飛行場方面戰況順調ニ計画通り進展ス、出雲ノ3FL先任參謀、機關長遂ニ傷ク

◇九月七日 晴

〔欄外〕 軍司令部ハ由良及鬼怒ヨリ瑞穂丸ニ移ル

本晚艦側近ク爆彈數發落下シ破片ニテ水兵二名輕傷セシ由、夢幻ノ間ニ之ヲ知リシモ依然寢込ミタリ、司令官ノ意思ニ從ヒ軍艦ヨリ移乗(瑞穂丸、石炭棧橋横附)午後六時近ク、久シ振リニ豪壯ナル生活ニ入りシ感アリ

少壯幕僚部隊ニ氣兼シテ明日ハ陸上司令部ニ引キ越スコトヲ主張ス、適當ナルヲ以テ同意、陸上ノ設備ヲ急カシムルモ管理部長ハ明日迄ハ引キ受ケス、此日戰況發展セス特ニ公大方面歩(兵)支隊ノ戰況進展セス、悲觀スヘキモノアリ

◇九月八日 晴

〔欄外〕陸上軍司令部開設

飯田支隊軍工路ノ線ニ進出ス

陸上司令部ニ位置シ事務ヲ開始ス、軍直部隊ノ上陸部隊長申告ニ来ルモノ多シ(主トシテ砲兵)

本夕第十一師団ノ六日夜ノ戦況ヲ承知シ、同師団カ嘉定方面ノ敵SAニ苦シメラレアルヲ知り、司令官ハ若干ノ兵力ニテモ増加スヘキヲ主張サレMG一中隊ヲ急遽明早朝発増加セシム、天谷支隊方面亦戦況進展セス、只公大方面ハ軍工路ノ線ニ進出シ「トチカ」ニ攻略セル情報アリ、陸上司令部ニ一夜ヲ過ス予定ナリシモ11D方面ノ処置ニ就テ船中ニ於テ議ヲ練、遂ニ船内ニ泊ス

天谷支隊ニ「コレラ」患者発(生)三十名ヲ算ス、敵ノ謀略カ

◇九月九日 晴

〔欄外〕三師団、重砲旅団増加配属ノ通報ヲ受ク

歩十八飯田大隊公大方面トチカノ攻撃ニ於テ、大隊長以下中隊長三其他百數十名ノ死傷ヲ生セシモ本日トチカ四個ヲ攻略ス、3Dハ歩一中MG一小増加赴援ス、天谷支隊多少ノ進出ヲナセシモ3D主力殆ント進出セス11D方面大ナル変化ナシ、天谷支隊方面発生ノコレラモ多数ノ続発ハナキカ如シ、軍司令部内ニ於テ高級副官、軍イ〔医〕一、赤痢、霍病其他若干ノ下痢患者アルカ如シ、原因炊事場ノ不完全、水不足ニ在ルカ如シ

本夜3ヶ師団SA旅団等、軍ニ増加セラレル通報アリ思ハサル増兵ニ一寸面喰ヒタル形ナリ、然モ速戦速決常〔設〕特〔設〕各一師団ヲ残シ、他ハ他ノ方面ニ転用スヘキ中央部ノ企図ヲ示シアリ

本夜將軍ノ浴後大陸ノ水ニ入浴ス、浴後行李ノ羊羹ヲ見附ケ出シテ試食、上空ニハ敵機ノ爆音、地上ニハ高射砲ノ砲声聞ユ、洋燈影暗シ

重藤旅団ノ參謀ニ充当サレシ桑、塚城少佐本夕上海ヨリ来ル、未タ其任務ヲ知ラス伝ハリアラサリシナリ

◇九月十二日 晴

〔欄外〕月浦鎮、楊行鎮共ニ手中ニ落ツ

偶感

一喜一憂戦場常 焦心何夫当苦慮

幕僚胸中成算満 將軍賦詩案陣中

天谷支隊、第三師団共ニ月浦鎮、楊行鎮ノ線ヲ超エテ進出シ戦況有利ニ進展シ軍司令官ノ機嫌頗ル良シ、Ⅲ/68長中島少佐(軍予備)ノ過般来ノ戦況報告ヲ軍司令官聴取セラル、相当ナル成果ナリ軍參謀部附田地大尉赤痢、二神少佐馬取扱兵コレラ罹病、軍司令部モ病魔ノ脅威ヲ受クルコト大ナリ

月ノ眉 楊の腰に引きか(か)り

あまやウーさん 五日流連

◇九月十三日 晴夕雨

〔欄外〕市政府附近ノ敵兵退却

敵將聞覺側背急 急遽捲旗退本拠

可惜好敵走獲中 一挙殲滅機未到

今日ハ実ニ愉快ナル日ニテ、午前十時頃市政府附近ノ敵兵退却セル報アリ、片山支隊ノ発動艇輸送作戦モ中止シテ直チニ追撃ヲ命ス

◇九月十日 晴

〔欄外〕軍事郵便開通

天谷支隊午前中ニ月浦鎮ニ近迫、浅間支隊ハ其一角ヲ占領ス。3D方面亦楊行鎮ニ肉迫ス

軍司令官モ午後二時三十分陸上軍司令部ニ到着、増兵後ニ於ケル作戰ニ就テ案ヲ練ル

作戦課ノ案ト司令官ノ考案ト合致セス、更ニ案ヲ練ルコトニシテ引キ退ル

本夜敵飛行機ノ爆音ト我カ(?)砲撃トニテ眠全カラス

本日軍事郵便開通ス

氣遣ハレシ颱風ハ方向ヲ九州方面ニトリ戦場ニ来ラス、是亦天佑ナリ

◇九月十一日 晴

〔欄外〕軍司令部全部陸上ニ移ル

松井將軍吟

江南由来艶麗地 蕙楊佳人競妍媚

仁俠王州成登岸 開花似媚夾竹桃

軍司令部全員本日陸上軍司令部ニ移転ス。陸上軍司令部ノ位置露字新聞ニ出テシ由、先般モ兵力増加ノ件支那新聞ニ出テ寒心ニ不堪、其他報道部ノ新聞発表不適当ニ付、以私信注意ヲ与フルコトトス

天谷支隊、3Dノ状況毫モ進展セス、將軍御機嫌頗ル斜ナレトモ參謀長取り合ハス

(安田支隊及飯田支隊ノ斥候ハ本朝之ヲ知リシ由ナルモ報告来ラス、陸軍飛行機ノ偵察ニヨリテ承知セシナリ)。時恰カモ衆議員〔院〕ノ慰問團十三名、木村中佐ノ引率ニテ軍司令部ヲ訪問ニ来リシトキナリ

構内開業ノ理髪屋ヲ見附ケ理髪心氣亦壮快ナリ、夕刻ヨリ到着以來最初ノ降雨アリ、塵埃静メニハ可ナルモ第一線將兵ノ苦勞察スルニ余アリ、法務部長塚本大佐病臥、赤痢ニハアラサル如キモ

◇九月十四日 微雨後晴

〔欄外〕重藤支隊到着、川沙江上陸

新戦場の夕

稲田に稲は実れども 刈る人もなき秋の暮

鳥は宿舎に急げども 戦禍に焼けて家はなし

此処呉淞の新戦場 夕陽赤く静かなり

敵ハ嘉定、南翔、大場、江湾ノ線ニ後退中ナルカ如シ昨夜ハ織田兵站戦闘部隊正面ノ敵襲(後備現役混成ノ守備隊、敵約五〇〇、后十一時過及午前一時頃ノ両回夜襲シ来ル、我損害、戦死一、負傷一)。引キ続キ払曉前ノ豪雨ニヨル雨漏ニテ両回起床、大ニ安眠ヲ妨碍セラル、台湾ヨリ派兵ノ重藤支隊長来部、爾後ノ作戰ニ就テ指示ヲ受ケラル

此日戦線大体ニ異動ナシ。天谷支隊方面聊カ進出セルノミ、敵ハ頑強ニ抵抗シアルモ大体ニ於テ嘉定、南翔、大場、江湾ノ線ニ後退中ナルカ如シ、第百一師団ハ十八日頃内地出発ノ由、「コレラ」患者(天谷支隊及68方面)合計二五一、内死亡六〇(本日迄)ニ達ス、司令部警備規定閱覽脱稿、時々降雨アリシモ夕刻晴レテ月明カ

ナリ、敵機襲来高射砲、同Mg、照空灯射照シテ撃退、夕食後司令部外散步、新戦場静カニシテ我飛行機ノ爆音高ク平和ナリ

◇九月十五日 曇、雨

〔欄外〕我損害五、五〇〇二達ス

朝来霖雨ノ如シ、温度下ル、敵ハ大場鎮、羅店鎮ノ線ヲ固守スルカ如ク、11D3D方面共ニ戦況大ナル進展ヲ見ス、江湾鎮附近大ナル部隊ナキ如キモ情況判明セス片山支隊ハ依然監視ヲ続ケアリ、敵少キヲ以テ江湾取ルヘシトノ意見アリシカ此ノ結果ト現行片山支隊ノ兵力ト二鑑ミ自重シテ動カス

屋前3FL参謀長来部（近藤参謀同伴）挨拶ヲ主トス。午后参本ノ有末（次）少佐来著、武藤大佐ノ名刺ヲ携行ス
本日ノ降雨相当量ナリ破レ屋根ニテ雨漏リ多シ

◇九月十六日 時々雨 冷氣加ハル

〔欄外〕参謀陸戦隊挨拶

レコード吹込ノ為メ早朝上海ヘ 敵兵力46師二達ス
降雨三日雲低ク聊カ氣腐ル、戦況余リ進展セス、安達聯隊正面ノ敵夕刻退却開始、同隊進撃準備中トアルモ果シテ如何ナル程度ノモノニヤ、本日ノ情報ニ依レハ敵ハ逐日増加シ広西軍モ馳セ集マリ四十六師二達ス、氣ノ弱キモノハ叱驚スル程度ナリ。本夜本郷少佐ヨリ蔣介石対日戦闘法ニ関スル指令ヲ承知ス、現在実施シテ居ル通りニシテ敵ナカラ天晴ノ戦法ナリ、吾等ハ之ヲ破ル手ヲ考ヘサルヘカラス

○一点逐次崩シノ歩砲ノ緊密ナル協同 ○歩兵ノ前進姿勢ヲ低ク

総領事民団長等挨拶ニ来部

東京出發一ヶ月記念有感 石根

莅戦陣不顧生還 一死固期報君国

御爾未断帷幕臣 祈無辱皇軍威武

○白川橋開通

戦線大体ニ変化ナシ敵ノ主力ハ11D3D正面ニ於テ尚退却ヲ続ケアリ、軍ハ初メテ兩師団ニ追撃命令ヲ下達ス（午後四時頃カ？）。軍司令官朗カナリ、午前総領事上海民団長等敬意ヲ表スヘク来部。午后三時呉淞「クリーク」橋梁（元ノ白川橋）ノ渡初式ニ代表参列ス、架橋セシ部隊ハ縁故深キ第九師団編成ノ独立第八聯隊ナリ、後呉淞棧橋織田兵站司令部、虹虬碼頭ヲ視察ス、思出深キトコロナリ、何レモ初期ノ混雜ハ一掃セラレ目下整理時代ト見ルヲ得ヘシ
夕刻鋤焼ニテ一盡ヲ傾ク、参謀長、西原大佐同席

敵退却有感

飛報頻到敵退却 將軍直命敵追撃
惜猛戦三旬精盡 使長蛇恣其逃僻

◇九月二十一日 曇、雨

〔欄外〕西原大佐第十一師団司令部ニ連絡

第十一師団方面（右翼）戦線稍進ム

大坪、北野両参謀著任

〔受信〕実践高女慰問品

羅店鎮南方第十一師団右翼方面戦線稍進出セシ外戦況發展セス、敵ノ後方部隊退却セルモ第一線ハ依然頑強ニ死守シアル如シ、夕刻陸戦隊正面ノ敵モ間北方面ヨリ真如方向ニ後退セシ如シ、宝山二収

シテ急ガス ○重火器ノ逐次撃滅 ○幹部ノ服装ヲ兵ト同様ニスルコト、○効力アル射撃、A、SA ○縦深配備新ノ攻撃

◇九月十七日、十八日、欠落

◇九月十九日 曇

〔欄外〕南京空襲

空襲空襲又空襲 僚機併翼上壯途

爆音轟所敵機墜 江南秋色漸明朗

重藤旅団攻撃ヲ開始ス（羅店北方地区）

11D司令部石漣橋ニ移転ス

3D、11D攻撃中止、休止

海軍機大挙南京空襲敵機二十四撃墜我損害四、戦線大勢ニ於テ変化ナク11D司令部ヲ石漣橋ニ移転ス、重藤支隊本日正午ヨリ攻撃ヲ開始ス

本日通報アリ、3Dハ三日間11Dハ23日迄攻撃ヲ止メ休止スト兩師団偶然ノ一致カ協定力、兎モ角モ戦力尽キテ師団ノ統帥部トシテハ一休ミセサレハ不可ナリト解セルナルヘシ（11Dノ某中隊ノ如キ30名ニ減員セルモノアリト）已ムヲ得サルナリ

仲秋ノ明月天ニ在リ、闇雲去来スルモ月光彩カニ敵機モ影ヲ潜メテ来ラス、銃砲声モ聞エス戦場極メテ静肅ナリ。十時半就寢常ニナク早シ

◇九月二十日 晴

〔欄外〕軍ノ追撃命令ヲ下達ス

容シアル「コレラ」患者、病院設備及看護力不十分ニシテ悲惨ナル状況ニ在ル由、軍イ部長報告ス、同地ニ在ル後備小隊ヨリ病院設備ニ手伝ハシムルコトトス

大坪、北野両少佐参謀著任ス、北野少佐留守宅ヨリ托送物ヲ持参ス、啓子ノ同窓ヨリノ慰問書状及毒消丸アリ、腹具合少々変ニナリシ際トテ毒消丸ハ大助力ニテ直チニ服用ス

◇九月二十二日 曇

〔欄外〕3D攻撃築城ニヨリ攻撃開始

101D上陸開始

第十一師団右翼方面戦況僅カニ進展セル外変化ナシ。3Dハ本日ヨリ一週間ニ亘リ正攻法式ニ攻略ヲ企図ス、然モ其左翼方面ハ輻重兵ヲ以テ監視警戒セシムル等兵力不足ス、該方面ニ於テハ小部隊ヲ半分占領シ、彼我至近距離ニ於テ睨ミ合ヒノ形ニ在ルトコロ数ヶ所アリ。我戦力モ尽キケタルカ敵ノ抵抗モ恐ロシク頑強ナリ

第百一師団上陸開始、師団長伊東中将、参謀長西山福太郎君、司令部ニ挨拶ニ来ラル、参謀長ヨリ細カニ説明アリ
腹具合モ幸ニ好クナル、毒消丸ノ利キ目カ

◇九月二十三日 曇後雨

〔欄外〕昨夜敵カ藤田部隊本部附近ニ

「ガス」彈ヲ発射セシ疑アリ

戦況大体ニ於テ余リ変化セザリシカ、夕刻ニ至リ第十一師団羅店鎮南方ノ敵陣地ヲ坑道ニヨリテ爆破シ、左翼方面ハ道路ノ線ニ進出シ、第三師団正面亦陣地ヲ取り十余名ノ投降者アリシ情報アリ、江

灣付近ノ敵陣地愈々多クナレルカ如ク、其他ノ方面ニ於テモボツボツ新ナル陣地出来ツツアルヲ知ル(飛行機報)

追撃大隊ノ某召集兵、逃亡罪ニテ軍法會議ニ告発、後備某大隊ノ兵一名行衛不明ノ報告ニ接ス。前者ハ精神ニ稍欠陥アルカ如シ

昨夜後備隊ノ一小隊「クリーク」ヲ超エ所在若干ノ敵ヲ撃退セル由、然シ敵ニ射撃ヲ受ケ更ニ後方ニ在ル昨日上陸セシ第四百十九聯隊ヨリ直ニ射撃サレテ閉口セシ由ナリ

◇九月二十四日 雨

〔欄外〕二十二日夜3D方面ニ射撃セシ弾丸ハクシヤミ性瓦斯彈ノ疑濃厚トナル

將來ノ戦闘法起案

第十一師団正面ハ右翼共進出ス今一息ナリ、第三師団正面敢テ進マス、第百一師団ノ用法ニ就テ軍司令官尚江灣、呉淞方面ニ憂色アリ、全部ノ意見ナラハトテ呉淞クリーク左岸ニ全力ヲ使用スルコトニ就テ決々同意セラル、尚此方面道路ノ補修上却テ暇カ入ルコトヲ予期セラレアルナリ

將來ノ戦闘法ニ関スル意見ヲ草シ第一課芳村參謀ニ參考ニ渡ス、天谷少將退院ノ挨拶ニ來部、又本夜陸軍省、參謀本部ヨリ各一、事務連絡ノ為メ來部

原田少將連絡ニ來ル

神原參謀ヲシテ羅店鎮方面水路ノ偵察ヲナサシムヘク命令ヲ下ス

◇九月二十五日 曇微雨 急ニ暖カトナル

〔欄外〕桜井大佐離別会食

「初メテ戦場ニ到著スル部隊ノタメニ」ノ小冊子印刷シテ部隊ニ渡スコトス

◇九月二十七日 曇、稍寒クナル

〔欄外〕第三師団正面無電台ヲ占領ス

第九師団上陸開始

◎北陸の勇士来れり其の昔、植田の主が叫びしがごと
◎事しあらば又た来るぞと叫びにし 言葉既にあらはれにけり

第三師団正面遂ニ無電台ヲ占領ス、敵ハ退却シテ同地ヲ捨テシニヨル、只3Dヲ云スルハ当ラス、中隊ニテハ約四十名残り伍長カ指揮シアルトコロモアル位ノ程度ニテ殆ント戦力尽キタルナリ。68i中島大隊ノ戦闘振リヲ聞ク、戦車、砲兵、重火器、銃剣ノ理想的協同ナリシナリ」又決死隊ヲ募レハ全員挙テ応セシ由ナリ、心強シ」第九師団長本朝上陸來部、此師団衷ニ懐カシキ心地ス」夕食後西側道路ニ立テハ野戰病院ニ在ル負傷兵五、六名間食ニテモ求メテ帰ルカ如キモノアリ

又楊行鎮ノ輜重兵、酒保ニ來テ七、八名ノタメ「サイダー」二本「キヤラメル」三箱ヲ求メテ帰ル者アリ戦場哀話ナリ、第一課ノ一行本日夕食ヲ參謀長室ニ於テ会食、室明ケ渡シナリ

◇九月二十八日 曇

〔欄外〕百一師団攻撃開始

片山支隊復帰、谷川支隊之ニ代リテ守備
百一師団ノ右翼隊方面敵ノ夜襲ヲ受ケ突破セラレ、本日予期スル

總領事來部

〔受信〕曰田氏令嬢

戦線大體変化ナシ而師団共幾分ノ進出ヲ見ル
連日ノ悪天候ニテ第一線モ勿論困ルカ飛行場、道路工事等モ大困リナリ、統計カラ云ヘハ九月中ノ晴天ハ三日ト云フ話モアレト、通俗的ニハ雨ハ降ラス、カラリトシタ好天氣多シトモ云フカ果シテ如何ナルモノナルヤ?

桜井大佐任ヲ了ヘテ原職ニ復歸スルヲ以テ參謀長室ニ於テ会食ヲナス、田尻少將、北沢大佐ナト運輸部關係ノモノヲ同時ニ招待ス、N大佐メートルヲ挙ケ稍過ス

曰田藩治君ノ子供連中ヨリ慰問ノ手紙來ル、夜空襲アリ始メテ司令部ノ警鐘ヲ聞ク、AA各方面ニ於テ撃チ出シ静寂ヲ破ル

◇九月二十六日 曇、雨

〔欄外〕伏見宮博義王殿下御負傷アラセラル

11D3D方面ノ敵動揺ス

昨夜浦東地区ヨリ敵砲ノ射撃ヲ受ケ、浦風御乗組ノ博義王殿下輕傷ヲ受ケラレシ由恐懼ノ至リナリ、軍司令官御見舞ノ電報ヲ發セララル。第三師団正面ノ敵相互ニ戦闘セルカ如ク縛サレタル俘虜ニナレルモノアリト云フ、尚同(方)面ノ敵引キ上ケタル如キモ師団自重シテ進出セス、右68i方面進展セルモ一般ニ現状維持、寺垣中佐呉淞方面後備隊ノ守備正面ヲ視察指導ス、同地付近ハ尚攻撃前進スルモノト信シ防守ノ氣ナキカ如クナリシト

本晩空襲アリ警鐘ヲ以テ報シ睡夢ヲ破ラル、天候快晴ニシテ月明ラカナリキ

攻撃実施セラレサリシモ、他ノ方面ニ於テハ概ネ予定ノ如ク進捗セリ。3D11D方面大ナル変化ナシ。片山支隊、谷川支隊ト交代ヲ了シ原所屬ニ復歸ス、支隊長交代途中軍司令官ニ申告、昼食ヲ共ニス、魚類ハ上陸以來一度食膳ニ上リシノミト云フ
管理部長3D司令部位置ニ將來軍司令部トナス為メ檢分ニ行ク、手狭ノ由ナリ、呉淞後備隊敵ノ夜襲ニ用ヒシ鐘大鼓ヲ持參ス、戦利品ノ蒐集必要ナリ

軍事郵便激増手力廻ラヌ由、公用書類モ一緒ニ取扱ヒアル為メ遅延スルコトナルヘク善後策ヲ講スルヲ要ス

◇九月二十九日 曇時々晴、夜雨アリ

〔欄外〕内山SA旅団上陸開始、9D第一線ニ進出

全軍ノ死傷病一万二達ス

全般ニ於テハ戦線大ナル変化ナシ、101D正面ノ敵モ頑強ニシテ瀘藻クリーク北岸ノ敵頑強ニ抗戦シ、四度突撃シテ村落ノ半部ヲ占領セリト。安達大佐本日午後負傷セリト、顔面及股ノ由ニテ生命ニ別条ナキハ幸ナリ

死傷病、全軍合シテ凡ソ一万二近クナレリ、随分高価ナル犠牲ナリ。聞北復返リ、南京クーデターノ謀略ハ着々進行シアリト果シテ期待シ得ルヤ?出来レハ幸ナリ

○勇ましく戦ひをりし友達も 今日傷けりと人は伝へつ
○一万の犠牲貴しあまりにも 頑強なる敵恨めしく思ふ
○今宵また機関銃声頻りなり 激戦のさま思ひやらるし

◇九月三十日 曇後微雨

〔欄外〕 13D長上陸開始 近藤第一部長来部

西本願寺慰靈祭

近藤少将(軍司令部第一部長)挨拶に来部、荻洲中将(13D長)本日陸上陸接援ノ為メ来部、西本願寺ニ於ケル陣没將兵ノ告別式ニ司令官代理トシテ列席、軍司令(官ノ)「敬弔英霊」ノ色紙ト「我友の今日の舟出をはかなみつ 心にかかる故郷の空」ノ丹冊トヲ両師団ノ英霊ニ捧ク、因ニ遺骨四〇〇体本日告別式後舟出スルモノト思ヒ居リシニ出発ハ五日ノ由。第一線大體変化ナシ、第百一師団終日砲撃(A2h)シテ一拠点ヲ抜ク能ハス前途思ヒヤルヘシ

六年振リニ上海ノ市内ニ入リ思出多シ、上紡ノ某氏ニ会ス、予ノ在ルコトカ知レ渡ルヘシ

夜半風雨稍烈シクナル、第一線ノ労苦真ニ同情ニ堪エス、我等ノ衣食勿体ナキ心地ス

本夜管理部ヨリ朝日、カステラ、羊カンナト加給

◇十月一日 快晴

月再ヒ改マル、3D方面ノ戦況亦聊カ進展ス、9Dカ3Dノ右ニ出ルコトニ軍命令ニテナリアルカ3D割込ミテ出テス。101D戦況停頓、早クモ聊カ悲鳴ヲ挙クルノ態、幕僚カ積極(的)ニヤルトコロハ戦績良好ナルカ如シ

参謀本部ノ鈴木敬司歩兵中佐本日辞去、幾尾少佐宛手紙ヲ托ス、高園大佐慰問金ヲ当方宛送附シ来リシモノノ分ナリ(山口聯隊区司令部某少佐)

久シ振リニ秋晴レノ快晴ニシテ気持好シ、天候漸ク本格的ニ定マリシ如ク作戦亦定石ニ乘リテ進展スヘシ、我カ皇軍ノ前途ニ武運長

◇十月三日 曇時雨アリ

〔欄外〕 敵退却ノ兆アリ

楊行鎮ノ3D司令部視察

夕刻飛行機ノ綜合報告ニヨレハ、大場鎮付近ヨリ南翔方向及蘇州河南岸方面ニ移動スル部隊相当アリ。又南翔西方地区ニモ部隊ノ移動スルモノアル等、敵後方地帯ニ於テハ第一線ヨリ反対方向ニ移ル部隊及砲車、自動車アリテ今迄ニナキ現象ナリ。9D3D正面亦敵ノ抵抗大ナラス、敵ハ或ハ退却ヲ開始セルニアラスヤト判断濃厚ニシテ軍司令官ノ頭ニモ相当此懸念深シ、軍ハ敵ヲ逸セサランコトヲ懸念シ第一線部隊ニ注意スルトコロアリ。然レトモ11・00ニ於テハ敵ノ第一線ハ依然敵存スルコトヲ知ル。101Dハ本夜瀟瀟クリーク渡河ノ苦ニシテ其方面ニハ終夜砲声不断、果シテ成功セルヤ?本日3D司令部(在楊行鎮)ニ至リ、軍司令部移転ノ為メ所要ノ指示準備ヲナス。荻洲、内山両將軍来部

◇十月四日 曇

〔欄外〕 大場鎮攻撃計画軍司令官ノ決裁受ク

右企図東京日々夕刊ニ曝露セラル

本朝第二課長自ラ飛行機ニテ偵察ス。敵ハ大場―南翔―嘉定ノ線ニ陣地ヲ構築シ依然退却ヲナサス。蘇州河左岸嘉定大場西方地帯ニモ陣地増強セラル。第十一師団ノ左翼方面9D進出ス。聯隊長不在ノ安達聯隊ノミヨリナシテ進出シアラズ。101Dハ明夜コソ瀟瀟浜「クリーク」ノ渡河ヲ決行スルト云フ報告アリ

町尻少將軍務局長ニ、後宮中將鈴木兵団長ノ後任ニ転出ノ由噂ヲ

久ナレト祈ル

本日ヨリ内地トノ定期航空(軍用)開始セラル予定ナリシカ遂ニ来ラス

大西大尉、安達大佐ノ見舞ニ行クトノコトニテ名刺ヲ托ス永澤大佐ニ対シテモ亦同シ

◇十月二日 晴曇

〔欄外〕 顧家宅7・30第三師団占領ス

上海―東京間定期航空連絡成ル

天かける空の使はひと飛びに

東の便りもたらしにけり

空襲警報にランブ細めて ゆあみかな

戦闘有利ニ進展ス。3D9D正面ノ敵ハ既ニ退却セシナリ。101D正面モ亦大體「クリーク」ノ線迄進出ス。飛行機報ニヨレハ嘉定―南翔道、蘇州河南岸部隊ノ行動スルモノ多シ。大體羅店―劉河道開放セラレ作戦ノ一進展ナリ。尚上海ノ四銀行ハ本夜何カ声明ヲナス由。是レモ銀行ノ南京ニ移ス準備カトモ云フカ、此前ノ例ニ懲リテ嘉定―南翔―大場ノ線ヨリ主力カ退ルモノトハ一人モ判断スルモノナシ。尚傍受ニヨレハ何応欣(欽)ハ常熟、蘇州陣地ノ通信網構成ヲ督促シアル由ナリ

定期航空第一回首尾好ク到着、安達運航課長来部、東京ヨリ「ハシ」「ソバ」ノ土産アリ。皇威愈々宣揚、又後藤侍從武官ヨリ九月下旬―十一月上旬ノ候、侍從武官御差遣ノ由内報アリ感激ニ堪エス竹下海軍大將司令官訪問。石原少將関東軍参謀(副)長ニ下村少將第一部長ニ交代セシ由ナリ

聞ク。命課通報ヲ回覽、澄田大佐ノ砲兵監部、伴大佐ノ4A長転出ノ辞令アリ

本日夕刊入手ス(飛行便)之ニ大場鎮ニ対スル旋回攻撃ノ企図ノ記事アリ。機密ノ曝露ニ憤慨ス。本郷少佐其真相調査ニ武官室ニ行ク。楠本大佐、原田少將連絡ニ来ル

◇十月五日 曇

荻洲第十三師団長、部下団隊長ヲ引具シテ軍司令官ニ挨拶ニ来ラル。本日ヨリ逐次戦場ニ向ヒ進発スルヲ以テナリ

11D桜井参謀亦状況報告ニ来ル。師団ノ実情重藤支隊ト交代シ急速ニ南進ハ不可能ナル状態ニ在リト

3D11D共ニ本夜渡河攻撃ノ予定。第一課ハ本日カ最モ閑散ナリト云フ。参謀長ハ本日午後第三艦隊ニ行ク。末藤大佐新聞発表ノ責任ニ就テ陳謝ニ来ル。各課長、管理部長ト共ニ本夜勤焼ニテ会食ス。N大佐例ニヨリテ「メートル」ヲ挙ク。T中佐亦氣焰万丈人可ナリ。時偶々空襲アリAAG悉ク打ち出ス。虹口及上紡付近ニ爆彈ヲ投下セリト

◇十月六日 曇微雨

〔欄外〕 101D瀟瀟浜「クリーク」ヲ渡河ス

末藤大佐重謹慎三日処分

本晩又タ敵機空襲アリ。昨夜ノハ虹口碼頭ニ落下、人数数名、馬数頭ノ被害アリ。尚昨夜ノ江湾附近ヨリノ砲撃ニテ公大飛行場ノ陸軍機二、海軍機三ノ損害ヲ受ク。第百一師団ハ瀟瀟浜「クリーク」ヲ渡河シテ南岸ニ進出セシモ天明来戦闘進捗セス、3Dハ在〇〇方

面一部「クリーク」ヲ渡リシノミ。第九師団方面稍進展ス
横山少将（由良要塞司令官）ヨリ5ノ9、16ノ9発ノ手紙ヲ落手
ス。種々戦闘振リニ関スル質問ニテ答解スル限リニアラス返信ヲ出
サス

夜「キング」ヲ家ヨリ送り来ル。16ノ9発ナリ。昨夜家ノ夢ヲ見
タルヲ以テ通信テモ来ルカト心待チセシニ雜誌ノミ来ル。何分心忙
シク之ヲ見ル氣持モセス

楠本大佐謀略ノ話シアリ果シテ成果如何ナリヤ？

尚敵ガ8ノ12日間劉家—羅店方面ニ大反攻ヲヤルヤノ風聞アリ
ト云フ

◇十月七日、八日 欠落

◇十月九日 雨

〔欄外〕新聞記者来訪

八房宅ニ於テ「ソ」聯將校（？）ノ屍体発見

我れながら気のいらだつを覚えけり

人の怒るもことはりにこそ

各師団參謀長及航空兵団高級部員ヲ司令部ニ招致シ懇談及軍司令
官ノ訓示、參謀長ノ指示アリ。正午過解散

明日宿營地移轉ニテ聊カ諸準備ニ多忙ナリ。午後二時新聞記者連
中軍司令部ニ軍司令官ヲ来訪ス。初メテノ来訪ナリ

第三師団方面戦況稍進展ス。68 i カ34 i ト交代セルモノニテ68 i
カ第一線ニ出レハ不思議ニ作戦進展ス。6 i 正面八房宅付近ニ於テ
ハ敵ノ遺棄屍体180 MG 38 鹵獲、報アリ

降雨連日今日モ晴レス。第一線ニテハ敵ヨリモ雨力恐ロシイトノ

風聞アリ。呉淞ノ後備隊更ニ進出ス、此方面ノ敵ハ漸次後退シアル
カ如シ。9 D、進出困難ニシテ13 Dヲ11 Dニ代ヘ出スヤ否ヤニ就テ
N大佐虫ノ居所悪ク聊カ当惑ス

◇十月十日 風雨強

〔欄外〕軍司令部ヲ楊家宅ニ推進ス（各部其俟）

道路不良ニシテ軍司令官ハ遂ニ旧位置ニ残留

外国新聞記者ニ会見。第八船（戰）隊陽動開始

御天氣尚悪ク「ガツカリ」ス

本朝十一時半頃外国通信員「アルバート」（アーベント）及某
軍司令官ニ接見ス。兩人ハ好意ヲ有スル由ニテ特ニ選マレテ他ニ先
ンシ面会ヲ許サレシナリ。本村中佐、宇都宮少佐案内、岡崎君ノ通
訳ナリ

軍司令官モ楊行鎮司令部ニ移轉ノ筈ナリシモ道路悪ク、午後三時
遂ニ決意中止。朝九時ニ出發セシ西原大佐午後三時二十分到着セシ
由、予モ司令官ニ附シテ残留、長、寺垣両中佐モ残留セリ
風雨激シク第一線ニハ砲声MG等断続ス。戦闘ノ苦痛想像ニ難カ
ラスト雖、此風雨コソ一面ヨリスレハ天与ノ好機以テ□□スヘキナ
リ。勇アリヤ否ヤ？

◇十月十一日 曇

〔欄外〕軍司令官楊家宅軍司令部ニ引キ越シ

天候稍恢復セルモ快晴ニ至ラス。楠本大佐謀報關係ニテ来部。楊
家宅ノ第二課ト連絡ス

第三、第一百師団ニテハ昨夜ヨリ本朝二巨リ一部戦線進出ス。第

◇十月十三日 晴

久シ振リノ好天氣ニテ、早朝来戦線上空ニハ我飛行機乱舞爆撃ヲ
加フ。道モ固マリ行キ交フ車馬ノ足先モ輕ク速度早シ

戦況豪モ進展セス、將軍胸中聊カ悶々ノ情ヲ認ムルモ如何トモナ
シ難シ。只幕僚トシテ実ニ申訳ナク只最善ヲ尽シテ神明ノ加護ヲ待
タントス。大場鎮付近ニハ敵兵増加中ニシテ司令部モ南翔、上海ニ
進出セルカ如ク、上海ノ放棄ハ断念セシニアラスヤノ感アリ

第一百聯隊ノ両暗号書共ニ無事保管シアリテ異状ナシ、直チニ參
謀本部ニ報告ス

夕刻小雨アリ天氣怪シクナル。今夜ハ久シ振リニ入浴ス

◇十月十四日 快晴

〔欄外〕上海方面ニ更ニ一軍増加ノ噂アリ

戦況膠着敢テ進展セス。果シテ進展ノ見込アルヤ甚タ疑問ニシテ
軍司令官ニ焦燥（躁）ノ念ヲ起サシメアル幕僚トシテ実ニ痛嘆ニ不
堪。如何ニスレハ可ナルヤ智恵ヲ絞ルモ名案浮ハス、軍司令部ニ在
リテ見レハ各兵団ノ戦闘法不十分ナル如ク感セラルルモ、兵団ハ勿
論夫々最善ノ努力ヲ竭シアルナルヘク、軍トシテ打ツ手ヲ考ヘサル
ヘカラス。遂ニ纏マリタル成案ヲ得ルニ至ラス

22 i 44 i ノ補充大隊来部。夕刻陸軍省ノ關係者多數来部、其消
息ニヨレハ、内地ニ於テハ更ニ特設二師団ニ去ル十一日動員ヲ令セ
ラレ、既ニ動員待命セル一師団ト共ニ一軍ヲ編成シ当方面ニ増援ノ
由、実ニ申訳ナシ

本夜月明下空襲アリ、上海、呉淞方面ニ向エルカ如シ。江灣ノ飛

「メートル」ヲ學ク

行隊ハ天候不良ノ為メ遂ニ飛来セス。就床十一時三十分

◇十月十五日 晴

〔欄外〕伊東中将ニ連絡

昨夜迄ノ状況依然トシテ進展セス、此際新手ヲ打ツ要アレトモ名案更ニ浮ハス。今日各師団ニ幕僚連絡ス。第百一師団司令部ニ行キ師団長并幕僚ト会見状況ヲ聴取ス。軍ノ企図達成スヘク努力中ナルモ軍情ハ意ノ如ク動カス。101旅団司令部ノ工藤少将ヲ訪ヒ同地聯隊長トモ会ス。更ニ各案ヨリ歩兵ノ近迫作業ニヨリ師団ノ特質上確實ナル方案ト認ムルニ適當ス

台湾ノ重軽爆、本日空輪到着セルニ輕爆一機ハ海上ニ不時着、海軍ノ搜索モ無効発見スルニ至ラス。昨夜北東ノ風強マリ暗雲去来天候ノ悪化ヲ思ハシム。更ニ快晴続ケアレト念シテ就床十一時半。内地新聞送付シ来ル

◇十月十六日 快晴北東ノ風強シ

〔欄外〕

皇后陛下御製〔御歌〕

なくさめむことの葉もかなたゝかひの

にはをしのひてすくすやからを

胡家庄東南無名部落、百一師団ノ一小隊ニヨリテ占領

戦況依然何等ノ進展を見ス。13D11D重支〔重藤支隊〕ニハ長中佐連絡ニ行ク。11D集結、13D広福ノ攻略共ニ促ス。荻洲師団長軍ノ攻撃指導ニ批難ヲ加ヘ長中佐傾聴シテ帰ル。師弟ノ特殊ノ關係アリシ都合ナランモ不都合ナリ。但シ惡意ニアラサルコト勿論ナリ。

故郷氏神妙見神社ノ祭礼ナリ。遙カニ礼拝シテ皇軍ノ戦勝ト迅速ナル事變ノ終末ヲ告グヘク祈願ス

9D第三師団正面局部に於テ状況稍進展。9Dハ陳家行西端ヲ一時奪回サレシモ更ニ進出ヲ企図シ、3D正面ニ於テハ黄港、愈宅ヲ占領ス。13D嘗テノ抱負モ消失当面ノ陣地ノ突破ニ難色アリ。矢張り認識不足ノ結果ナリ。昨夜田尻少将及参本鈴木中佐来部、杭州方面ノ上陸ニ就テ打合ハセヲナス。就床十二時三十分

昨日我戦闘機一南翔上空ニ於テ墜サレシ由ナリ

◇十月十九日 快晴

連日ノ快晴、江南ノ秋実ニ氣持好シ。田尻〔利雄〕第三師団参謀長、第十三師団畑参謀長連絡ニ来ル。陸軍省ノ連絡員要務ヲ終リ大部分本日帰京。其本務ニ関シ総括的ニ参謀長意見開示

午後101D正面ノ右翼ニ対シ24日射撃。屋上展望台ヨリ望見スルニ実ニ壯觀ナリ。然モ此日亦歩兵進出セス成果ノ觀ルヘキモノナシ。当師団ニ対スル期待ハ今や何物ヲ有スルニ至ラス残念至極ナリ

懷中時計ノ修繕〔ゼンマイ切れ〕成ル。夕刻持参シ来ル、代金二円五十銭

昨夜毛布一枚、腹巻一枚増給ヲ受ク

◇十月二十日 快晴

〔欄外〕27ノ10攻撃開始ノ決心確立

参謀長9D3Dニ連絡

大連市會議長慰問ニ来ル

満月皎々戦場明 砲声殷々和陸声

N大佐作戰ニ干渉セラルコトヲ極度ニ忌避シ、朝ノ会報時ノ各意見ニ就テサヘ快カラス、第一線参謀亦之ニ合流シ此重大時機ニ寒心スヘキ状態ニ在リ。Y中佐ニ訓諭シ積極的ニ難局打開ニ邁進スヘキヲ告ク。陸上機ノ鉄橋爆破ハ奏功セス

101D辻予備少将ノ敵陣背後ノ交通壕ヲ伝フテスル、胡家庄東南無名ノ攻略功ヲ奏シ聊カ溜飲ヲ下ケタ心地ス。昨夜明月皎々トシテ一点ノ雲ナク北東ノ風ニ伴ツテ寒氣稍増加、明朝ヨリ冬軍袴ヲ着用スルコトトス。独乙人〔東損害〕ノ贈リシ都々逸ナリトテ

「敵は割箸二つに割れて 末は二本のものとなる」ト面白シ

◇十月十七日 快晴

〔欄外〕9D陳家行占領

9D陳家行ヲ占領シ俘虜ヲ獲、同師団左翼方面ニ又タ迫撃砲ガズ弾數發飛来セシ由ナリ。24日ハ家屋其他堅固ナルモノニ対シテハ爆発ス。9Dノ俘虜モ此威力ニ恐レテ逃ケ出シタルモノナリ。3D正面亦一部ノ進展ヲ視ル

楠本大佐来部。謀略其他ニ就テ打合ハセヲナス。本夕水産学校軍司令部ニ於テ会食。陸軍省派遣ノ各官ト鋤焼ヲツツク。午後七時半明月ヲ眺メテ帰途ニ就ク。上海方面空襲アリ。万天照空灯ノ照射高射砲同MGノ射撃ヲ觀ル。軍司令部附近ニ於テモ高射砲打ち出ス。汪派飛行場ニ一発爆彈落チシ由損害ナシ

患津子ヨリ手紙来ル。定井ヨリハ何ノ音信モナキ由、御母上ノ病氣好転ハ事実ナリト

◇十月十八日 快晴

戦機將熟江南秋 敵將知否中旬命

戦況大ナル変化ナシ。荏苒日ヲ延ハスニ於テハ本月三十日開催セラルヘキ九ヶ国条約會議ニ思ハサル横槍ヲ受ケントモ限ラス。又一軍新ニ上陸セントスルアリテ軍ノ面目ニモ関シ、一面各師団ノ状況ニモ大ナル無理モナキ様子ナル故、軍司令官ハ斷然27ノ10総攻撃ヲ開始スヘク決心セラル

参謀長ノ話ニヨレバ9Dモ大分決意鈍レルカ如シ。難局ニ立チテハ已ムヲ得サルコトカ。旅団長、聯隊長ノヤリ振リニ就テモ相当批難ノ声ヲ聞ク。兎角戦争ハ押シノ一手ナルカ。3D正面ニテ獲タル俘虜19名到着ス。第二課ニ於テ一応取調ヲナス。各師団ノ混淆ハ兵力注入カ改編力的確ニ判定スルヲ得ス

昨夜満月皎々トシテ戦場ヲ照ス。征戦二閱月、銃砲声ヲ聞キツツ聊カ感懷ナキ能ハス

満月の光明るき戦場に 大砲小銃響き渡れり
曇りなき今宵の月を眺めつつ 勤め果さん術を究めつ

◇十月二十一日 快晴

〔欄外〕末藤大佐連絡ニ来ル

和知大佐招致

10A派遣ノ件来電

13D新木橋占領、9D談家塘占領。101D中部李家橋占領等逐次攻撃進捗ス。本日海軍聯合航空隊司令、末藤大佐、中井中佐等来客多シ。和知大佐亦来部謀略ニ就テ軍司令官ニ報告ス。夕食ヲ共ニシ第一線部隊長トシテノ体談ヲ聴取ス。11D司令部ノ指導モ余リ芳シカラサル如シ〔統帥部ノ嚴格ナル指導ト命令確實ナル実行〕

東京電報ニヨリ10 Aカ当方面ニ派遣セラルコトヲ正式ニ承知ス
(6 D、18 D、114 D、5 Dノ一部) 本日久シ振リニ理髪ス

◇十月二十二日 快晴

〔欄外〕金平中佐連絡ニ来リ金山方面10 A上陸ヲ報ス
本日モ敵生意氣ニ局部的(13 D、9 D正面)ニ逆襲シ来リ多大ノ
損害ヲヘテ撃退ス

58 i (13 D)ノ軍旗ハ敵弾旗竿ニ命中折損シ旗手負傷、副官戦死
セシ由ナリ。9 D、3 D、13 D共ニ幾分ノ進展ヲ観ル
参本作戦課ノ君(公) 平中佐連絡ノ為メ第十軍関係ノ命令携行持
参ス。公式ノ連絡ハ之ヲ以テ初メトス。軍司令官ハ10 Aノ上陸後
ノ補給ニ就テ大ニ懸念セラレ、其一師団ヲ浦東ニ上陸セシムルヲ可
トスル意見具申ヲ出シ度希望ナルモ尚研究ノ余地アリ。深更迄研究
ス

101 i長飯塚大佐着任、申告ニ来ル。同期生ノ関係モアリ同聯隊ニ
対スル忌憚ナキ意見ヲ述ヘ統帥ノ参考ニ供ス
本夜深更敵機襲来(午前一時頃) 近クニ爆彈落チ、対空射撃部隊
対戦セルカ如ク夢幻ノ間ニ承知ス

◇十月二十三日 快晴 数日前ヨリ朝霧深シ

〔欄外〕9 D大ナル抵抗ヲ受クルコトナク走馬塘クリークノ線ニ進
出ス

〔受信〕中島虎吉中将、山本龜彦

9 D一挙約千米進出シ走馬塘クリークノ線ニ進出ス。101 Dノ豪家
柳占領ト謂ヒ3 Dノ李家宅占領ト云ヒ、將又「チャイナプレス」紙

ク。元ヨリ大ニカメラルモ予期外ノコトニテ部隊中々動力サルカ如
ク「クリーク」南3千ニモ敵占拠シアリ。5・30頃婦部ス、時ニ重
砲彈間隔ヲ置キテ二発門前約三百米ニ落下、珍ラシキコトナリ

◇十月二十五日 快晴

〔欄外〕追撃第二日、走馬塘南方約八百米及大場鎮北側東西ノ線ニ

進出ス
独乙大使館付武官来部

9 D正面大体走馬塘クリークヲ渡河セシモ3 D正面未タ不可(朝
ノ情况)。101 Dモ大場鎮北側東西ノ線ニ進出ス。夕刻頃ハ3 D11 D
略ホ同線上(クリーク) 南方約八百米ノ線)ニ進出セルモ何レモ
敵ノ抵抗ニ会シ、又101 D朝ノ俛、兵站部隊進出シ呉淞「クリーク」
ノ水路開通ス。3 Dノ俘虜ノ言ニヨレハ督戦隊退却セシ由。楠本謀
略一部ノ成功カ?

独大使館付武官オットウ少将来部。軍司令官ニ会シ昼食ヲ共ニ
ス。科研ノ所長亦来部

大場鎮戦壯觀ナリ

爆煙濛々圧戦場 大場戦線向南動

將軍胸中果夫奈 黙々彼戦無限情

新聞ハ大場鎮進出ニテ大賑合ナリ。昨日既ニ号外出デシ模様、又
新聞紙ハ参謀総長ノ祝電アリシヲ伝フルモ軍ニハ到着シアラス。

◇十月二十六日 快晴稍時ニ曇ル

〔欄外〕大場鎮占領

〔参謀総長宮殿下御祝電御発送の新聞記事の切抜きを貼付

ノ江湾ノ支那軍撤去ヲ指囃スル記事ト謂ヒ、尚又昨日一昨日ノ敵ノ
全面的攻撃ト謂ヒ敵退却ヲ思ハシムルモノアリシカ、全般ノ状勢ハ
本日中此徴ヲ見ス。9 Dハ全滅ヲ睹(賭)シテ所命ノ線ニ進出ヲ企
図セシモノニシテ、如何ナル敵ノ手達カ配備弱クシテ其虚ニ乗セシ
形ナリ、今や既ニ作戦峠ヲ超シテ江湾方面敵ヲ逸セサランコトヲ冀
フヤ切ナリ

山本龜彦氏ヨリ家族ノ詳シキ通報ニ接ス。母上ノ罹病ニ就テモ概
ネ真相ヲ把握スルト共ニ、壽喜及露ノ態度甚タ良シカラス実ニ氣ノ
毒ナリ。中島虎吉中将ヨリ慰問ノ葉書ヲ頂戴ス

◇十月二十四日 快晴

〔欄外〕午前八時追撃命令ヲ出ス

9 D司令部ニ連絡

雄図將成敵後退 前線不動追撃命

惜戦機未不至熟 空逸長蛇大場壘

昨日来9 Dノ進出、101 Dノ進出ハ敵ノ退却ヲ指囃スルモノアリ。
果然本朝七時半、昨夜半(四時頃カ) 9 D午後ハ走馬塘クリークヲ
超エ進出セルカ敵居ラスト。是等ノ情報ニ就テハ昨夜来第一課、第
二課、9 Dノ作戦・情報参謀間ニ彼是交渉アリシカ如キモ全然承知
セス。結局追撃命令ヲ下達セラル。一面飛行機報ニヨレハ南方ニ退
却スル部隊多シト。愈々敵ノ退却ヲ確實ト認ム。9 D、13 D、101 D
共ニ中々進出セス。本日中ニ鉄道線路迄ハ進出スヘシト予想セルカ
一向ニ其氣配見エス。3・30頃軍司令官3 D司令部ニ13 D、9 D、
3 D長ヲ集メ意図ヲ示シ訓示アリ。此間予ハ9 D、3 D両参謀長ニ
進出ヲ促進シ、大坪、本郷両参謀ト共ニ9 D司令部ニ至リ拍車ヲ懸

しあり

当面ノ敵ノ抵抗依然頑強ナレトモ其後方ニ於テハ若干部隊宛敵退
却シアリ。戦車突入スルモ敢テ戦鬨行為ヲナサス、疲レ果テアルカ
如シト。各師団力攻亦力行(攻) 大ニ努メ后五時三十分157 i 遂ニ大
場鎮ヲ占領ス。掃蕩ノ結果、俘虜僅カニ四名、9 D、3 D夫々約五
百米進出頭ヲ揃エアリ

参謀総長祝電ヲ寄越サレシ由(昨日)、武藤大佐本日到着述フレ
トモ未タニ受領セス(昨日新聞発表)。方面軍ノ編成内容ニ就テ軍
司令官不満、私信ヲ明日ノ飛行便ニテ陸相、次長宛發送、光成少佐
ニ下命ス

上海市長本日江湾、大場放棄ノ声明ヲ發表セシ由、然モ支那紙ハ
依然強カリヲ放送ス

◇十月二十七日 曇、南風、気温上ル

〔欄外〕追撃戦、蘇州河畔ニ進出ス

追撃戦順調ニ進捗セルモ敵ハ既ニ本天明前退却シテ獲物少シ。流
石ニ退却ハ見事ナモノナリ。但シ昨夜ハ相当ニ友軍相撃等ノ混雜ハ
アリシカ如ク、尚鹵獲彈藥等モ相当ニアル模様ナリ

勝ち軍の影に潜める人柱

護国の神を忘るなよめ

参謀総長ヨリ祝電及賜物(シヤンパン)アリ。軍令部長ヨリ祝電
アリ。其他祝電来ルモノ多ク、午後六時軍司令部天幕内ニ於テ祝杯
ヲ挙ク。偶々本日ハ吾等ノ司令官ノ誕生日ナリシ由ナリ

陳天民ノ謀略実施セラレシ如ク、尚今後ニ於テモ蘇州河ノ渡河、
南翔ノ攻撃ニ密ニ協力スル等。希クハ事実トナリテ具現セシムヘ

ク、百万円敢テ惜シムニ足ラス尚戒ムヘキハ欲ト金ナリ

◇十月二十八日 晴

〔欄外〕 気温昇騰暑サヲ覚ユ、幸ニ天気好シ

第十一師団西面シテ南翔ニ向ヒ作戰ス。軍主力ノ右側ノ掩護ナリ。和知聯隊勇敢ニ攻進シ手薄ニ付キ戦車ト後備ニ大隊ヲ配属ス。3 D、9 Dヲ以テ蘇州河渡河ヲ促シ其準備ヲ命シ作戰地境ノ切替ヲ命セラル

軍司令官ハ劉家行付近ノ野戦病院及同予備病院ヲ見舞セラル。之ニ随行、戦勝勇士ノ収容ニ就テ一擲ノ涙ヲ流ス。固ヨリ武人トシテ覚悟ノ前ナレトモ設備当事者トシテハ大ニ考慮ヲ要スルモノアリ。唐橋揚陸地点ヲ序ニ視察セラレ亦随行ス。補給状態良好ニナリツツアリ。大場鎮ノ軍司令官部位置視察ノ予定ナリシモ車輛充滿シ半輪帰部ス。塚田少將其他方面軍ノ一行来部シアリ原田少將モ亦来部家ヨリ橋畔類ヲ送り来ル

◇十月二十九日 曇荒模様

第一線ノ状況変化ナシ。南翔ヲ攻撃スヘシ、浦東ヲ先ニスヘシ等各種ノ説アリシカ結局南方ノ封鎖ニ全カヲ注クヘシトノ意見ニ帰ス。次ノ軍司令官部ノ位置モ大場鎮或ハ江湾鎮等種々ノ説アリ。本午後江湾方面ヲ視察セシカ復旦、労働大学共完全ニ破壊、利用シ得ルハ音楽学校ノミ。結局大場鎮ニ転移スルコトニ決ス

手紙ヲ回付シ来ル。守田少佐ヨリ高園大佐見舞金ヲ送付シ来ル。明日ノ飛行便ニテ諫山中佐ニ送付スヘク副官部ニ依頼ス

天気漸次荒模様ナリ。快晴ナランコトヲ祈ル。大場鎮守備当面ノ

敵ノ師団長敗戦ノ責ヲ負ヒテ自刃セシ由、敵ナカラ其責任觀念ノ旺盛ナルハ感心ナリ。本夜遂ニ降雨但微雨ニシテ支障ナシ

◇十月三十日 曇

全般ノ状況大ナル変化ナシ。3 D本夕蘇州河渡河ノ筈ナリシモ謀略準備出来サルヲ以テ之ヲ延期ス。昨夕英仏伊守備区域内ニ我砲彈落下セシ由、調査ノ結果ハ我砲彈ナルコト確實トナリ陳謝スルコトニ決ス(68 iノ歩兵砲彈ナルカ如シ)

軍司令官ハ独伊新聞記者ニ会見、午後吳淞ノ野戦病院及兵站病馬廠、宝山ノ野戦予備病院及自治委員会ノ工作ヲ実視セラレ随行ス。病院ハ大体整頓セラレFLノ比ニアラス

軍司令官部ハ大場鎮南方約一杆ノ周宅ノ学校ニ移転スルコトニ定ム方面軍司令官部ノ編成指示等ニ就テハ軍司令官大反対大不満ナリ

◇十月三十一日 雨

〔欄外〕 3 D蘇州河渡河開始

夜来降雨時々晴間ヲ見シモ遂ニ晴レ上ルニ至ラス。道路モ粘土、鳥餅ノ如ク特ニ人馬ノ交通ニ障礙ヲ呈ス。但シ前回ノ如キ甚タシキ状態ヲ呈セサルモ、大場鎮付近ハ相当ノモノナリ。本正午3 Dハ蘇州河渡河ヲ開始ス。右翼隊ハ二大隊渡河セリトノコトニ大ニ喜ヒアリシカ、僅カニ一中隊ト一小隊ニテ爾後何ラノ進展ヲ見ス。愁色漂フ。結局準備不十分ニシテ聊カ輕拳ニアラサリシカ?

陸軍省政務次官慰問ノ為メ来部留守宅ヨリ冬服及シャツ到着ス

明日以後位置スヘキ軍司令官部位置(大場鎮南方約一杆^マ周宅)ヲ視

察シ新八字橋、吳淞ヲ経テ帰部

◇十一月一日 曇頓ニ寒サ加ハル

〔欄外〕 軍司令官部ヲ大場鎮南方約二杆周宅ニ移ス

3 D昨三十一日蘇州河渡河一大隊ト一中隊陳家渡南岸ニ進出セシモ戦果拡張出来ス。約二六〇名中逐次損害ヲ受ケタ刻六十名位トナリ、之ヲ後退スルヤ否ヤニ就テ片山旅団ト師団司令部間ニ於テ相当論議アリシカ如シ。9 D姚家宅、張家宅付近ニ向ヒ渡河、歩三大隊位進出セシ由ナルモ余リ明瞭ナルコト判明セス。13 Dハ陳家宅北方ノ守備ヲ交代準備中ナリ。蘇州河以南ノ敵ハ大分後退シ戦況ノ進展ヲ予期スル如ク軍司令官ハ判断セラレアリ

本朝塚田少將以下方面軍幕僚旧軍司令官部位置ニ来リ将来ノ作戰方針ニ就テ協定、大体意見ノ一致ヲ視ル

本日ヨリ全ク冬服ヲ着用セルカ夫レニテモ尚ホ幾分寒サヲ覚ユ。気温ノ激変ナリ。新軍司令官部ハ産婆学校ノ付属建物ナリ。新亜細亜ヲ産ム為ノ軍司令官部トシテハ縁起好シ

◇十一月二日 雨

天気好クナリカケシト見エシガ、午前ヨリシクシクト降雨夜ニ至ルモ止マズ。シツコキコト大陸的ニシテ急変セス。9 D、3 D共二四乃至三大隊渡河セシモ戦況ハ一向ニ進展セス。南翔方面ノ砲兵モ大部3 D、9 D正面ニ移動セシカ如ク此ニ戦闘一頓挫、明三日ノ佳節ニ南市入城ノ希望ハ夢ト化ス

楠本、原田両武官来部、謀略及対外国軍關係ニ就テ報告ス。機密費百万円中央部ニ要求ス

感状審査ニ絡マリN大佐Y中佐衝突、Y中佐詳シク事情ヲ訴フ。

性格ノ相異、感情ノ疎隔ヨリ来レル誤解ナリ

諫山大佐ヨリ来電アリ。予ハ參謀本部付トナリ諫山進級ノ上庶務課長トナリシ由

本夜浦東ノ射弾、野戦航空廠支廠宿舍ニ命中、若干ノ死傷ヲ生ス

◇十一月三日 曇微雨

〔欄外〕 軍司令官作

百万匪軍方殲滅 陣中奉祝明治節

皇威赫々耀八紘 淞滬風情秋色初

愚作

蘇州河畔砲声熾 爆烟濛々蔽敵壘

時は晩秋明治節 旭旗高翻敵陣地

明治ノ佳節ニ当リ司令官以下東方遙拝、遙カニ聖壽ノ万歳ヲ祝シ奉ル

本日歩三四、歩六八、歩十二、歩四四、飯田支隊ニ対シ感状ヲ授与セラル。但文句ハ後ニ発表セラル

9 Dハ砲兵射撃後攻撃ヲ開始セシカ戦況発展セス。砲兵ノ協力ナキ方面ニ於テ却テ戦況進展ス。皮肉ナリ

10 A本日馬鞍群島ノ泊地ニ到着ノ旨来電

祝明治節

戦場の暮舎のほとりあちこちに

万歳叫ぶ明治の佳節

江南に馨る菊花を眺めつつ

祝え今日の明治の佳節

実弾の皇礼砲を放ちつつ

敵壘攻むる明治の佳節

◇十一月四日 曇時晴間ヲ見ル

〔欄外〕K作戦陸海軍協定（水産学校）

戦況停頓ノ形ナリ。9D正面僅カニ進展ス。11D片村參謀長、師団長ノ意ヲ体シ感状ノ件ニ就テ具申シ来ル。意見採用シテ可ナリ。感状ノコトニ手ヲ付ケテ第一課案ノ外ニ別ニ二案ヲ作成ス。午後K作戦ノ陸海軍協定ノ内議ニ出席ス。何ノコトハナシ。只出席セルノミナリ。帰途畑ヨリ菊花一束頂戴ス。支那びとのそだてし菊を手折りきて

部屋に飾り秋の夕ぐれ

官報及異動ノガリ版、吾カ同期生モ大分少将ニナリシカ多クハ師団司令部付等ノ閑職多シ

第十軍ノ行動航空隊命令ニヨリ概ネ判明セリ。本夜戦線相当ニ砲声聞ユ

◇十一月五日 曇夕雨

〔欄外〕10A金山鎮付近ニ上陸ス

本晩10A金山鎮付近ニ上陸、第一回上陸成功。9・30金山城占領。海岸敵無シ等ノ情報相次テ来リ歡喜ニ満チシカ、夕刻左翼方面ノ陸軍ハ肩マテ水中ニ在リテ陸上ノ敵ト交戦中トノ報アリ。稍々憂色アリ

感状回覧、天谷支隊ノ部隊号ニ就テ歩四三ヲ入レテ實ヒ度旨、參謀長更ニ二神參謀ニ連絡ス

画策定

◇十一月七日 風雨、寒シ

〔発信〕留守宅

夜半明ケ方近ク眼ヲ覺セハ風雨（北西）頻リナリ。先ツ頭ニ浮フハ金山城方面ノ揚陸状態ナリ。別段ノ損害モナキ模様ナリ。司令官ノ「マリアリヤ」病状モ全ク全快セシ由

如何ニシテ蘇州河戦線ヲ推進スヘキカ、昨夜モ研究モ本朝ニ於テハ其促実行シ難キ状態ニ在リテ、結核101Dノ歩一聯隊ヲ基幹トセルモノヲ9D長ニ配属シテ翼側ノ掩護ヲナシ、其推進力ヲ増進スル結果トナル

參謀長及西原大佐ハ午後、方面軍司令部ニ白茆口上陸陸海軍協定ノ本協定ニ出席

浦東ノ敵本日南支ニ移動セシ由。当面ノ敵モ恐ラク本朝カ明夜位ハ退却ニ就クナラント判断ス

一週間振りニ入浴ス。流石ニ氣持好シ

◇十一月八日 快晴、北西風、寒シ

〔欄外〕44i虹橋鎮東南端ヲ占領ス

漸ク朗カナル天候トナル。戦線活氣ヲ呈ス

蘇州河南岸敵ノ第二線、浦東方面ノ敵ハ青浦方面ニ撤退中ナルカ如キモ第一線ノ抵抗依然タリ。第三師団、第九師団共ニ稍進展シ、3Dハ辟家野北側ニ仮渡橋ヲ架設ス。11Dノ和知聯隊、虹橋鎮ノ東南端ヲ占拠ス

10A方面6Dハ松橋南方地区ニ18Dハ西方ニ西進中「午前武藤大

9D八字橋付近ニ進出戦線僅カニ進ム。虹橋方面ヨリ敵力続々正面ニ移動スル故同方面ノ攻撃ヲ希望、軍ニ於テモ同感ナル故11Dニ之カ攻略ヲ命スルト共ニ101Dノ歩兵一聯隊ヲ揚家橋西南方地区ニ集結スル如ク命令ス

桜井忠温少将外一行ノ軍司令部訪問アリ。陸軍省各局ノ派遣員五名亦到着ス

軍司令官「マリアリヤ」ノ氣味、但容体敢テ不良ナラス

軍司令部ニ於テモ慰問袋分配、兵雀躍ス

◇十一月六日 曇

〔欄外〕10A有利ニ進展シ、上〔海派遣〕軍蘇州河戦線ノ推進ヲ企図ス

感状（飯田支隊、34i、68i、44i、天谷支隊）決裁

〔受信〕留守宅

当面ノ状況ハ殆ント変化セス行詰リノ状態ニ在ルモ、丁集團方面殆ント敵ノ抵抗ヲ受クルコトナク、午前十時ニハ先頭黃浦江岸ニ到達シ、夕刻前到着ノ情報ニ依レハ、懐カシキ13iノ既ニ松江南方地区ニ渡河進出シアリテ、其方面余リ敵ヲ見サル様子ナリ

敵ハ上海戦線ノ後方地区及蘇州方面ヨリ泡ヲ食ツテ黃浦嘉興方面ニ輸送（兵力カ）中ナルカ如シ。軍司令官ハ此状勢ニ於テ何トカシテ上海蘇州河戦線ヲ押シ出シテ10Aト策定シ、上海南方地区ノ敵捕捉ヲ考慮センコトヲ命セラレ、遂ニ101Dヲ3D、9Dノ中間ニ楔入渡河攻撃ヲ命スヘク落チツク。元ヨリ窮余ノ一策ニシテ期待ハナシ難シ」感状軍司令官ノ決裁ヲ受ク

練習艦隊司令官長官來訪「方面軍司令部ノ職員命課」白茆口上陸計

佐来部、方面軍ノ作戰指導ニ就テ軍ヲ引キツクヘク大ニ論議ス

16D參謀大須賀中佐大連ヨリ来部連絡ス。同師団ノ船舶輸送モ船集マラサル現況ニ於テ予想ヨリ遅延ス。十二日ノ北方ノ上陸開始ハ当然延期セラレサルヘカラサル運命ニ在リ

本日理髪、頭稍重シ、入浴シテ少シハ快クナル

久シ振リニ飛行便ニテ内地ノ新聞來ル

◇十一月九日 快晴

〔欄外〕南市占領、上海完全ニ占拠

高松少佐宮殿下戰蹟御視察

時節到来。昨夜蘇州河南岸地区ノ敵退却ニ就キ9D、3Dハ轡ヲ並ヘテ南市西方地区ニ進出、3Dハ正午過電華鎮ニ進出ス。是レニテ派遣軍ノ任務達成。万歳！

高松宮殿下戰蹟御巡視、御案内申シ上グ。9・30陸戦隊出發「方面軍司令部」市政府「江湾鎮」大場鎮「軍司令部」唐橋「豪家柳」大場鎮「真如9D司令部」3D戰闘司令部「陸戦隊5・00御帰着。廟巷鎮、羅店鎮御視察ノ御意図アリシモ、乍遺憾御案内申上クルニ至ラス

10Aノ状況ハ明カナラス。昨八日十三時発ノ電報ニヨレハ6D主力ヲ松江東北地区ニ集結、18Dハ嘉信ニ向ハシメ、114Dヲ金山付近ニ集結スル如ク部署シアリ

いくさ場は銃の音たえて暗ぐらに

星かげあまたひらめきてあり

◇十一月十日 晴後曇

〔欄外〕軍司令官外國司令官ト会見

方面軍司令部二引越シ

四王天中將慰問ニ来部

齒ノ治療ヲ受ク

南市ノ謀略手達ヲ生シ武力掃蕩ノ已ムナキニ至ル。南市ニハ二千人敵（正規兵六〇〇、警察隊四〇〇、保安隊一、〇〇〇）武官室ニテ準備セル工員ヲ追ヒ払ヒ、北半部ノ「クリーク」ヲ占拠ス。本日空軍爆撃、片山部隊例ニヨリ慎重攻撃準備、実ハ未タ其ノ策案立タサル如シ。敵ノ抵抗スル陣地ノ判断全クツカス。本郷第二課參謀飛行機ニ搭乗偵察セルモ□□ヲ得ス。先ツ五（呉）福陣地ニ後退スルコトハナカルヘシトノ想像ナリ。昆山、青浦付近一帶「クリーク」縦横、部落ハ浮島ノ如ク水ハ鏡ノ如シト云フ

飛行機ノ報告ニヨレハ6Dノ先頭ハ既ニ青浦ニ近ク縦隊ニテ進出セルカ如シ。Kハ既ニ泗溪鎮ニ進出、敵尙其付近ニ退却或ハ反転スルモノアルカ如ク、10A既ニ補給難ニ陥リ彈藥補給出来サルカ如シ。明十一日浦東地区ノ掃蕩ニ関シ軍命令ヲ下達セラル。101Dノ約歩兵三大隊ヲ基幹トスルモノ海軍部隊ノ協力下ニ実施セントスルモノナリ。御天氣下リ坂トナル

◇十一月十一日 曇

〔欄外〕新態勢ニ応シ作戰指導ヲ變更ス

101Dノ一部ヲ以テ浦東ヲ攻略ス。無抵抗

〔発信〕島田海軍中將ノ本田留守宅ヘ（昨日）

〔受信〕西原矩彦

敵ハ呉福陣地ニ後退スル虞濃厚トナル。3Dノ南市掃蕩稍進捗101

候恢復ヲ祈ル。寺垣中佐蘇州河ノ新戰場ヲ視察シ其苦戦ノ状ヲ語ル。3Dノ戰場掃除、慘亦慘、英靈希クハ鎮マリ玉ヘ

當番小林風邪ニテ就床、何カニ不自由ナリ

陸軍大臣ヨリ軍司令官宛上海占領ニ就テ長文ノ祝電来ル

◇十一月十三日 晴

〔欄外〕嘉定占領

重藤支隊白茆江口ニ上陸

祝追撃 一

敗敵集團西又北 皇軍三面追撃急

今宵半月照太倉 明朝殲滅昆山東

追撃 二

蟬集三軍淞滬辺 昨豪語本日壊走

敵將不知軍統帥 可憐昆山一睡夢

各兵团追撃急ナリ。13Dハ劉河鎮南方地区ニ、101Dハ嘉定ヲ超エテ進出、3Dハ道路ノ關係上101Dノ後方ニ、11Dハ嘉定西南方地区ニ、9Dハ稍遅レテ黄浦ヲ超エテ進出、6Dハ崑山間近ニ迫ル。重藤支隊モ亦上陸成功、支塘鎮及其西南地区ニ進出ス。敵ノ大集團ハ嘉定ヨリ崑山方面ニ或ハ黃浦方向ヨリ北方ニ或ハ太倉ヨリ西ニ等、殆ント統制ナク移動スルカ如ク、敵ノ司令官ハ南京、蘇州、嘉定ニ在ルカ如ク、殆ント兵团ノ位置モ判明セサル如ク傍受電二見エ、相當ノ獲物ハアルカ如キモ追撃兵团ト軍司令官トノ間ノ連絡モ亦不十分ニシテ詳細不明。軍司令官ハ本日重藤支隊方面ニ臨場セラル。3Fハ參謀長杉山少將在羅店鎮、13Dニ対スル海軍機ノ誤爆撃ニ就テ陳謝ニ来部（死傷十一名（死5、重傷1、其他5）アリシ由）昨日

Dノ浦東地区ノ進出無抵抗ニテ目的ヲ達ス。11Dノ南翔南方（地）区ノ攻撃大ニ進捗、6Dハ既ニ蘇州河北岸地区ニ進出ト云フ如キ好調子ナリ。軍司令官ハ后七時半參謀長、西原大佐、長中佐ヲ方面軍司令部ニ招致シ爾後ノ対策ヲ擬議、当然決心ヲ變更、新態勢ニ応スル態勢行動ヲ採ルヘキナリ

荻洲師団長連絡ノ為メ来部、將來ノ企圖其他ニ就テ懇談、大円匙ノ手配マテ注文アリ

丸龜出身ノ代議士皇軍慰問ニ来部、第一線ニ起臥シテ親シク苦勞ヲ味イタリトテ大ニ同情アル話アリ

高松宮殿下ヨリ一昨日御視察ノ關係ニテ軍司令官以下關係者ニ御下賜品アリ

新態勢ニ即応スルタメ重藤支隊、16Dハ十四日上陸決行、他ハ正面ヨリ敵ヲ圧迫スルコトニ決定セラル

◇十一月十二日 曇後雨

〔欄外〕各兵团追撃ニ移ル

南翔占領

方面軍ハ常熟ノ嘉定ノ線ニ、軍ハ崑山―太倉ノ線ニ向ヒ追撃、発令ハ昨夜十一時ノ発令ナルカ、夕刻ノ状況ハ大体ニ於テ南翔、蘇州河ノ線付近ナルカ如シ。敵ハ尚ホ北方及西方ニ退却ヲ続行中ナル如ク、崑山付近ノ敵陣地線大凡ソ判明スルニ至ル。陣地戦九十日、部隊ノ動キ相當ニ重ク、統帥部亦稍々鈍重トナレリ。亦已ムヲ得サルモノカ。重藤支隊明十三日北方ニ上陸決行、參謀長其他ノ要員ハ本日乗艦該方面ニ到ル。天候下リ坂ニ午後ヨリ遂ニ降雨アリ。飛行機ノ活動意ノ如クナラズ。天候ハ敵ノ為メ有利ナリ。切ニ明日ノ天

ノ出来事）衆議員ノ慰問団（5名）来部挨拶ノ後辞去

崑山付近一帶ノ敵陣地ハ昨日ノ雨ニテ水浸シナリ之ニ拠ルコト

困難ナルカ如シ。是亦天祐カ

◇十一月十四日 快晴

〔欄外〕本晚11D太倉占領

參謀長白茆江ヨリ帰着

16D重藤支隊ニ続キ上陸

太倉ヨリ西方ニ四〇五萬ノ敵及避難民退却中トノコトニ陸海軍機挙ケテ爆撃ス。13Dハ支塘鎮近ク通り、11Dハ太倉ヲ超エテ北進セシモ余リ進マス。6Dハ崑山ノ敵ヲ攻撃中、9Dハ崑山東方ノ街道上ニ進出、3D、11Dハ太倉付近ニ集結、重藤支隊ハ太倉―常熟道北側ニ、中島兵团ハ其後方ニ集結、23iハ平望鎮ヲ攻略シ更ニ北進ヲ開始シ、18Dハ嘉善ヲ攻略、114Dハ平湖、独山付近攻撃中。皇軍ノ追撃正ニ破竹ノ勢ナリ。破竹ノ勢ト云フカ「決河の勢」ト云フカ盛ンナモノナリ。

追撃に又追撃にひたぶるに

皇軍の意氣以て旺なり

刀匠栗原彦三郎氏磨師ヲ引率来部、記念ノ写真ヲ撮影ス

仏租界内ニテ支那避難民米屋襲撃アリシ由、難民ニテ相当混雜シアル如シ

◇十一月十五日 曇、天氣稍下リ坂トナル

軍司令官ハ午後一時白茆口付近、16D、重藤支隊ノ戦闘指導ヨリ方面軍司令部ニ帰着。司令官ノ現地ニ於ケル16Dノ指導命令ト作戰

課起案ノ命令（次テ各別ニ夫々連絡）トノ間ニ齟齬ヲ来シ、N大佐困ル結果ヲ将来セリ。本タノ各兵団ノ状況：重藤支隊常熟方面ニ方向変換中ナルモ中々兵力ノ集結出来サル模様。13Dハ支塘鎮ニ頭ヲ出ス。11Dハ主力太倉ト支塘鎮ノ中間ニ頭ヲ出ス。崑山ハ9D、6D協定シテ半分宛担任、当面ノ敵ニ対シ攻撃準備中。10A方面大ナル変化ナシ。本日ノ状況ニテ重ハ無錫ニ追撃ハ勿論、南京マテモ一挙追撃セントスル意見ニ一致セルカ、軍司令官ハ從來ニ見ヌ中央ノ意思尊重ニテ、無錫ヲ追撃目標ニ採ルコトサヘモ躊躇シテ許サレス、非常ナル心境ノ変化ナリ。中央部ニテハ常熟、蘇州ノ線ヲ取レハ勅語ヲ賜ハル用意アリト云フ話ナリ。久邇少佐宮本日戦蹟ヲ御視察遊ハサレ軍司令部ニモ御立寄りアリ。西原大佐御説明申シ上ク

6Dノ後備大隊長軍予備隊トナリ申告ニ来ル。13Dニテ編成セルモノナリト

◇十一月十六日 曇午後雨

〔欄外〕 6D原所屬ニ復帰トナス

3D、101D方面軍直轄トナル

后八時ノ情報ニヨレハ戦況愈々有利ニ進展、敵ハ愈々混乱状態ニ在ルカ如シ

全般状況大ナル変化ナシ。重藤支隊ハ未タ常熟ヲ攻撃スルニ至ラス。今迄俘虜600餘獲、BA四門、遺棄死体五〇〇ノ戦果ヲ挙げケシ由。6、9兩師団崑山ニ在リ。9Dハ単独蘇州方面ノ追撃。6Dハ原所屬ニ復帰セシモ爾後更ニ蘇州前進ノ欲望起ル。方面軍二師団ヲ直轄ス。何ノ為メナリヤ目的判断ニ苦シム。兎角何カ自ラ実施セントスル企図心アリテ却テ迷惑ナリ

〔欄外〕 呉福障地ノ一部突破ス

13D謝家橋鎮

重藤支隊常熟北方

〔受信〕 留守宅ノ鹿毛健太ノ清水小学校ノ陸軍省出張員常熟以北ノ呉福障地「セメント」製ノ「トチカ」アリ。重藤支隊モ突破困難、荻洲部隊モ如何カト案セラレシカタ刻情況急転、兩兵団之ヲ突破追撃中トノ報アリ。9Dモ亦其第一線西移シ好景況ナリ。明日軍司令部ハ古里村ニ引キ越スコトス。軍司令官午後來部、各課長、部長ノ会報ヲ行ヒ将来ノ意図ヲ開示セラル。司令官ハ上海付近ノ処理ヲ片付ケ明後日頃追及セラルル予定。河辺大佐、井本大尉來部、御土産ノ頂戴ス

悦子ヨリノ手紙ニ依レハ母上病氣ニ伴フ壽喜ノ態度甚タ不良、此際無心ノ限リヲ尽サントスル魂胆見エ実ニ浅マシキ限リナリ。母上モ其必要ナキニ未タ入院セラレアル由、其心中ヲ憶測シテ不快ナ氣持ス。重義君學位ヲ得タル由慶祝ニ不堪

明日訓練ノ準備ヲナス。股ノ腫物不自由ナリ

◇十一月十九日 風雨強、寒サ稍加ワル

〔欄外〕 軍司令部移転見合ハセ

9D蘇州ヲ占領ス（6・30ト云ヒ6・10ト云フ）

〔受信〕 細川豊彦ノ内田正積ノ啓子ノ山口大佐（福山）

新司令部予定位置ノ古里橋ノ家ハ極メテ貧弱ニシテ、到底軍司令部ノ入ルヘキトコニアラス。付近ノ教会堂ヲ設定セリト。又道路ノ便不利ナル由ニテ移転ヲ延期ス

海軍機ノ目撃ニ依レハ、重藤部隊ヲシキモノ常熟西北方高地線ニ

太倉付近ニ軍司令部推進ノ企図アルモ、通信（有線）網ノ完成ハ二十日ニアラサレハ不可能ノ状態ニ在リ。実ハ余リニ追撃力進展セルヲ以テ、又タ道路所々破壊サレ車輛輻輳シテ通信部隊ノ活動十分出来サルニ由ル様子ナリ

左股上ニ小腫物出来診断ヲ受ク。別段大シタ痛ミヲ感セサルモ厄介ナリ

憲兵報告ニ依レハ、當番兵力負傷セル所屬小隊長ノ双眼鏡等ヲ売却シテ「カフエー」ニ遊興シ、或ハ酩酊兵力勝手ニ他人ノ自動車ヲ運轉シテ負傷スルナト、軍紀風紀上注意ヲ要スル事故発生ス

◇十一月十七日 曇微雨、暖カナリ

〔欄外〕 13D謝家橋鎮ヲ突破シ、呉福障地ノ一点ヲ破ル

〔受信〕 松井中佐ノ安市孝一大佐

揚子江畔低氣圧ノ影響ヲ受ケテ梅雨ノ如キ天候ナリ

13Dハ昼頃謝家橋鎮突進セル模様ナリ。之ニテ呉福障地ノ一点敗レテ同障地ノ破綻ヲ見ルヘク、常熟、蘇州ノ占領近キニ在リ（常熟ハ既ニ占領セル如ク内地ノ新聞ニ見ユ）

南京政府ハ漢口、重慶等各地ニ二分移ノ様子。而シテ長期抗日ニ入ルヘク腹ヲ極メタルカ如シ。各師団ノ補給十分ナラス。9D參謀長ヨリモ種々希望ヲ述ヘ来レリ

軍司令部ハ太倉移転ヲ取止メ、更ニ進ンテ古里村ニ移ルコトトナス。高級副官等一行偵察ニ行ク。蘇州入城ハ果シテ何日ゾ！

侍從武官ハ二十七日御來着、御視察ノコトニ決定セリ

◇十一月十八日 微雨、夜更北風強シ

進出、常熟方向ニ攻撃中ト。又11Dノ花谷水上機動部隊ハ消息明カナラサルモ、夕刻ノ電報ニヨレハ11Dハ更ニ天谷少將ニ12イヲ指揮サシテ同方面ニ進出セシムル由、9Dモ戦線進出、要スルニ呉福障地ノ命脈ハ正ニ断タレントスル状況ニ在リ。何分戦線ヨリ離レテ第一線ノ電話連絡出来ス、飛行機モ活動不十分ニシテ詳細明カナラス。第一線兵団ノ独断ヲ要スルコト多キニ至レリ

足不自由、職務閑ニシテ手紙ヲ認メ偕行社記事ヲ耽読ス

◇十一月二十日 雨

〔欄外〕 常熟陥落、各隊呉福障地ヲ超エテ追撃ス

皇軍追撃如奔流 揚子江畔遂西移

遥望南京雲漢々 大場鎮外陣宮靜

〔受信〕 長谷川 務ノ笠 時乘

御天氣ニナルトコロカ益々強ク降りシキル

第九師団ハ昨朝（或ハ昨夜ト云フ）蘇州ヲ占領セシ由、本日昼頃伝ハル。通信杜絶シアリシナリ

13D、重藤、16D、11D各部隊共ニ呉福障地ノ線ヲ超エ追撃ニ移ル。10・30頃ノ状況カ飛行機ノ報告ニヨリ正午頃判明ス。尚無錫ノ敵ハドンドン退却シアル由、（FM報）此勢ナラハ同地モ簡易ニ占領シ得ヘシト思ハル。10Aハ既ニ昨夜南京ニ向テスル追撃ヲ発令セル由、方面軍ニテハ之ヲ止ムル意嚮トカ、兎角方面軍ノ命令ハ一ツトシテ情況ニ適合セルコトナク、昨日モ無錫ノ攻撃準備ヲ命シアル状態ナリ

戦闘司令所ヲ常熟ニ、軍司令部ヲ蘇州ニ推進スヘク処置ス

◎勿々（蘇州）と敵が常熟逃げだして

むしやくしや（無錫）進む雨降りの道

◇十一月二十一日 風雨、温度著シク下ル

〔欄外〕 恩給局長来部

〔受信〕 波田少将

今日モ亦雨、風サヘ加ハリ氣温著シク降下ス。事務室ニハ簡易ナル揮発油ストーヴヲ焚ク。追撃將兵特ニ傷者ノ苦痛想像ニ余リアリ。股ノ瘍疾尚ホシカラス努メテ安静ナルヘク注意ヲ受ク。

第一線ノ状況薩張り判ラス。第二課カラモ何等ノ報告ニ接セス。連絡出来サルナリ。

碇泊場ノ請合ヒタル前線ヘノ補給輸送実施出来サル由、田尻少将參謀長ニ挨拶ニ来ラレシ由。

十一月七日以後蘇州占領ノ作戰ヲ軍ニテハ湖東會戰ト命名セシ由、上海毎日新聞ニテ知ル。

恩給局長視察ノ為メ来部、軍事劇団ノ大橋新太郎モ亦之ニ先立ち来部。

◇十一月二十二日 晴

〔受信〕 鉄子さん

漸ク天候恢復ス。日本晴ト云フ程ニハアラサレトモ氣持好ク飛行機ノ飛ブ姿モ心ナシカ嬉シソウナリ。

第一線各部隊ノ状況サツパリ判ラサリシカ、無錫近クニ推進セラレアルコト判明ス。補給ニハ大分困難セルカ如ク、重藤支隊最モ悲鳴ヲ挙げ遂ニ前進ヲ中止セルカ如シ。口程ニハナキモノノ如シ。大

体ノ見当ニテハ食物ハ相当在リ、地方物資ノ徴発ト併セテ余リ不由ハナキモノノ如シ。

去ル二十日御下賜ノ勅語ヲ本日新聞ニテ拝承ス。明日軍司令官ノ伝達アル苦ナリ。

腫物ノ経過モ良好ナリ。渡辺軍医大尉ノ労ヲ多トス。

◇十一月二十三日 曇、寒サ頓ニ加ハル

〔欄外〕 勅語伝達式

徳川義親侯一行慰問来

〔受信〕 鉄子さん（返）／重義君（祝）

内地各新聞ハ筆ヲ揃エテ無錫ノ占領ヲ報シアルモ先キヲ見越シタル「デマ」ナリ。無錫東南方地区ニハ、16 D、11 D、9 Dノ先頭各至近ノ距離ニ頭ヲ出シアルモ敵尚退却セス。各兵团モ攻撃ヲ差控エアルカ如キ状態ナリ。

11・00軍司令官ヨリ二十日御下賜ノ勅語ノ伝達アリ。軍司令官感極マリテ声涙共ニ下ル。奉答文ノ披露アリ。正午會食本席又タ司令官ノ挨拶アリ。声涙共ニ下ルモノアリ。感銘深シ。

軍司令官ヨリ将来ノ企図（南京攻略）感状ノ授与（3 D、9 D、11 D）訓示ノ発令、方面軍ノ認識ヲ高ムヘク相互ニ連絡スヘク指示セラル。

股ノ瘍経過頗ル良好、渡辺大尉ノ治療ヲ多トス。寒氣頓ニ加ハリ南京ハ初雪（二十日）アリシ由、支那新聞ニ見ユ。

◇十一月二十四日 晴、寒シ

〔欄外〕 軍司令官ヲ常熟ニ推進ス

◎馬は驚れ車は覆るぬかるみに

◎退却に仆れし敵の屍に

◎力尽きて斃れし馬の数々に

◎久し振りに山を眺めて兵士は

◎様々の車は道に充ち満ちて

◎日の丸の旗を頼りに婦女子等は

日麗ラカニ日向ボツコ氣持好シ。只少シ逆上氣味ナリ。近傍ノ民

家火ヲ失スルモノ多シ、兵ノ焚火ノ不注意ナリ。只家ノ構造上独リ手ニ沈火シ焼エ広カラサルハ仕合せナリ。土民殆ント見エス近傍ノ寺院ニ若干名ヲ見ル。

◇十一月二十六日 快晴

無錫未タ占領スルニ至ラス（残兵城壁内ニ立籠リアル由）其他大ナル変化ナシ。方面軍ヨリハ南京追撃ヲ準備スヘキ命令来ル。後方ノ機構改変ハ第三課起案（臨時兵站部設置案）參謀長ノ承認ヲ受ク。予ハ其部長ヲ兼動スル予定。

3 D、9 D、11 Dニ与フル感状案第一課ニ移ス。方面軍司令官カラヘラレ度旨希望ヲ具陳スル者アリ。

侍從武官ハ29日當軍ニ来ラルル由、就テハ28日軍司令官ヲ蘇州ニ

午後四時周宅発、真如、南翔、嘉定、太倉ヲ経テ常熟ニ向フ。真如、南翔付近彈藥ノ集積ヲ視ル。陣地モ相当ニ堅固ニ編成セラレアリ。

◎戦友の墓に額く兵士の

背を照して夕日も寂し（於真如）

太倉ヲ過キテ日全ク暮ル。古里村ノ手前約二軒ノ地点ヨリ道路ハ車輛充滿シ自動車内ニ泊ス。他ノ連中ハ舟行セシモ予ハ脚腫物ノ關係上之ト別レタリ。

◎嶽をとる農夫三人我れ見たり

嘉定近くの町はづれにて

◎行き暮れて自動車内に夜明かせは

初冬の寒さしみじみ覚ふ

兎二角支塘鎮以西ノ道路ヲ車輛ヨリ解放セサレハ補給ナト出来ス。野重ノ彈藥車馬ナト緊駕セル低路上ニ停止否宿營シ馬モ休マラス、行通モ妨碍ス。甚タ不可ナリ。

路外ノ利用殆ント不可能ナルヲ以テ已ムヲ得サル点モアリ。隊ノミヲ實メスニ運用スル方ニ於テモ注意ヲ要ス。

◇十一月二十五日 晴、寒シ

〔欄外〕 常熟県庁ニ軍司令部ヲ開設

午前八時無錫占拠（天谷支隊）

午前七時過キ目覚ム。相変ラス道路上ノ自動（車）内ニ在リ。正午頃常熟ニ到着ス。付近ハ全ク水郷ニシテ水上ニ部落、丘阜点在スルカ如キ状況ニシテ作戰行動ノ困難ナリシヲ想像スルニ難カラス。水路自在ニシテ小舟は水上自動車ナリ。

移スコトニ決シ、明二十七日ヨリ其準備ヲナスコトトス

人見大佐19i長ニ榮転ノ由、其後任ニハ3i川勝郁郎中佐(24)

全ク抜打的ニシテ不都合ナリ。下枝大佐ハ何処へ?

◎配給の綿衣あまた残りあり支那兵は

別つ暇なく慌て逃げしか

◎主なき県庁に司令部収まりて

主□せる常熟の町

◎ヴェランダに日向ボツコしあれば

青空に我飛行機低空を飛ぶ

◇十一月二十七日 曇夜雨

〔欄外〕本朝白鷺一羽玄関ヨリ入り来ル。瑞兆ナリ。

◎皇軍の仁の徳を慕ひてか

白鷺一羽今朝這入り来つ

(後二間ヶハ第二課ノ書記カ飼ヒアリシモノナリト呵々)

〔受信〕諫山大佐ノ松田通明ノ豊島大佐ノ山本龜彦

軍司令部ヲ蘇州ニ移転スル為メ見物旁々偵察ニ行ク。同行ハ二神

參謀、山下砲兵大尉(管理部)等ナリ。城外留園ニ候補地ヲ見付ケ

決定ス。昼食後有名ナル寒山寺ニ詣ス。予想外ナル荒寺ナリ。支那

人一名残りアリ。片言ノ日本語ニテ愛想甚タ努ム。蘇州飛行場二車

を飛ハセシモ途中ヲ失シテ目的ヲ達セス。直路帰宿ス

●常一蘇州ノ道路上軍馬ノ斃死及放棄主□ノ間ヲ彷徨シアルモノ多

シ。救助処置ヲ要ス。又在道路上及蘇州市街内ニ於テモ敵兵及地

方民ノ屍体各所ニ在リ、始末ヲ要ス

●無錫付近ノ戦闘ニ於テ16Dハ敵ニ大ナル損害ヲ与ヘタル旨報告ヲ

見ル。遺棄死体三、〇〇〇トハ少シ鼓大ニアラスヤ

●常州ノ敵モ逃ケ足立チシカ如シ

●福原少将(兵器部長)本日來滬セシカ如ク、人見大佐モ本夕到

着、転任ノ挨拶ヲナス

軍司令部移転トナレハ常二雨、明日モ如何?

◇十一月二十八日 快晴、稍暖カナリ

〔欄外〕軍司令部常熟ヨリ蘇州ニ移転

(花園飯店及其隣ノ民家)

午後二時移転。荷物送り出シタル後、通信連絡モ断エ何等処置ナ

シ

山本龜彦氏ヨリノ來信本朝到着、母上ノ病氣ノコトヲ書キアリ。

前日発送セシ手紙ハ到着シアラサル模様ナリ

本朝綿帯交換実施セス。夕刻亦其機会ナシ

崑山一蘇州道本日開通シアル由

13Dハ江蘇南方地区ニ主力位置ス。江蘇ノ敵ハ西方ヨリ退却セル

モノアリ。受攻ニ先(ダ)チ開放スル地多シ。重藤、16D、11D主

力無錫付近ニ集結、9D北進

本夜方面軍ヨリ南京攻撃ヲ仄聞ス。後方ノ整理ヲ実施セラレ度旨

來電

◇十一月二十九日 快晴

〔欄外〕常州陥落

侍從武官聖旨及令旨伝達

第十六師団常州ヲ占領ス

後藤侍從武官來着、午後三時四十五分、聖旨及令旨ヲ伝達アラセ

ラレ感激ス。状況報告及戦況説明アリ。夜課長以上会食ス

本晚四時以來後頭部激痛睡眠ナラス。盥シ火鉢ノ火ノ炭酸ガス中

毒ナリ。正午頃漸ク常態ニ帰ル。恐れヘキ失態ナリ

◇十一月三十日 快晴、暖カナリ

〔欄外〕兵站部長ノ職務ヲ執ルタメ周宅軍司令部ニ移転

江陰占領(13D)?

陸戦隊原所属復帰

10・20蘇州発(崑山迄40)大倉、嘉定、南翔ヲ経テ周宅軍司令部

ニ2・40到着(実動三時(間)二十分ヲ要セリ)崑山一蘇州ハ陣地

モ案外急造ノ粗品ニテ「コンクリート」製「トチカ」ハ未完成ノモ

ノ数個ヲ蘇州東方約八軒ノ西南村付近ニ認メシノミ。路傍ノ屍体モ

正規兵ヨリ土民多シ。其モ点々アルノミニテ激戦ノ痕ヲ見ス

嘗テノ居室ハ残留員ニ占領セラレ當時ノ面影ヲ留メス。元ノ第一

課長室及軍司令部官室ヲ占領スルコトトス

參謀本部ノ出張員吉積大佐以下二名ト会ス

兵器部長福原少将ニ会ス。同氏本夜軍司令部ニ宿泊ス

江陰占領ノ新聞出テアリシト、恐ラク事実ナランカ。本日ヨリ第

一線ヲ速サカリ其状況ハ中々判明セサルヘシ

戦争四月早や霜月も暮れにけり

◇十二月一日 晴

〔欄外〕參謀次長方面軍來着、上海派遣軍臨時兵站部編成

3D9D11Dニ対スル感状軍司令部ノ決裁ヲ受ク

中支那方面軍司令部ニ松井將軍訪問、予テ命セラレアル感状ノ決

裁ヲ受ケ在蘇州參謀長ニ送付ス

本日臨時兵站部發令予ハ其部長トナル「中支那碇泊場監ニ挨拶」

新任務ニ就キ愉快ナリ早速訓示ヲ出スコトトス

管理部二川大尉ノ斡旋ニ依リガス煖炉ナト一通リ整ヒ生活ニ便利

ナリ

當番正直ニシテ能ク勉強スルモ遺漏多ク眼ヲ離セス、昨日ノ引越

ニ於テ要書入箱一箇蘇州ニ置キ忘レタリ明日受取ニ行クコトヲ命ス

上海派遣軍司令部官松井大將、中支那方面軍司令部官ニ專補

新ニ派遣軍司令部官任命アリシ筈ナルモ其誰ナルヤ未タ判明セス。

中村孝太郎將軍下馬評ニ上ルノミ

◇十二月二日 晴

〔受信〕山本龜彦ノ啓子ノ豊島少将ノ水上大尉ノ松田少佐

午前中兵站部員ヘノ挨拶、状況聴取

状況サツパリ判ラス飛行便ニテ來リシ内地ノ新聞ニヨリ初メテ江

陰要塞モ昨日陥落、丹陽城モ一部奪取セシ旨承知ス但シ真偽ノ程元

ヨリ不明。午後終日無為、暇ニテ仕方ナシ

久シ振リニ理髪ス二十数日振リナリ

當番兵小林君蘇州ヘ置キ忘レノ荷物ヲ取りニ行ク。行キ違ニ夕刻

其荷物ハ到着セリ。氣ノ毒ナルコトナリ。代リニ馬持兵ノ山崎君代

理、荒削リノ接待ナリ

◇十二月三日 快晴

〔欄外〕16D9Dニ回答、天王寺ニ向ヒ追撃ヲ命ス(軍、昨日)

午前野戦工兵廠長、兵站自動車隊長、野戦自動車廠長等状況報告
ニ来部

午後在室想ヲ練ル

軍命令ニヨレハ、更ニ句容、天王寺ニ向ヒ第一線兵団ニハ追撃ヲ命シ、又常州北方地区ヨリ揚子江左岸ノ攻撃ヲ準備シアルカ如ク、兵站ノ推進愈々急ナルヲ要スルカ如キ状態ナリ。部員連中如何ニモ「ノンビリ」シアルカ如キ状態ナリ。又タ現地ノ指導モ果シテ如何カト思フ、明日ヨリ現地ノ状況ヲ視察スヘシ

昨日蘇州ニ出懸ケシ当番本日帰着ス

新軍司令官ノ訓示送付シ来ル杜撰ナルモノニテ加筆ス、尚旧軍司令官ノ離任ノ辞ヲ起案ス

◇ 十二月四日 晴

〔欄外〕後任軍司令官朝香宮殿下ノ報アリ

〔受信〕家ヨリ托送品届ク／富田直亮少佐

大場鎮軍司令部ニ残留セシ各部凡テ無錫軍司令部ニ引キ越シヲナス、之ニテ残レルハ凡テ兵站関係者ノミトナル

上海兵站司令部其他兵站関係箇所ヲ視察ス、恰カモ無錫付近ニテ負傷セシ高橋大佐（台歩二長）兵站病院ニ入院シアルヲ見舞フ、元氣ナリ

方面軍司令部ニ松井將軍其他ヲ歴訪、別段ノ要件ナシ。多田參謀次長塚田參謀長室ニ在リ挨拶ス、彼レ一言御苦勞トモ云ハス頗ル無愛想ナリ。随行ノ荒尾少佐ヨリ留守宅ヨリ托送ノ「シヤツ」及庶務課ヨリ慰問ノ羊羹ヲ頂戴ス

塚田參謀長ノ電話ニヨレハ、後任軍司令官ハ朝香宮殿下ナリト実

◇ 十二月六日 晴

〔欄外〕朝香宮軍司令官殿下御着任（上海）

宮殿下ノ御宿所ヲ武官室ニ申込ミシモ、更ニ御乗艦ニ御一泊ヲ願ヒ、3・00御上陸直チニ大場鎮軍司令部ニ、次テ方面軍司令部ニ御来リアリテ申告及ヒ事務引継キヲナス如ク決定、其手配ヲナス。途中軍司令部（方面）ニテ自動車ヲ方軍警ニ奪取セラレ大迷惑ヲナス。予定通り午後行事ヲ了リ帰宿夕食ヲ済マセハ8・00ナリ（二日発令セラレシ由ナルカ其電報普通ノ祝電等ト混合、方面軍ニ到着セシハ本朝ナリト）

今ヨリ我等モ宮様部隊トシテ今ヨリ肩身広キ感アリ。御出迎以來自動車ニ御陪乗、御案内御説明ノ任ニ当リ光栄至極ナリ。粉骨碎身誓ヒテ忠勤ヲ期ス

股ノ腫物漸ク膏藥ニテ処置シ得ルニ至ル幸ナリ

○上海市内ノ廢墟ヲ御覽ニナリ鉄屑等特ニ御目ニ留ラル

○御言葉使ヒナド敬語ヲ含マセラルコトニハ恐縮ス

◇ 十二月七日 晴 霜深シ

〔欄外〕軍司令官上海発、無錫軍司令部ニ向ハセラル（師範學校）。

総務部長ヨリ參謀長宛殿下ノ御性格ニ就テ補佐上ノ参考ヲ申来ル。自カラ将器具ハル、只方面軍トノ關係ヲ円滑ナラシムル様特ニ注意ヲ喚起セラル

軍司令官宮殿下上海発無錫ニ向ハセラル。予ハ御同乗沿道ノ御説明申上ク。種々微細ナルコトモ御目ニ留マリ殆ント間断ナク種々ノ御下問御談話アリ。煙草ハ行動間一切御用ヒアラセラレス、沿道ノ

ニ有リ難キコトナリ。御着任ハ未定
第一線ハ大ニ進出シ丹陽、金壇ヲ越エ白兔鎮、林山ニ達セリト（3/12ノ状況）何十日振りカニ入浴ス
当番一名臨時配属面會フ

◇ 十二月五日 晴

戦況ハ進ム盲目滅法ナリ9Dハ既ニ本夕淳化鎮（南京東南四里）ニ達ス。丸テ各兵団ノ「マラソン」競争ニテ後方ノ追及モ何モアツタモノニアラス、方面軍ニテハ南京入城ニ関スル統制命令ヲ下セリ。宮殿下ノ御着任後南京入城トナレハ実ニ結構ナルカ、此調子ニテハ迎モ御間ニ合ハサルヘシ。二川大尉ニ命シ御調度品其他ノ準備ヲ命ス

方面軍司令部訪問、松井將軍離任ノ辞ノ決裁ヲ受ケ殿下ノ件ト共ニ參謀長ニ送付ス。將軍能ク出来タト嘉賞ス。惡イ氣持ハセスM大佐M將軍ノ駄々ツ兒ニ就テ愚痴ル。根本思想ノ相違ナリ本日松江方面鉄道ノ初運転ヲナセシ由、南京方面ニハ七日ヨリ運行予定ナリト云フ。佐藤大佐報告ニ来ル

夜半、軍司令官宮殿下明午後二時三十分（駆逐艦あさしを）ニテ御到着、三時御上陸ノ旨拝承シ夫々明日ノ手配ヲナス。恰カモ好シ高橋副官、侍從武官ノ警衛ニ伴ヒシ自動車及新ニ購入シテ整備セル自動車アリ、之ヲ充當スルコトトス

9Dハ南京東南方約四里ノ地点ニ到着シアリ。南京進入目撃ノ間ニ逼ル

兵ニシテ敬礼スルモノアレハ必ス御答礼アラセラル。殿下ト知ラスシテ「ボカン」ト眺メアル兵モアリ畏レ多キコトナリ。支那民衆ノ氣ノ毒ナルコトニハ特ニ御留意アリシ如シ

○支那ノ民衆ハ如何ナル氣持ニ在ルヤニ？ヲ有セラルルカ如シ

○3D司令部部隊トノ間都合良ク行キアルヤニ御懸念アル如シ

○派遣軍ハ軍司令官ノ責任ニテ「ガス」ヲ何故使用セサリシヤ

○駄馬師団ハ必要ナルヤニ？ヲ有セラル

○鉄道部隊ヲ二大隊ニ減セルコトニ御不満アルカ如シ

○強剛ナル部下ヲ有スル隊長ハ幸福ナリ

午後四時頃軍司令部御到着。將校ノ伺候及訓示ヲ遊ハサル。御乗車約七時間御疲レノ様子モ見エス。幸ナリ

◇ 十二月八日 晴 霜深シ

〔欄外〕軍司令部無錫ヨリ句容ニ移転ス（各部ハ残留）

○13Dノ一部江陰ニテ左岸ニ渡河、靖江ヲ占領ス

○天谷支隊鎮江攻略

8・30無錫司令部発。山室師団長見送りニ来部。青陽鎮―常州―金壇―丹陽―句容道ヲ句容ニ向フ。句容着4・00同地県公所ノ司令部ニ入ル。地形漸次上海付近ト異ナリ「クリーク」影ヲ没シ大陸的トナル。丹陽以西全ク大陸的ナリ。句容ニ近ツクニ從ヒ戰場ニ入ルノ思アリ、句容ニテハ16D方面（湯山方向）ニ銃砲聲ノ殷々タルヲ聞ク。夕刻飛「行」機ノ連絡ニ依レハ16Dハ既ニ湯山ノ陣地ヲ突破シ、9D方面亦先頭ハ高廟ニ達シ南京市街ハ炎々燃エ上リ居レリト云フ。13Dノ一部ハ江陰對岸ニ本朝渡河靖江ヲ屠リ、天谷支隊亦鎮江攻略、城内掃蕩中ナリト。而シテ約一、〇〇〇ノ敵ハ西方ニ退走

中ナル由、全般ノ状況ハ南京ノ陥落ハ目撃ノ間ニ迫ル。殿下ノ御言葉ニヨレハ方面軍ニテ統制ハナシアルモ見ス見ス敵ヲ逃スハ残念ナリ16Dノ一部ヲ以テ下関ニ進メ其退路ヲ遮断セシメヨト、御尤モナルコトナリ

昨夜南京虫二攻メラレ大開口、本夜亦或ハ然ランカト心配ス。明日ハ句容ヨリ飛「行」機ニテ上海ニ帰ルヘシ。旅鳥ハ実ニ不便ナリ

◇ 十二月九日 晴

〔欄外〕句容軍司令部発周宅ノ兵站部ニ帰任（飛行機）

○天谷支隊鎮江ヲ占領ス

○南京陥落近シ

皇軍追撃如疾風 一挙八十里迫南京

蔣也夫如何首都 抗日壊滅半月高

9Dノ旅団司令部ハ高橋門（南京城東南方約四軒）16Dハ麒麟門ニ進出（本朝）セル由ニテ、南京ノ陥落ハ今明日ニ迫ル。但城内突入ハ方面軍ニテ統制スル為メ見合ハセアルヘシ。午後「フオツカー」機ニテ句容飛行場発上海ニ帰ル。所要時間一時間ト十分、実ニ氣持好キ空ノ旅行ナリ。帰任ノ申告ヲ殿下ニナセハ、畏クモ葡萄酒ノ湯吞ヲ揚ケテ乾杯セラル、畏キ極ミナリ

第十六師団中島中将負傷ノ旨、本朝軍医部々員ノ報告ヲ受ク。帰部後八日ノ内地ヲ見ルニ「七日午後三時四十分頃受傷」ノ旨新聞ニ在リ、新聞通信ノ快速正ニ三嘆

三日二夜ノ旅ニ出テ不自由ヲ続ケ、歸リ着ケハ今更ナカラ不完全ナカラ自己ノ居住ノ難キコトヲ痛感ス。輻湊セル内地新聞ヲ読ミ耽リ、暖タカキ我カ床上ニ横ハル

千ヲ視察ス。将来軍トシテ指導ヲ要スルモノアリ。此間6Dノ後備隊ヲ指揮セル桂松義乘君ニ偶然会遇ス。此度出征セシナリ「軍通信隊附少佐ニ会ス。方面軍ノ通信施設ノ為メ行動シアル由、同通信隊長ニハ附大佐寺田大佐ヲ充ツレハ都合好カリシニ、近頃ノ人事ハ全ク無茶ニシテ何等統制ナキ感アリ

千田大佐戦場掃除ノ談ニヨレハ、阨家宅附近ニハ彼我組打チタル儘共ニ仆レシ屍体アリト、南京攻略後大整理ヲ要ス

◇ 十二月十二日 晴

〔欄外〕周宅発、無錫軍司令部ニ至ル

海軍機英艦《銃砲撃レディバード号、ビー号、クリケツト、スカラップ》及米艦《バーネー号及商船三隻》ヲ爆撃ス

南京入城式参加ノ為メ9・00周宅軍司令部発、先ツ無錫ニ向フ。約ニヨリ参本ノ出張者高沢大尉ヲ同行ス。午後〇時半常熟兵站支部ニ立寄り指導、1・30同地出發無錫軍司令部二宿営準備ヲ委託シ次テ江陰視察、同地兵站支部指導、砲台ノ一部ヲ見学、6・00無錫軍司令部ニ到着、宿営。此日ノ走破距離二五〇軒「大西參謀偶々同司令部ニ在リ、皇軍不軍紀ノ一端ヲ耳ニス。実ニ遺憾千万ナルコトナリ

◇ 十二月十三日 晴

〔欄外〕本夕完全ニ南京城ヲ占領ス

南京陥落

難戦苦闘十九週 衆心等向南京城
遂提獲首都攻略 忠靈万余感無量

◇ 十二月十日 晴、曇

流石我カ寝床ハ氣持好ク十分快眠ス。田村大佐現地指導ノ為メ兵站地ヲ巡視スルニ付、意図ヲ示シテ効果的ナラシム「兵站司令官ノ報告ニヨレハ陸家巷ニテ巡察兵一名、日中敗残兵ヲシキ者ノ狙撃ヲ受ケ遂ニ死亡セシ由（六日）聊カ眉唾モノナリ。是レヨリ此種事故多カラン」大シタ業務モナク内地新聞ノ残りヲ耽読ス。南京祝賀（占領）ノ準備ニ大重ナリ

暫ク振リニ入浴、股ノ腫物モ全快、先月十八日受診以來二十八日約一ヶ月要セリ。厄介ヲ懸ケシ植田軍イ大尉ニ御礼ノ意味ニテ到来物ノ羊かん一個呈上ス

情報ハ八日迄ノ分ニテ不明、噂ニ依レハ入城式ハ十五日ノ予定ナリト、固有ノ部隊ハ大挙参加スルコトトス

○皇軍の野團の跡や紙まばら

計らずもつい漏れにけり秋乃水

◇ 十二月十一日 晴

〔欄外〕主地兵站司令部ノ一部視察（千田大佐ノ宿舍ニテ昼食ノ馳走ニナル）

〔発信〕惠津子ニ

兵站部所屬ノ固有軍司令部員ハ南京ノ入城式参加旁々兵站業務ノ現状実視ノ為メ本日司令部出發、軍司令部ニ向フ。部長独リ残留スルモ何等仕事ナシ、明日出發ニ決ス「重藤支隊副官及11D長二軍司令官宮殿下ノ御伝言ヲ伝達ス。併セテ訣別ス」主地兵站司令官ノ案内ニテ午前ヨリ午後二旦リ、上海市内ノ宿營地及虹虹碼頭附近ノ若

〔受信〕管儀一（日本基督教青年会）

7・00無錫軍司令部発常州—金壇城—丹陽—鎮江—句容ヲ経テ湯水鎮軍司令部着4・00。時ニ敗残兵約千名軍司令部北方山地方面ニ現ハレ、軍司令部ノ守備兵トノ間ニ戦鬭行ハレ屋上ヨリ眼ノアタリ展望ス。高射砲地上射撃ヲ以テ之ヲ撃ツモ敵ハ悠々トシテ對戦、其勇敢ナル態度感心スヘキモノアリ。9Dヨリ先ツ二中隊、次テ19iノ二大隊、戦車、飛行機ノ増援アリ之ヲ驅逐セルモ、夜ニ入りテ月明下尚銃声轟キ、南京攻略ノ大団円ト見ルヘシ。好イトキニ進出セルヲ喜ブ。軍衛兵ノ損害戦死一、傷一四

此数日ノ状況サツパリ判明セサリシカ、9Dノ36i南京城門ノ奇襲不成功ニテ約千名ノ損害アリ。16Dハ砲撃後市内ニ進入、敵兵城外ニ出テ三面合撃四、五千ノ損害ヲ与ヘタルコト（此強敵力突出シアルコト）一列車一飛行機（片羽根）ヲ押エタルコト等——種々ノ伏報ニ接ス。尚照空灯一隊敗残兵ノ為メ全滅セル情報アリ

◇ 十二月十四日 晴

〔欄外〕北京ニ臨時政府成立

〔発信〕管儀一

寝台狭ク頭支フル如キ代物ナレトモ割合ニ好ク眠レリ。何シロ不在中除ケモノニサレ臨時飛入ノ形ニテ、室モ北向キノ終日当ラサル不健康室ナレトモ管理部員モ相当ニ苦勞セルモノナルヘシ、無論此ノ如キ私事ニ叱言ヲ言フ筋ニモアラス居心地悪ケレト仕方ナシ「軍司令官宮殿下ヨリ御菓子其他ノ御下賜品アリ勿体ナキコトナリ」午後退屈凌キニ附近ヲ散策ス。丘陵起伏、冬日遅々実ニ氣持好シ。此附近ニ永久駐劄ナレバ実ニ結構ナリトノコトニ衆口一致ス」

山の峽に敗残兵討伐の銃火木だまして
稜線上を動く兵見ゆ

◇ 十二月十五日 晴

〔欄外〕南京の城の防壁堅けれど守る人なき没落の国

中山陵に眠る総理の靈あらば今日の空を如何に見るらむ

臨時兵站部ノ職員一同車ヲ連ネテ南京ニ入城ス。恰カモ兵站部入城式ノ觀アリ。中山門―軍官学校―玄武門―興中門―下関―大使館―武官室―市政府―中山陵等ヲ經テ帰部(10・00―6・30)

○南京城ヲ失ヒシ蔣介石ノ意中夫レ如何、中山陵ニ眠ル中山ノ靈

夫レ如何、国民党員夫レ如何
○俘虜モ多数アルカ如シ、將校ナシ、哀レムヘキハ兵ナリ

○海軍ノ名譽欲嫌氣サス。瀬田已ニ下関埠頭ニ在リ。從來爆撃ノ効果見ルヘキモノナシ

○市内ノ秩序ハ可ナルモ10 A 方面不良。中山陵正ニ荒サレントスル形勢ニ在リ。無智ノ兵可虞、幹部ノ指導果シテ明確ニ行キ届キアリヤ

○城壁ヲ守リテ真ニ死守セハ攻略ハ進マサルヘシ、守ルハ人ニ在リノ感深シ

本日天王寺南方地区ニ於テ3 Dノ医、経、兵各部長敗残兵五〇〇ニ襲撃サレシ由、結局無事ナリシハ仕合ハセ

◇ 十二月十六日 晴 東南風強シ

〔欄外〕臨時兵站部解散

揚州方面天谷支隊約四、〇〇〇ノ敵ヲ駆逐シテ同地ニ在リ、13 D

揚げて挙ぐる弥栄の 声よ帝都に響けよと

五、嗚呼江南の戦場に

今こそ首都に入城し 我万君の御恵みに

四百余州も浴しなむ

午後六時軍司令官官邸下御臨席ノ下ニ祝盃ヲ挙げ、戦勝ノ気分ニ酔フ

国民政府ニ於ケル式ノ次第(當時配布されたガリ版)

一、閣兵者ノ一行国民政府到着(海軍長官ハ二時頃到着シ直ニ休憩所ニ入ル)

二、方面軍司令官、兩軍司令官、同上各參謀長、各師團長下馬休憩所ニ入ル

三、隨行員及其他參列者ハ附圖第四ノ如ク速ニ集合

四、第二項諸官臨場、參列者一同敬礼

五、方面軍司令官以下、正門に正面(右向ケ右但シ、方面軍司令官海軍長官各軍司令官―横隊)

六、国旗掲揚式並遙拜式開始、号音吹奏(氣ヲ付)

七、国旗掲揚、軍樂隊君力代吹奏、此ノ間參列者一同挙手注目ノ敬礼

八、參列者東面(左向左、但方面軍司令官、海軍長官、各軍司令官、横隊ニテ東面)

九、方面軍司令官ニ歩前進、中央前ニ位置ス

十、方面軍司令官皇居ニ向ヒ遙拜、一同之ニ倣フ(喇叭君力代)

十一、方面軍司令官発声ノ下ニ二萬歳三唱

十二、親補職以上退場(記念撮影)(參列者敬礼)

主力亦同地通過西進、敵ノ抵抗モ決死的ナラス。北島參謀以上ノ件ヲ飛行機ニテ連絡ス

入城式明日決行、參謀長ハ下檢分ノ為メ午後同地ニ行ク。16 D 參謀長ハ警備上責任ヲ負エスト云フ由ナルモ、吾人ノ見ヲ以テスレハ其理由ナシ、責任回避ノ辞カ

兵站部ハ其必要去リ昨十五日午後六時ノ発令ヲ以テ解散ス。家具類ヲ送付スヘク上海ニ打電

軍司令部ハ二十日頃南京ニ移転、方面軍司令部ノ余香ヲ拜スルコトニ決定、何故早ク定メテ明日ノ入城式後直チニ落チツカサルヤ

南京付近ノ俘虜四萬ニ達スヘシト。城内ニ於ケル軍紀ノ点ニ就テ惡評ヲ耳ニス。残念ナルコトナリ

◇ 十二月十七日 晴

〔欄外〕入城式

午後一時三十分開始、中山門ヲ經テ国民政府到着、国旗掲揚、東方遙拜、乾盃

一、今日こそ待ちし入城式 一天隈なく晴れ渡り

中山門頭翻る

進むは総帥二司令官

二、両側堵列の將兵は 戦友の御靈捧持して

老将白髪加はれど 衝天の意氣漲りて

軍旗は照す八紘を 翼を併へて飛び来るは

三、折しも空に大鵬の 爆音轟々南京の

我荒鷲の一部隊 空を圧して余裕あり

四、馬を進むる民政府 門頭高く日の御旗

十三、參列者一同速ニ祝宴場ニ入場

十四、親補職以上臨場、一同起立(君力代奏樂)

十五、乾盃(海軍長官ノ発声ニテ陸、海軍萬歳三唱)

十六、方面軍司令官以下退場(方面軍司令官、海軍長官、兩軍司令官ノ順序)

十七、終了解散

◇ 十二月十八日 曇微雪

〔欄外〕方面軍慰靈祭施行

昨夜天候急變西北風強ク気温急降下ス。北側ノ日当リナキ室ニハ閉口ナリ。參謀長ハ朝來南京ノ方面軍司令部ニ招致セラレ軍司令官ノ訓示、方面軍ノ将来ニ就テ指示ヲ受ケ、松井將軍ヨリ直接口達サレシハ次ノ三件ノ由承知ス

一、軍紀ヲ緊肅スヘキコト

二、支那人ヲ馬鹿ニセヌコト。統制力、經濟力アレハ本回ノ如ク立派ナ行動ヲナス

三、英米等ノ外国ニハ強ク正シク、支那ニハ軟ク以テ英米依存ヲ放棄セシム

尚中央部ノ指示ハ現状ノ儘ナルモ浙江、河北ノ作戰必要、其準備午後二時故宮飛行場ニテ方面軍ノ慰靈祭施行、三軍司令官、艦隊司令官以下13 D 18 D 長ヲ除ク師團長及代表部隊參列、拝神礼兩度懇口二万余ノ英魂ヲ弔ス。西北ノ風強ク戎衣ヲ払ヒ稍寒シ

◎ 忠魂を弔ふ原や風寒し

◇ 十二月十九日 曇 「クリーク」ニ薄氷ヲ見ル

〔欄外〕軍司令官砲兵学校ノ野戦予備病院御見舞アリ

新配置ニ基ク兵站命令ヲ出サル

〔受信〕家ヨリ二ノ広安慶夫ノ井田君平少佐ノ加藤英太郎大佐ノえ

つ子さんノ桜木俊一（名士分）ノ臼田義子

てなかな弾、なすか弾ノ実弾射撃ヲ実施ス。成果極メテ良好、何故
斯ノ如キ有利ナル彈丸ヲ陣地戦ノ難戦中ニ送付セサリシヤ惜シカリ
シ由良之助ノ感大ナリ。但江陰及光華門ノ戦闘ニハ幸間ニ合ヒ大功
ヲ奏セシ由、森田少佐説明ス。軍紀上面白カラサル事ヲ耳ニスルコ
ト多シ、遺憾ナリ

午後軍司令官官邸下、野戦予備病院、第二十一班ノ病院ヲ見舞セ
ラル。砲兵学校ニテ更ニ設備ヲ加フレハ立派ナモノトナルヘシ。約
七百名近クノ入院患者アリ、宮殿下懇切ニ御見舞アラセラル。夜湯
水鎮ノ温泉ニ浴ス。実ニ此種ノ入浴ハ上陸以來初メテナリ

珍ラシク留守宅其他ヨリノ手紙届ク、何レモ十一月末発送ノモノ
ナリ。凡ソ一カ月ヲ経テ入手ス。矢張り内地ヨリノ手紙ハ懐カシキ
モノナリ

年末手当留守宅ニ送附スル如ク手筈ヲナス

◇ 十二月二十日 曇 寒シ

〔欄外〕南京攻略ニ就テノ聖旨伝達式施行

軍司令官FL/16D、9D及光華門御視察

13D滁縣ヲ占領ス

〔発信〕留守宅ニノ其他数通

朝七時半ニハ起床セシモ當番君飯ヲ運ンテ與レタノハ9・00、木
崎建築部長来訪、9・30ヨリノ聖旨伝達式ニ正ニ遅レントス。式後

様。下手ナコトヲヤツタモノニテ遺憾千万ナリ

◇ 十二月二十二日 晴

〔欄外〕野戦衛生長官小泉中将来部

各部南京軍司令部ニ移転

長中佐業務打合せノ為メ北京ニ行ク。大内参謀、天谷支隊及13D
ヨリ帰来其状況ヲ聞ク。天谷支隊死傷一六〇、13D同六〇位、物資
モアリテ心配ヲ要セス。小泉陸軍省医務局長来部、昼食ヲ共ニス。
内地ノ状態官署ノ活動、聊カ心許ナシ。小田原評議多キカ如シ。將
来ノ作戰企図ニ就テ軍司令官ニ報告（実ハ殿下ヨリ発意）其他二十
四日ノ會議書類ヲ点検ス

今日モ別段ノ要件ナシ、聊カ退屈ナリ

S大尉無線通信ニ部隊号ヲ使用スルコトヲ上申シ来リシニ付却
下、何ノ為メ部隊号ヲ用ヒス長ノ名前ヲ以テセシヤヲ知ラサルニヤ
光華門ノ先頭將校ハ矢張り山際少尉ナリ。工兵ハ兵力先頭ニ進出
シ日章旗ヲ掲ケシ如シ

◇ 十二月二十三日 微雨

〔欄外〕軍司令部南京ニ移転（首都飯店）

久シ振リノ降雨ナリ。午前九時五十分湯水鎮出發、途中新配置ニ
就ク部隊ニ時々車ヲ止メラレ十一時過キ着。首都飯店ニ入ル。室ハ
三階ノ北側ナリ、東カ開キアルハ幸ナリ、何時モ参謀長ノ傍杖喰ツ
テ日蔭者ナリ、又已ムヲ得サルコト

上海ニ残セシ當番荷物ヲ率領シテ都合好ク到着、如何ニ待チシコ
トカヨ、折田少佐、其他兵站部ノ他ノ職員ト同行セシナリ。着ノ

喫飯

方面軍参謀長、同副長本日上海ニ帰ルトテ告別ニ来、国崎支隊及
常設一ヶ師団ヲ引キ抜クコトノ内報ヲ受ク（軍ニテハ皆期セスシテ
16D）

午後〇時二〇分御出發中央病院ノFL/16D御視察、現在百六十名
ノ患者輕傷多シ。次テ光華門ノ戦蹟ヲ36i長及歴戦中隊長（少尉）
大隊長（中尉）ヨリ聴取セラル。次テFL/9D御見舞御帰部、五時
近シ

夕食後参謀長ト共ニ御召ニ預カリ御談話ヲ拝聴ス。御職務上ノコ
トヲ碎ケテ御示シアリ、今日光華門ノ勇士ニ御佩刀ヲ賜フ旨ノ畏キ
御詫ヲ拝シ、尚審査スルコトトシテ引退ス

◇ 十二月二十一日 晴

〔欄外〕◎軍司令部戦死者ノ告別式施行

◎南京ノ日本人街建設ニ就テ軍司令官ノ決済ヲ受ク（第二
課）

◎第二課長ニ遺棄物蒐集ノ件ニ就テ軍司令官ノ意図ヲ伝達
上海ニ残セシ當番ト荷物モ到着スルダロウト待チ詫ヒルモ今日
モ到着セス。高橋副官ニ依頼シテ平野副官宛照会電報ヲ発ス（午
前）或ハ行キ連イニナルヤモ知レス

去ル十三日軍司令官部北方高地ノ自衛戦闘ニテ戦死セシ者数氏ノ告
別式施行。後該高地ノ陣地ニ登リ弔意ヲ表ス。偶々軍司令官官邸下
モ御登リ遊ハサレテ御降り中ナリ。御元氣好サニ心強ク感ス

N大佐ヨリ聞クトコロニヨレハ山田支隊俘虜ノ始末ヲ誤リ、大集
団反抗シ敵味方共々MGニテ撃チ払ヒ散逸セシモノ可ナリ有ル模

ミ着ノ儘ノ生活約十日間

午後雨ヲ衝イテ各部ノ屯スル高等法院ヲ視察ス。ホテルニ比シテ
内部頗ル不良、旧式建物ニテ光線ノ具合悪シ。法務部長ハ我所ヲ得
タリト謂ハン顔ナリ。獣イ部各部ニ先ジ良室ヲ占領セリトテ批難ノ
声高シ

久シ振リニ内地ノ新聞ヲ見ル。大毎、読売ノ十五・十七日ノモノ
ナリ。末次海軍大將ノ内務大臣就任。英米艦船爆撃ノ陳謝、等紙面
賑フ。南京陥落ノ名残リノ記事亦多シ

◇ 十二月二十四日 曇後晴

〔欄外〕3D9D13D16D天谷支隊、内山砲兵旅団ノ各団隊長ヲ集

合セシメラル（午後ハ参謀長）

8・00杭州占領

〔発信〕橋本保一ノつ子さんノ加藤保太郎大佐
午前十時ヨリ兵団長会同、午後参謀長会同（首都飯店軍司令部ニ
於テ）將軍連中ノ聊得意ノ顔ヲ見テ愉快ナリ。Y將軍默シテ余リ語
ラス、奥ニ休シ、其参謀長M大佐始ント各事項ニ就テ一言ナカルヘ
カラス。面白キ对照ナリ

各部長ナトハ現役ニセサレハ不可。O部長ナト現役當時ハ錚々タ
ルモノト思ヒアリシカ何タカ物足ラス、ドウシテモ意氣ニ於テ異ナ
ル様ニ見ユ。夜上記ニ宛テ葉書ヲ認ム

◇ 十二月二十五日 快晴

〔受信〕10/12発 悦子ノ啓子ノ重義君ノ山口大佐

暇テ勿体ナイ様ダ。教育總監部カラ加藤工兵大佐、宮野中佐外ニ

名ノ視察団来部、是等ノ人々ニ話ヲシタイ人ハ外ニ沢山アルカラ其方ニ廻ス。山口ノ聯隊長池田大佐參謀長來訪。昨年夏、京城テ世話ニナツタ人ナリ。荻洲部隊長カラ到達シタト云フ鴨、鶏鍋ヲ共ニツク

下関、獅子林附近視察。市内ノ道路モ大分片附イタガ、未タ不体裁ナ屍体ハ通りヲ離レタトコロニハ幾ツモ転ガッテ居ル。部隊其物ハ案外無關心テアル。軍隊ハ体操、乗馬ナト少シハ訓練ニ乗リ出シタ様タ。司令部デモ今朝始メテ起床喇叭ヲ耳ニス、何ダカ変ナモノナリ

18日21日23日朝日、読売ト云フ脈絡ナキ新聞ヲ受ケル。夫レテモ耽リ読ム氣持ニナル。蔣ハ愈々長期抵抗ニ決メタ様タ。英國モ米國ノ出様ヲ眺メナカラ極東ノ事態ニ神經ヲ尖ラシテ居ル様タ

《欄外ブライベート部分ニ行略》

◇ 十二月二十六日 快晴

〔発信〕 山本星彦ノ悦子ノ飯塚01長

〔受信〕 山谷尋常小学校ノ田代稔ノ津川豊彦

〔欄外〕 十二月分ノ俸給及ボーナス受領

上海派遣軍歌一案成ル、經過ヲ序シ稍長過ギル感アリ
午后宮殿下ニ隨行、下関ニテ海軍内火艇ニテ浦口附近視察、次テ挹江門南側高地ノ防禦施設、太平門ノ戰蹟、富貴山砲台等ヲ視察ス。地下掩蔽部ノ設備實ニ規模大仕懸ニテ真正銘ノ要塞施設ナリ。未タ十分完全ト云フ迄ニハ行カサル由ナルカ、費用ト日数ニ大分費シタルナランニ之ヲ利用スル抵抗案外少カリシハ、作戰指導ノ拙劣ト軍隊ノ訓練不十分ナリシ結果ナランカ、何レニシテモ茲ニ一兩

夜通シノ行軍ナリ

南京慰安所ノ開設ニ就テ第二課案ヲ審議ス

竹内克己君ノ妹婿藥劑大尉野戰防疫部ニ勤務シアリト訪ネ來ル
——氏名逸ス——暫ク會談ス

水上重彦大尉方面軍司令部ニ勤務スヘク着任セリト、全ク奇縁ナリ。手紙ニ津田大佐、大田中佐ノ名刺ヲ入レテ來ル。角副官ヲ紹介(歩二四出身)スヘク手紙ヲ書ク「降雨時刻ヨリ雪トナル

◇ 十二月二十九日 曇

〔欄外〕 軍司令官宮殿下ノ御話相手ニ伺候ス

昨夜方面軍ヨリ英独ノ領事婦南スルニ付テ自動車ヲ出シテ便宜ヲヘラレタシトノ通報アリ、本日ハ入京セス明日ニ延期トナリシ由。之ヲ取扱ニ就テ特務部幹旋者ナシ

午後16D及10Aノ野戰予備病院及野戰病院(政治学校)ヲ御見舞アラセラレ御伴ヲナス。FLノ6Dニテ13iノ野口曹長アリ、嘗テ大隊長時代ノ書記タリシ者ナリ。奇遇ナリ。向脛ヲ砲彈破片ニテヤラレシ者ナリ

夜殿下ノ御話相手ニ伺候ス。十時過辭去ス

方面軍ヨリ機密費ノ状況ヲ報告スヘク電報來ル。五月蠅キコトナリ

明日米領事婦任ニ付キ御厨少佐折衝ノ要件ニ就テ、第一課又夕横槍ヲ入レ聊カコンガラガル。面倒臭キコトナリ

十一月二十四日發送ノ小包(襦袢袴下着下)到着ス

◇ 十二月三十日 晴

年ヲ過セハ、大シタコトニナツタモノタロト云フ感深シ

日本軍カ英國大使館ノ自動車九台、米大使館ノ自動車六台強奪、尚南京自治委員ノ某乃自動車一台掠奪サレ調査中トノ會報アリ

〔注〕 欄外ニ行ハ判読困難であるが以下のように読める

昨夕ハ引キ続キ電灯一本ツキシシモマタ駄目ナリ

◇ 十二月二十七日 晴後曇

東京ヨリノ視察ダンダン多クナル。參本陸軍省ノ防空視察者、東京防衛參謀引率ノ防衛視察ノ者□□等々(古閑健君引率シ來ル)

南京市内ニ在ル學術的貴重品、ダンダン獲物ヲ漁ル無智ノ兵等ノ為メ破壊サレントス(風早大佐、時任中佐連絡シテ呉レタリ)第二課ニ所要ノ処置ヲ採ラシム

軍司令官支那傷兵ヲ見舞フコトヲ發意セラル。實ニ結構ナル思ヒ付キナルモ、警戒上尚ホ注意ヲ要スルモノアリ
派遣軍軍歌稍々完了、自信アル迄ニハ行カズ

◇ 十二月二十八日 曇後微雨小雪

〔発信〕 同左

〔受信〕 水上重彦

今日モ別段大シタコトナシ

軍隊ノ非違愈々多キカ如シ。第二課ヲシテ各隊將校會報ヲ招集シ參謀長ヨリ戒嚴スル如ク手続キヲナサシム——來ル三十日午前十時カラ實施スルコトニ定ム

13D參謀長下野大佐明二十九日實施ノ上海ノ慰靈祭ニ飛行機ニテ赴ク途中、天候不良ノ為メ引キ返シ自動車ヲ出スコトトス——本夜

第十六師団ノ慰靈祭、國民政府構内ニ於テ午前十時半施行セラ

ル。軍司令官殿下御參拜、參謀長以下幕僚亦參拜ス

午後一時半將校會報、佐々木警備司令官亦出席、軍紀風紀及警備事項ニ就テ指示ス

午後三時軍司令官殿下ニ對シ年末御祝言上、軍司令官亦儀礼的訓示ヲ遊ハサル

午後六時宮邸ニ課長以上夕食ニ招待、歳末相当ノメートル挙ル。

N君例ニヨリ御目出度シ

輕裝甲車ノ藤田少佐本日来訪、昼食ヲ共ニス

◇ 十二月三十一日 曇

遂ニ此日誌トモ御別レノトキガ來タ

今日ハ父上ノ一周忌ニテ謹テ黙禱ヲ捧グ

午後町ノ容子ヲ一巡ス。避難民、雜居ヲ洗フカ如シ。然シ割合ニ朗カナリ

正月の来るすきもなき避難民

將校の家には甘い具合に門松立てり

門松もちらほら立てる南京市

戦地ノ独り者ハ年越吞氣ナリ

年越しの仕度もいらぬ年の暮

夫れで湯に入りて聊カ御供へなどなす

戦場の垢落しけり大晦日

御飾りも出来て正月這入り来る

送(リ)そばナケレト伊勢エビニテ年越シノ食ヲナス

伊勢ゑびを食つて年越すみそかな

〈注・以下は補遺のページにある年越しの随想〉

昭和十二年を送る 於南京城内首都飯店

戦地の占領せし「ホテル」に位置せる軍司令部も何となく年越しの朗かなるものあり、其騒ぎも何時か消えて室内は「ストウプ」の燃ゆる音のみ、ダンダンと思ひ出多き年は更け行く年越しの騒ぎも消えて寂しくも

思ひ出多き夜は更けゆく

去年の今日は父みまかりし日にて、慌だしく東京を発ちて郷里に向ひけり。征旅の身は一周忌の供養も営むに由なく當時を追憶して遙かに冥福を御祈りす

逝きまして早や一年なりにけり

思は馳する故郷の山

八月出征以来只多忙ニシテ月日ノ経ツノカ如何ニモ早キ感アリ。静カニ往時ヲ回想スレハ感慨実ニ無量ナルモノアリ、只案外ニ都合好ク戦鬪モ進捗シテ図ラスモ敵ノ首都南京ニ於テ本年ヲ送ルコトカ出来タノハ、実ニ幸タト思フ

征旅 五月 唯 匆忙

回顧 今宵 万感湧

戦事 幸只 進好調

南京 陣営 送歳暮

補遺

題南京入城

從軍司令官宮殿下入城

戦十三旬屠ニ首都

南京城頭旭旗飄

凱歌今日祝ニ入城

三軍堂々進城門

声匠ニ江南 天地振

將是朝香中將宮

南京自治委員会発会式挙行。参謀長出席

《短歌三首、聖寿万歳、初日の出、五十歳を迎へて》

◇ 一月二日 晴

馬ヲ駆リテ北極閣方面ヲ一巡ス。一時間余、余程秩序立チテ道行ク兵ノ敬礼動作モ好シ「軍司令官邸は今日モ年賀ノ将校陸続、正午稍前ヨリ伺候シテ之ノ応待ヲナス」陸軍省人事局長ノ一行（諫山大佐、稲田中佐、額田中佐外三名）夕方来着、夕食ハ幕僚ト共ニ会食。本日初風呂ニ入ル

午後三時稍前、敵機五機編隊ニテ南京空襲。城外飛行場ニ二五〇K級爆弾十七発投下セシ由、放胆ナル行動ナリ、但我ニ被害ナク敵亦被害ナシ

諫山大佐ノ談ニ依レハ、吾人モ此三月ニハ少将ニ進級スルコトヲ得ヘシ、然シ其以前ニ派遣軍司令部ハ凱旋スルコトニナル模様ナリ

◇ 一月三日 曇、寒シ

〔欄外〕一、司令部野外騎乗。一、電灯点ク。

〔通信〕《六名・氏名略》

《諫山大佐に留守宅宛手紙委託》

軍司令部野外騎乗、司令官宮殿下ヲ先頭ニ一行數十名、中山陵、革命記念館方面ニ向フ、折悪シク寒氣珍ラシク凛烈、殿下外套ヲモ用ヒサセ給ハス恐縮ス、記念館ニテ昼食ニ興シ帰部ス

《辰大尉来訪（腰部貫通銃創）。溝口大尉戦死（辰大尉談）》

本夜飯店本式ニ電灯点灯ス。電灯ト絶縁セシコト四ヶ月、其有リ難味ヲ感ス

正是昭和聖代華

昭和聖史光輝照

弔忠魂

今日の日を待ちつつ散りし戦友の 御魂も空に天かが（け）るらむ

×

万余人の友の御たまも安らけく 鎮まるがごとと固めなむ

×

○戦の後の容子や如何ならむと 車飛ばして南京を見つ

○南京の城の砦は堅けれど 守る人なき没落の国

○南京の町に皇軍充ち満ちて 掃蕩戦の銃声響く

○主なき首都の姿は残れども 敗残の跡痛ましく見ゆ

○紫金山麓に眠る中山霊あらば 道あやまりし人を責むべし

昭和十三年《以下は抜粹》

◇ 一月一日 晴

〔欄外〕一、南京自治委員会発会式

一、蘇大使館焼失

敵首都南京ニ宮殿下ヲ軍司令官ニ戴キ、思ヒ出多キ新年ヲ迎フ。10・00殿下二年賀、次テ東方遙拝、次テ殿下ノ御発声ニテ聖寿万歳ヲカノ限り奉唱、次テ首都飯店玄関前ニテ記念撮影、終リテ食堂ニ於テ祝盃ヲ挙ク。管理部ノ努力ニテ正月ラシキ御料理ナリ。爾後軍司令官邸ニテ正月ラシク過ス

2・00過、露国大使館邸出火消失ス。原因不明ナルモ相当問題ヲ惹起セサルヤ心配ナリ（之ヲ承知セルハ7・00頃、方面軍司令部ニ報告ハ9・00頃トナル）

参戦ノ優秀将校ニシテ戦場ノ成果思ハシカラサル者相当アルカ如シ。困ツタコトナリ。「戦場ハ其人ノ真価ヲ表現ス」真ニ然リ

◇ 一月四日 晴

〔欄外〕一、重藤支隊参謀ヨリノ（以下不明）

〔通信〕《来信四》

朝食後諫山大佐ト要件ヲ談ス

午後16D司令部ニ参謀長ヲ訪問、師団長室（国民政府委員長室カ）備付ノ陶器ノ件ニ就テ調査ヲ依頼ス

雨花台、清凉山方面「ドライヴ」見聞ヲ広ム。雨花台ハ成程程南京市ノ死命ヲ制スル要地ナリ。ベトン製掩体ナドアリ防備堅シ。敵屍尚散逸（在）ス。脚下ニ在ル金陵造兵廠、新式ニテ設備規模広大優秀、之レカ真ニ動キ出シタラ大シタモノナリシナランモ、未タ動カシアラサリシカ如シ

《此日記送付し来る、曆は入手出来ず。長男出生》

◇ 一月五日 晴

補任課出張者額田中佐ト人事問題ニ就テ会談、終日大体無為

青幫ノ秋葉某、長中佐ノ紹介ニテ徐州方面ノ偵察ニ派遣。本夜参謀長ノ指示ヲ受ク（本夜）

本夜参謀長、西原大佐、諫山大佐ト予ノ室ニ於テ会食、西原大佐ノ鶏、鯉ノ御馳走ニナル。人事局長本日離京、帰途ニ就ク

◇ 一月六日 曇 寒シ

〔欄外〕鹵獲兵器試験射撃（16D）

參謀長方面軍司令部二

〔通信〕留守宅へ(諫山大佐托)

參謀長 8・00 發上海方面軍司令部二

諫山大佐ノ一行帰途ニ就ク相当ノ收穫アリシ如シ

午後16Dノ鹵獲兵器ノ射撃ヲ殿下ニ随行シテ視察ス。自動短銃、同小銃、拳銃、Lg、Mg、火炮等中々裝備良好ニシテ、我兵器ニ優ルトモ劣ラス大シタモノダト云フ感ヲ懷ク。後軍官学校、參謀本部、国民政府ナト視察セラル。蒋介石ノ邸宅ナト内部迄御目ニカクレハ好イモノヲ、遙カニ御遠望丈ニ止メタルハ師団長カ居住シオル為メナルヘシ。此師団長ニ好感ヲ持テス

參謀長夕刻帰來、状況ヲ聴取ス。進出ノ意ナシト

本日「アメリカ」領事上陸、感シ好シ。英國B艦長又「トリック」ヲ設ケテ上陸、感シ甚タ惡シ、不都合ナリ

本日31/12-4/1ノ新聞ヲ見ル

◇ 一月七日 晴

〔通信〕庄野少佐ノ鎌田少佐ノ外四名略

大体無為ニ過ス。午後兵器部長ヨリ「要塞処理方案」ヲ聴取ス

藤田少佐カ昨日軍參謀ノ頭髮ヲ伸ハシアル件ヲ攻撃セシ由、馬鹿ナ男ナリト云フ感ス。是レニ便乗セシ第一課ノ參謀共モ又ドーカシテル心地ス。軍紀肅正ノ的ハ他ニ在ルヲ知ラスヤ

《家族の手紙に關して》

◇ 一月八日 曇 寒シ

〔通信〕《三名》

トナルヘシ」明日避難民第二区二一部ノ住民ヲ帰還セシムル由、尚英國側モ能ク軍ノ要求ヲ聴キ入レ相互ノ感情余リ惡カラサル由」

《天谷旅団ノ堤大尉來。雜誌類多数配給》

◇ 一月十一日 晴

〔欄外〕○賀陽宮殿下御出發

〔通信〕○雨花台、中華門方面ノ戰蹟見學

軍司令官宮、賀陽宮兩殿下雨花台、中華門ノ戰蹟御視察、6D下野參謀長、10A堂脇參謀御説明、中華門上ニテ図ラスモ47i三明大尉ノ説明ヲ聴ク。同大尉ハ曾テ參謀本部ノ第一部ニ在リテ書記トシテ勤務セシ旧知ナリ。6D方面ノ「劇戰」ナルモノヲ派遺軍ト拵違ヒナリ

本郷少佐ノ談ニ依レハ、南京ニ來レル外交官ニテ独乙カ最モ感シ惡シトコトニテ意外ノ思ヲナス。或ハ我カ内兜ヲ見透カシ「事変ノ仲介役ハ吾ナリ」ト云フ潜在意識アルカ、或ハ在上海猶太財閥ノ尻押シカ?

《參本庶務課西少佐より下着送らる。「バット」三個加給》

◇ 一月十二日 曇 東風寒シ

〔欄外〕○軍司令官宮殿下ヨリ佑詰ノ下賜アリ

◎理髪して頭の寒さ覚えけり

今朝ハ紫金山ノ雄姿明瞭ナレト暗雲瀰リテ天候險惡ノ兆アリ。東風漸次強ク為メニ寒シ

參謀總長殿下ヨリ軍紀風紀ヲ緊肅スヘキ電報ノ來シヲ觀テ恐縮ニ

《根岸經理部長より業務通報》

本郷參謀ノ報告ニヨレハ英國B艦長機嫌甚タ好転セシ由、但衣糧廠ノ撤去ハ已ムヲ得サルヘシ

憲兵報ニヨレハ軍紀上ノ非行者相当アリ、召集ノ少尉、准尉級ニ破廉恥行為アルハ遺憾至極ナリ

《忠靈塔、考科表の件》

◇ 一月九日 晴

〔欄外〕賀陽宮殿下御來部ノ水道開通

賀陽中佐宮殿下御着京。軍司令官宮邸ニ御一泊、午後七時半ヨリ幕僚ト御會食、十時五十分解散。午後一時間程玄武湖ヲ馬ニテ散策ス。冬ノ陽光氣持好ク照シ、風光明媚心氣爽快ヲ覺ユ

《水道開通、當番兵頭痛(「マラリヤ」発作)》

本郷少佐昨夜英、米、独ノ領事ト會食セリト。英モ大分理解シテ好転セシ由ナリ

蒋介石龍海線ノ遮断ニ胆ヲ潰シ攻勢ニ出ツヘク指令セシ由情報アリ。又「ゲリラ」戰術ニテ我後方ヲ擾乱スヘキ旨指令セシ由

◇ 一月十日 晴

〔欄外〕紫金山、幕府山視察

軍司令官宮殿下、賀陽宮殿下(下)ニ随行シテ紫金山頂ニ33iノ戰況ヲ聴ク。第六中隊ノ夜襲ノ如キ相当ノ教訓ヲ得、20i左翼ニ在リテ戰績思ハシカラサリシ由、天文台上ニテ昼食、康生東ノ炊爨ニヨル御馳走ナリ。次テ幕府山砲台御視察、午後四時過キ帰部ノ噂ニ依レハ独大使仲ニ入りテ蒋介石トノ構和斡旋中ナル由、帰還モ不遠コ

不堪

「アメリカ」大使館ニ對スル非行事件ニ就テ參謀長カ陳謝ノ意ヲ表スルコトハ不都合ナリヤ?ノ疑問解ク能ハス

16Dハ愈々來ル二十二日ヨリ北支ニ転送ヲ開始スル由ナリ

◇ 一月十三日 曇 風寒シ

種々面白カラヌ話ヲ聞キ不愉快ナリ。①Y參謀盛ニ課長ノ惡口ヲ衝ク。部下ノ身上ノ面倒ヲ見ス、自己吹聴榮転ヲ予期セシカ近頃ベシヤンコ、軍紀嚴正ヲ叫ビツツ処分ヲ忌憚Setc、②xD長盛ニ軍ノ惡口ヲ衝ク、③S少將軍ニ衝キカカル……《午後乘馬》岡崎領事ノ談ニヨレハ日独當事者ノ惡化ハ、言語ノ翻譯ニ依ル錯誤ニ因スルモノ相当ニ在ルカ如シ

重藤少將、波田少將ト入替リハ先般來S少將ノ行動ニ因スルモノカ、惜シキコトナリ。幕僚モ亦不都合ナリ。《織田兵站司令官來》北方作戰ニ就テ更ニ意見申ヲナスヘク御下命アリシ由、余リシツコク出テサルヲ可トセンニ

◇ 一月十四日 曇後稍晴

〔欄外〕歩十二主力揚州ヨリ南京着

〔通信〕波田少將(祝辭)

《參謀長の手伝い(考科表、拔擢)。兵站演芸會》

歩十二聯隊本々南京着、軍旗ヲ出迎エ安達大佐ニ會遇ス。余リヤツレテモ見エス兵モ元氣ナリ

宮崎憲兵大尉ノ越權行為アリ16D參謀長ヨリ軍參謀長ノ許ニ抗議ヲ申込み來リシ由、小山憲兵隊長ハ着(任)早々ガス中毒且ツ腎臟

ノ癩疾アリテ臥床中ナリト、依リテ元隊長高藤少佐ヲ招致シ一応ノ取調ヲナス。《松田、長岡、青木各海軍参謀の送別会》

◇ 一月十五日 曇 密雲低シ

後頭部重シ「ガス」中ノ如キ氣持セシカ恢復

午後大西大尉ノ巡視ニ基ク宣撫工作等ノ報告ヲ聴取ス。宣撫班モ金ト力ナク困リアルカ如シ。特務部ノ手カ廻ラサルナリ。上海ノ自治政府ハ二月初頭ニハ店開キノ予定ナリト

軍医部長ノ統計的調査ニヨレハ、派遣軍ノ昨年末迄ノ犠牲者左ノ如ク高価ナルモノナリ

戦死 一六、六〇九

傷病

総計

病死 一、七九六

計 一八、四〇二

八六、〇〇七 一〇四、四〇九

宮崎憲兵ノ行動聴ケハ聴ク程非常識ト非行多キカ如シ。困ツタモノナリ。《安達大佐来部》

◇ 一月十六日 晴 夜東風強シ

〔欄外〕22 i 着京

16 D 転用発令

西原第一課長ハ連絡ノ為メ上海へ。参本第八課長大津大佐視察ノ為来京、天谷支隊高級副官、西部防衛参謀少佐等来部。歩二二聯隊又本夕到着ス

第十六師団20、33兩聯隊感状申請。第二課、第三課ニ廻ス。同師

団北支方面転用ノ命令発令

《大津大佐の為第三課主催の夕会食出席。短歌三首》

柳田大佐と会合。芳村参謀の報告誤り（安達大佐の話）

◇ 一月二十日 雪 西北ノ風強シ

今日モ御天氣悪ク遂ニ雪トナルモ深ク積ル程度ニ至ラス

《柳田大佐出発。大西大尉9Dの慰霊祭に出発。佐々木少将明日の出発挨拶に来部。芳村参謀より感状申請書類受領。英国材木買入の件（本郷参謀）。外国人に酒保の品物の一部販売の件》

◇ 一月二十一日 晴

〔通信〕《六名》

《9 i 本部7・40発新任務に就く。南京駅に見送り、誤って発車し堯化門で下車、帰部》

掠奪婦女拉致等軍紀問題ニ関シ「アメリカ」領事東京大使ニ「外交官無力、軍部統制ノ意志ナキ」旨打電セシ由、参謀次長ヨリ真相取調ヘ方要求シ来ル。本郷参謀ノ交渉ニ由レハ領事ハ陳謝セシ由、16D司令部附大尉ニ、通訳ニノ不軍紀事件憲兵報告ニ接ス。不都合ナル奴共ナリ。尚緊肅ノ要アリ

《二神少佐、榊原少佐の送別会食、長中佐に会う》

◇ 一月二十二日 晴 淡雪未ダ解消セス

〔通信〕《一名》

《9 P 野中大佐昨夜到着。表忠塔建設の件。野田大佐転任挨拶。押目大尉転出。夜大使館に領事招待》

16 D 長早晩南京駅発北支方面ニ向フ、軍司令官宮殿下外幕僚駅ニ御見送りヲナス

◇ 一月十七日 小雨

〔欄外〕16 D 送別会食

〔通信〕留守宅ノ慰問袋一ケ

《重藤少将来部》

西原大佐方面軍ト連絡帰部、独逸大使ヲ通シテ媾和条件ヲ示セシコトモ承知ス。蔣之二応セス御前會議トナリ、蔣政權否認ト迄遭キツケシナリ

本夕御殿ニ第十六師団長以下団隊長ヲ集メ送別会食ヲ催フサル。師団長トS少将論議喧シ。S少将聊カ過キテ宮様ノ一喝ヲ受ク。兩方共負ケ嫌カ多弁カ見苦シキモノナリ

《慰問袋（送り主、神戸市・前川久子）》

◎御しゃべりの中に志まさんけさごろも着せて佐々木も倒れず◎呪ゆる白奴にブル公がかみつき野田の中にて騒ぎ出す

◇ 一月十八日 曇後晴

〔通信〕《三名》

天候恢復ス。午前十時ヨリ飯店食堂於テ軍案隊ノ勇壮ナル演奏アリ。《午後乗馬。夜活動写真。徵募課長柳田大佐来部》

◇ 一月十九日 微雨

〔欄外〕徳川圀順侯、軍馬補充部本部長来京

〔通信〕《一名》

本日亦無為

《偕行社記事一月号到着。参謀本部門松大尉と会談。夜安達大佐、

◇ 一月二十三日 晴

〔通信〕《一名》

昨夜何故カ好ク眠レス後頭部痛ム、ガス中毒症状ナリ、大シタコトハナキモ身体情ク元氣出ズ

参謀長ノ話ニヨレハT中佐、加藤勸十ヲ酔余ヤツツケタト云フ風評飛ヒアル由（事実ハ相異セルカ如シ）又M憲兵大尉ノ忌ハシキ風聞アリ（①調査中兵傷害致死、②五、〇〇〇円位貯金シアリ……）果シテ如何ナルモノナリヤ？

《夕食殿下の宿舎に御招待。押目大尉転出挨拶。9 D 13 D 戦死者特別進級の件》

支那爆撃機昨日午前九時二十分頃蕪湖爆撃、我軍人馬多少損害ヲ受ク

◇ 一月二十四日 晴

参謀長ハ連絡ノ為メ第十三師団司令部ニ、薄暮帰部「内山重砲旅団長、江北作戦ニ関スル砲兵用法ノ意見具申ヲ、軍司令官ニ口頭ヲ以テ申告、敢テ直接申上ケルマテモナキコトナリト思フ」

《感状一通り見る。芳村中佐に処置指示。夜「ニュース」映画》

佐々木旅団司令部、野田聯隊本部南京埠頭ニテ乗船、夕刻西原大佐ト共ニ告別ニ行ク。佐々木少将一杯聞召シテ肝声雷ノ如シ。此間カ副官モ一番呑気ナトキナランカ「夜眠れず」

◇ 一月二十五日 曇 夜東風強シ

〔通信〕上野龜甫少将ノ笠藏次少将「陣中見舞」

《台北より厚東在郷少将、上海兵站病院長伊佐大佐、藤田少佐山D参謀に移籍挨拶、笠少将陣中見舞品(塩ウニ、乾ウルメ)》

第十方面敵ハソソロ我配備ノ間隙ニ乗シ這イ出シ来ルノ状勢ナリ。始末セサレハ五月蠅キコトトナランカ」米大使少シ神経衰弱の症状ヲ呈ス。無キ非行ヲ領事館ニ申込ミシ由」

《夜、朝日新聞主催慰問団(エンタツ、エノスケの漫才)》

◇ 一月二十六日 晴

〔欄外〕○13D二行動開始ノ命令発令

○城外飛行場空襲(10・10過キ)

〔通信〕《五名》

第十三師団ノ作戦行動ハ軍司令官独断ニテ決行、28日行動ヲ開始スヘキ軍命令発令。此独断ノ是非ハ敢テ論スル限リニアラス。司令官宮殿下ノ鞏固ナル御意思如何トモナシ難シ」《山口少佐来訪》

33 i 第八中隊天野某中尉ノ非行偶々本郷参謀ニヨリテ発見、出発ヲ明早朝ニ控エタル本夜大隊長ヲ招致シ、其取調ヘヲ命スルト共ニ天野部隊関係者ノ出発ヲ停止シ、憲兵隊長ニ取調ヲ命ス。遺憾千万ナリ。右ニ関連シ「アメリカ」領事ニ本郷参謀陳謝ノ余儀ナキニ至ル

《短歌一首》

◇ 一月二十七日 晴

〔欄外〕西原大佐命令ヲ持参13D二行ク

《松井七夫中将より土産に海苔を。香川県より慰問品(干魚)》

昨日ノ空襲海軍機及人馬ニ若干ノ損害アリ。敵機撃墜確実ナルモ

ニ取ラレスナト大ニ親善振りヲ發揮シアル由ナリ

《午後牡丹雪降出す。13D中隊長以下十二、三名の損傷。第二課より雑誌「改造」借読(江戸城明け渡しに於ける勝、西郷の応酬が参考)。睡眠不十分。短歌一首》

◇ 一月三十日 曇

〔欄外〕在郷軍人会慰問団来京

天候恢復セス雪尚解ケス

《上海派遣軍軍歌に就いて》

感状一応協定ヲ了シ参謀長ニ提出ス。純理論丈ニテハ行カス、統帥ト云フコトモ考慮セサルヘカラス

《13Dの行動順調。篠田中将一行来着。短歌二首》

◇ 一月三十一日 曇

〔欄外〕《短歌一首》

密雲低ク鬱陶シク飛行機遂ニ飛ハス本間少将モ武藤大佐モ遂ニ来ルヲ得ス、北島中佐参謀ハ13Dト連絡ニ汽車ニテ出縣ク

《在郷軍人会一行と軍司令官邸で会食。午後参謀長、西原大佐と感状を審議。夜本郷参謀を招致、後雑談(同参謀の性格を今まで少し見違えたる点あり)。野田海軍機関大佐来る。短歌一首》

◇ 二月一日 晴

〔欄外〕一般航空郵便物取扱/理髪

○荻洲部隊臨准関占領

○外国領事招待

ノ二、蘇聯人ニ墜死ニ逃亡。本日海軍機敵打チニ行キシモ漢口ニ敵機ナシ、南昌ニハ戦闘機制空、若干人ノ損害ヲ受ケテ帰着

天野中尉ノ取調ニ就テ憲兵報告……昨夜ノ勢当ルヘカラス、大隊長不甲斐ナクモ統御出来ス。残置命令ヲ当番兵ヲシテ伝達セシム。

法学士、弁護士中々法網ヲグルコト心得アリ、憲兵ノ取調ニ対スル答弁妙ヲ得タリ。嚴重処分ヲ要ス

今日亦「アメリカ」人ヲ兵力殴打シ問題ヲ惹起ス。実ニ困ツタコトナリ。本郷参謀大ニ苦心ス

◎霜白く池の水は堅けれど 上る朝日の光さやけし

◇ 一月二十八日 曇

〔欄外〕13D作戦行動開始

十三師団鳳陽ニ向テスル作戦行動ノ火蓋ヲ切ル。支那側ハ敗軍ノ将ノ死刑免官ニテ大ニ肅正ノ実ヲ挙ケントシ、徐州方面ニ兵力ヲ集中シテ頑強ナル抵抗ヲ試ミントナシアル如キ景況ナルカ、師団ノ戦果聊カ氣ニ懸ラサルニアラス」9Dモ亦昨日来太湖内ノ半島ニ在リト予想セラル敗殘兵ノ掃蕩開始、余リ獲物ハナキモノノ如シ」

《松井七夫中将熱発、最高法院にお見舞い、在郷軍人会篠田中将三十日来。参本II部長本間少将三十一日到着予定。38 i の船出見送り。上海派遣軍軍歌について。短歌一首》

◇ 一月二十九日 曇午後雪降り出ス

33 i ノ天野事件軍法会議ニ附スルコトヲ決ス」其他法務部長ノ手許ニハ軍法会議事件数件アリ、軍司令官ノ決裁ヲ受ク」伊太利ノ支那駐在武官来部、軍司令官殿下ニ拝謁ス。大使館ノ自動車ハ日本軍

○室ニ「スチーム」通ス。

本間少将一行飛機ニテ来着。本郷少佐外人関係事項説明。本間少将ノ談ニ依レハ、特ニ先般来軍内ニ勃発セル外人関係ノ事項ノ調査ニアラスシテ単ナル連絡ノ意味ナレトモ、外国関係ニ於テハバネー号事件ノ現地調査ノ意味モ含マレアリ(表向)、武藤大佐モ来部、13Dノ北伐戦ニ就テノ指導含マレアリ、中央部ニ於テハ臨准関北方ノ河ヲ超エテノ前進ヲ阻止ス。此旨13Dニ電訓ス

天谷少将警備宣撫ノ根本方針ニ就テ軍ノ真意ヲ質問、偶々武藤モアリテ好都合、臨時政府ノ置場所シテ将来ハ最善ノ状態ニ在ラシムヘキコトヲ希望ス

斯クテ本日ハ終日参謀長室ニ於テ右ノ如キ会談ヲ了ル

夜大使館ニ英、米、独等ノ領事ヲ招待(本間少将ノ名ヲ以テ)シ晚餐会談、大ニ彼等ノ心境ヲ軟ラケ多大ノ効果アリシ如ク觀察セラ

ル。今後ノ成果果シテ如何?

◇ 二月二日 曇 八・〇/・〇四

〔欄外〕荻洲部隊 埠鳳陽占領

〔通信〕一名

本間少将一行ト軍司令官邸ニ於テ会食(昼食)

夜大使館ニ被招待、日高参事官等と会食(軍司令官部課長以上、警備司令官及副官)十一時辞去

《山下輜重兵少佐着任。荻洲部隊蚌埠、鳳陽占領。西原大佐は復員後陸大教官に転出の様子》

◇ 二月三日

〔欄外〕西条八十作「皇軍南京に入城す」（切抜きを貼符しあり）
〔通信〕《四名》

参謀長ハ地鎮祭ニ参列ノ為メ上海ヘ。本願寺里〔智〕子裏方御慰問ニ来部、軍司令官宮殿下御面接
《荻洲部隊鳳陽附近淮河右岸の要地占領。内地新聞、中央公論到着》

◇ 二月四日 曇後雪

〔欄外〕表忠塔地鎮祭

《大場鎮表忠塔の地鎮祭。日高参事官来訪。》

長中佐起案ノ状勢判断ニ就テ殿下ノ明快適切ナル御所見ヲ拝聴ス。尚種初減少ノ様子ニ配慮アラセラル。又紀元節ノ行事ニ就テ御下問アリ、細心ナル御注意ナリ

《荻洲部隊は北面して警備態勢に移る。南方に当面の敵集団あり、蔣介石は10A正面に於いて攻勢に出るべく指示せりという。情報によれば敵は微力なり》

◇ 二月五日 曇後晴

〔通信〕留守宅母上外二通

参謀長夕刻汽車ニテ帰来、三日間二巨ル書類ノ幅湊ニビツクリノ体、当然ノコトナリ

感状案一瞥セルガ大斧鉞ヲ加フルヲ要ス。幕僚其人ヲ得サレハ実ニ苦勞ス
《手紙数通一斉に来る》

ル武士道ノ情ケナリ」自治委員会ノ一行、日支ノ僧侶参列ス

午後松井軍司令官ヲ大使館ニ訪ヒ感状ニ就テ裁決を受ケ、後飛行場ニ其出発ヲ見送ル

夕食ニハ上海ヨリ来レル新聞通信員三名及大使館員ヲ参謀長招待《身体だるし。約一万の敵が西方蘆州に進入東進中と》

新聞ニヨレハ広東ノ革命ヲ初メ支那内部ニ相当ノ動揺アリ。独ノ政変、英ノ大使更迭等。日本ニ有利ナルハ愉快ナリ。——真相ニアラストモ——

◇ 二月九日 晴

〔欄外〕十一戦隊司令官招待

〔通信〕発、安藤利吉中将

本日無為。午後六時半下関碇泊ノ第十一戦隊司令官近藤栄治郎少将ノ招待ヲ受ケ。吾等幕僚四人、田尻碇泊場監、天谷少将及其副官ノ七八ナリ。狭苦シキ船室ナレト相互歎ヲ尽ス。戦隊幕僚（篠原……）艦長柏本、戦隊機関長御子柴等ノ諸士サービス大ニ務ム。午後十時過キ辞去ス

新二軍司令官付ニ転補サレシ広田航空兵中佐着任ス

《午前、月浦鎮の戦闘に就いて天谷旅団長の講話あり》

◇ 二月十日 曇 寒シ

〔欄外〕鎮江視察

軍司令官宮殿下ノ鎮江御視察ニ随行ス

《鎮江で「か弾」実験、砲兵部隊視察、3D司令部で昼食、金山寺、象山砲台見学、午後五時帰着。北島参謀陸大教官、大西参謀支

◇ 二月六日 曇微雨

〔通信〕《四通》

《天谷、安達両部隊長の講話、連絡不十分でお流れ。午後湯水鎮歩兵学校で「か弾」実験見学、余り思わしからず。帰途慰霊祭場を点検》

6・00松井軍司令官到着、停車場ニ御出迎エ、後宿舍大使館ニ伺候。本夜殿下松井軍司令官ヲ招待遊ハサル、陪食ハ参謀長ノミ

◇ 二月七日 曇後晴

〔欄外〕兵ノ音信ニアルコトナキコト誇大ニ報告スルモノアリ。結極是等ノコトカ誤解ヲ受ケル元トナル

英靈二万余ノ慰霊祭挙式。畏クモ軍司令官宮殿下祭主トナリテ取リ行ハセラル。畏キ極ミナリ。松井軍司令官モ参列セラレ予ハ参謀総長代拝ヲナスノ光榮ヲ担ヘリ。幸ニ天氣モ好転シ寒サモ強カラス。終了後松井大將感想ヲ述ヘ、軍紀ノ肅正ヲ参集團隊長ニ訓示セラ。本夜団隊長会食ノ後モ支那人ヲ可愛ガリ真ノ親日ヲ培ヘト希望ヲ述ヘラル。少シハ軍司令官ノ氣持モ徹底スルナラン

本夕参加団隊長会食、上海派遣軍軍歌ヲ紹介シ盛会裡ニ解散。後工藤少将ト自室ニ於テ会談、□□少佐、堀場ノ両氏ト会談ス

◇ 二月八日 晴

首都飯店玄関ニ於テ松井軍司令官、朝香宮軍司令官殿下ト共ニ記念撮影。松井軍司令官兵站病院見舞。挹江門脇ニ於テ支那軍戦死者ノ慰霊祭ヲ□□ニ取り行フ。「敵ニハアレト亡キガラニ花ヲ手向ク

那駐在員に転出。新聞によれば陸士生一、八〇〇名、幼年生徒六〇〇名採用、未曾有のことなり》

◇ 二月十一日 快晴

〔欄外〕《漢詩一編》

軍ノ改編ニ就テ公式ニ承知ス

《紀元節俳句三首》

午前十時軍司令官宮殿下司会ノ許ニ東方遙拝施行

軍司令官ノ改編ニ就テ方面軍ノ公電ニ接ス。当軍司令官ヨリ新軍司令部ヘノ転入者四十三名、帰還者ト略ホ相半ス。十三日ニ各課参謀及主任職員一名事務打合せヲ為メ方面軍ニ招致セラルル予定《13D方面蚌埠、臨淮關対岸の敵北方に退避開始す。午後安達12i長談話に来る。本夜軍司令官在南京の勅任官級を招待せられる。》

◇ 二月十二日 曇 天気下り坂 払曉〇度/日中一〇度

〔欄外〕〇北極閣其他見学

〇伊東師団長来部

〔通信〕《来五名》

《午前22i長永津大佐の徐立涇口附近上陸戦闘の実戦談。午後軍司令官宮殿下のお供で兵站病馬廄、北極閣天文台上防空司令部見学》防空司令部ハ擬寺院内地中深く坑道ヲ掘リ、設備整ヒ参考トスルノ価値アリ、我國ニハ未タ見サルモノナリ

《伊東部隊長報告のため出京。方面軍の改編着手。参謀長室にて会食》

◇ 二月十三日 雨後曇

〔通信〕《多数》

《13D 渡河作戦、両方面とも戦死各二一、負傷約七〇、敵死体約二、〇〇〇、俘虜、鹵獲品多数》

憲兵報告ヲ見ルニ軍紀風紀上の事故未タ相当ニ多シ。常規ヲ脱セル意想外ナルモノアリ。動機ハ酒ナリ。実ニ遺憾千万ナリ

《正月の葉書、年末の挨拶状多数来る。短歌一首》

◇ 二月十四日 曇

本夜天谷支隊長ノ招宴ニ出席、所謂軍官学校内ニ在ル蒋介石ノ住居ト云フ家ヲ拝見御馳走ニナル

《大坪参謀より方面軍との打合せ事項聴取。十八日南京出発、二十三日上海出帆予定。凱旋近し》

◇ 二月十五日 曇後晴

〔欄外〕 気温俄ニ高クナル

〔通信〕《四名》

急カシイ中ヲ安達大佐ノ講話。終了後軍司令官室ニ於テ課長以上各個ニ殿下ト撮影、恐レ多キコトナリ

《軍司令官の獅子山砲台、雨花台、長屋部隊御視察に随行。六時半より部内訣別会食。目まぐるしき状態なりき》

昭和十二年九月九日～十二月三十一日

山田梅二日記



ガーデンブリッジを警備する海軍陸戦隊員（佐藤振壽撮影）

歩兵第百三旅団長・陸軍少将 18期

[illegible]

昭和十二年

(動員下令)

王城寺ヶ原演習場ニ於テ午後六時稍過ギ中隊長ヲ集メ次年度教育ノ指示中来電
「貴官ハ歩兵第103旅団長ニ充用セラル」ト、サレド動員下令ノコトナキ故唯ソレダケノコト
ト、会食中ニ副官ヨリ直ニ帰校ヲ請フトノ電話アリ、八時出發、約四十五分帰宅ス、副官ノ報
告ニ依リ……動員ヲ下令セラレ予ノ副官ノ其他一名ヲ知ル
タダ師団長、トナリノ旅団長知己トテ心強シ、カネテノ心待チトテ本懐ノ至リナルモ特ニ興
奮ヲ覚ヘヌハ年ノセイカ？ 当夜別ニナスコトモナシ

(本日王城寺ニテ、カネテノ念願タリシ一の字山ニ登リシコト吉兆ト認メラル)

◇九月十日

朝、氏神八幡社ニ出征報告、午前学校ニ出勤、正式ノ通報ヲ見、直ニ師団ニ至ル、荻洲中將風邪ニテ引籠リト力、沼田少將ト共ニ參謀長ノ代理ニテ補職ノ伝達ヲ受ク(補第103旅団長トイフ形式ナリ)、次イデ相携ヘテ師団長官舎ヲ訪ネ、帰校、考科表其ノ他机ノ整理約二時間、帰宅ス学生隊長モナク校長モ無クナリシ学校ハ困ツタモノナリ
午後二時半頃ヨリ三瓶ニ至リ泰雄ノ応召ヲ見舞フ、又三番丁ニ暇乞ヒス
夜兄、勝彦、徳、健三來訪ス

山田少将は当時、仙台教導学校長

上海方面の戦況は容易に進展せず、上海派遣軍の過少な兵力を増強するため、九月九日「勅第六号（第九・第十三・第十八師団のほか七十四部隊）」が下令された。九月十一日、新たに上海派遣軍戦闘序列が発令され、同軍は軍容を一新して、第三・第九・第十一・第十三・第一百師団を基幹とし、野戦重砲兵旅団、攻城重砲兵部隊、第十三飛行団等を有するものとなった。

なお、政府は九月二日、「北支事変」を「支那事変」と呼称することに改めた。

(戦史叢書「陸軍軍戦備」176ページ)

第十三師団長 荻洲立兵¹⁷期
沼田徳重¹⁹期 歩兵第二十六旅団

第十三師団（仙台）は、歩兵第二十六旅団と同第百三旅団を基幹として編制せられた。

第百三旅団は歩兵第六十五聯隊（会津若松）と歩兵第百四聯隊（仙台）を以て編制された。

荻洲中将トノ対談

- 1、旅団長トシテ命令ノ多ク徹底セズ、実行ノ監督ヲ要セシコト
- 2、戦時編制ヲ以テスル部隊ノ指揮、中小隊長ハ最初人員ノ多数ヲ持テ剩シ、無用ノ損害ヲ作リアルニアラズヤ、故ニ最初ハ多クノ予備隊ヲトラシメ半小隊ノ指揮ヲナサシムルヲ可トセズヤ

ト、蓋シ此ノ2ハ卓見ト認ム

◇九月十一日

二百二十日ノ荒レ日ナリ、朝来ノ暴風雨夕刻ニ止ム、終日在宅

山田勤兵衛氏金沢ニ応召トテ暇乞ヒ二来ル

学生隊午後二時過ギ大風雨中ニ帰校ス

◇九月十二日

午後九時ヨリ歩四ニ到リ聯隊長、旅団副官ニ面接ス

応召兵、動員事務等ニテ多忙ヲ極メアリ、却テ邪魔トナル故ニ、三ノ指示ヲナシテ帰宅ス
午後山田勤兵衛氏ヲ見舞ヒ又青葉神社及ビ御両親ノ御墓ニ御暇乞ヒ、ナオ永井姉上ヲ見舞フ
テ別レヲ告グ、夜中杉ニ暇乞ヒス

◇九月十三日

午前学校ニ出務、永野中佐ニ申送り、一一・三〇ヨリ大講堂ニテ告別最後ノ訓示ヲナシ、次
イデ下士団將校団ニ告別、〇・三〇ヨリ送別宴、一・一〇校門ヨリ聯隊区司令部前ニ整列セル
学生隊ニ見送ラレ、満一年半勤務ノ学校ト別レヲ告グ
歩四ニ至リ旅団副官、通信將校ノ申告ヲ受ク

副官 歩兵少佐 田山芳雄

今日ヨリ暇ヲ求メテ教導学校ノ広中大尉ヨリ副官勤務ノ、山本中尉ヨリ無線ノ教育ヲナシ貰
フコトトセリ

午後四・三〇師団新参謀長畑大佐着任、停車場ニ迎フ

夜、精養軒ニテ將官懇話会

○師団長ノ希望ニテ明日侍従武官ノ御伴ヲシテ若松ニ行クコトナレリ

○予ネテノ用意ニテ軍装其他ノ準備殆ドナシト思ヒ居リシニ、愈々トナレバナカナカ有ルモノ
ナリ、準備良スギルノカ?

◇九月十四日

午前六・五六侍従武官着仙御迎ヘヨナス

七・三〇師団長ニ伺候式(偕行社)、終ツテ師団長ノ司令部職員ニ対スル訓示ニ立会

八時偕行社大広間ニ於テ、聖旨ヲ賜ハル、優渥ナル御沙汰ヲ拝シ真ニ感激ニ堪ヘズ

午後畑参謀長ト打合せ等ナス

一・〇〇ヨリ歩四ノ動員実施状況御実視ニ立会

二・三〇過ギ武官ノ御供シテ若松ニ到ル

御趣意

「我武威ヲ宣揚セヨ、氣候風土ノ異レル地ニ作戰スル者トシテ自重自愛セヨ」

◇九月十五日

午前八時ヨリ若松聯隊ノ御視察、留守隊長佐藤中佐御案内申上グ

一〇・三〇頃ノ汽車ニテ若松ヨリ越後ニ向ハル、沼田少将ト交代ス、右御送り後白虎隊、陸
軍墓地参拝、市長、在郷分会長訪問

一一・一〇ヨリ歩兵第65聯隊將校ノ伺候式ヲ受ク、次イデ訓示、正午会食、会食後大隊長以

歩兵第四聯隊(在、仙台)

砲兵大佐 畑 勇三郎^{23期}

歩兵第六十五聯隊の動員状況を視
察

上ヲ集メ注意事項ヲ述ブ、午後二・三〇過ぎ若松出発、七・一九帰仙

◇九月十六日 雨

午前七・一〇頃ヨリ車ニテ塩釜神社ニ詣デ武運長久ヲ奉祈ス

八・三〇頃聯隊ニ出務、次イデ偕行社ニ至リ師団長ニ申告、参謀長ト用談

午後四・三〇留守司令官・鷺津少将ヲ迎フ

五・三〇ヨリ近親ヲ呼び首途ノ内祝ヒヲナシ、相携ヘテ精養軒ニ到リ招宴ス、八時帰ル

◇九月十七日

旅団編成完結、午後四時ヨリ軍装検査

◇九月十八日

旅団司令部 (荒町三五 森善吉)

◇九月十九日

午後二時ヨリ若松聯隊軍旗奉拜式参加

「皇祖考ノ賜ヒシ軍旗ヲ再ビ授ク」トノ勅語、感激ノ外ナシ

夜、福島県君島知事、佐瀬若松市長、若松在郷軍人聯合分会長外、聯隊長、各大隊長ヲ招宴ス

◇九月二十日

午後一・三〇ヨリ宮城の原ニテ歩兵第14聯隊軍旗奉拜式参列、六時ヨリ歩四ニテ祝宴、次イ

デ聯隊長、大隊長ヲ「青葉」ニ招宴ス

山田少将は宮城県出身

福島県知事 君島清吉

歩兵大佐 田代之俊^{24期}

◇九月二十一日

団隊長会議、夜師団長ヨリ招宴

会議

九月二十一日、於仙台偕行社、荻洲師団長

師団長ノ覚悟、要望

1、戦功ヲ樹テンヨリハ三軍ノ和ヲ以テ、明朗ナル統制指揮センコトヲ望ム

2、誇大宣伝的ナル報道ノ排撃

3、中少尉級ノ短慮尚早ナル率先ノ損害ヲ考慮スルコト

4、強ク正シク、積極進取、準備周到ト断行、断行セバ疾風迅雷

5、不断ノ警戒ト四周ノ警戒

6、不良住民ニ対スル断乎タル処置 (思想戦)

「チャーチ」ノ処置

7、保健ハ隊長ノ責務ナリ、伝染病防止

畑参謀長口演

(一) 教育作戦準備

1、教ヘツツ戦闘

2、水濠ノ連続的通過

3、準備ノ周到

4、機秘密ノ保持 (未ダシ)、消極ノミナラズ、或場合ニハ逆用ノ心得迄進マザルベカラズ

5、司令部ト団隊トノ連絡提携

- 6、適切ナル意見具申（時機選定）ト積極的任務ノ遂行
- 7、偽装用ノ軍服
- 8、輸送（鉄道、国民ニ与フル影響）
- 9、捕虜（現地処理ヲ本則トス）
- 10、武装解除時ノ警戒
- 11、通信連絡、各隊ノ実情ハ師団ノ弱点ナリ
- 12、警戒自衛、先遣兵団ノ失敗
- 13、戦利品、取りタルモノハ連絡セヨ
- 14、時間ノ励行
- 15、斥候用ノ変装被服、現地ニテ準備ノコト
- 16、支那軍毒瓦斯使用ノ報アリ、直チニ報告、処置
- 17、携帯口糧ヲ残置スル例アリ、個人携帯ノコト
- 18、衛生、防疫（注射ヲ完了セヨ）
- 水路即大道路ナリ、此ノ警戒ヲ必要トス
- 通訳ト使用人ノ注意 ○不良日本人ノ取締リ
- 密偵培養 ○防牒 ○流言蜚語ノ利用
- 統税、塩税、関税
- 交通ノ整理
- 国民政府ノ惡政禁止、手先排撃
- 兌換（日本貨幣ト）

吉原参謀

- 1、支那軍ノ陣地

日本軍ノ陣地ノ頭ニテ偵察等ヲヤレバ大分異ルモノアラシ
 単独散兵壕ニヨル地下連絡多シヘ点々タル掘土（赤ハゲ）シカ見エズ
 壕幅狭小ナリ

掩蔽部ヲ捜スコト必要、障害物必ズシモ側防シアラス

障碍物ノ無キ所ハ却テ通過シ能ハザル地障アリ、「トーチカ」ハソ聯軍ノモノヲ縮少セルモノナリ、砲堡「トーチカ」ノ支那化セルモノ、野砲弾ニテ破壊シ得ルモノアリ

煙ノ利用は、風ノ向キヲ考慮

- 2、上陸

各中隊軽機ヲ先ニスル

瀬戸内海ニテ訓練スルコト

参謀本部 西村航空兵少佐

- 1、海軍陸戦隊ノ攻撃力ハ極メテ小（一ノ土囊、一ノ拒馬ヲ除去スルカナシ）
- 2、（略）

- 3、突嗟ニ重大任務ヲ与フベカラズ（例）第一次上海事変ノウースン攻撃中隊、今次・宝山攻撃ノ戦車中隊

- 4、城壁ヲ有スル村落ニ対スル攻撃（直接攻撃ハ不利）

- 5、著明目標トナル家屋ニ司令部ノ増集ハ不可ナリ

- 6、攻撃方向トクリークノ方向

- 7、家屋直後ノ溜池ハ渡渉困難ナルコト多シ

- 8、水田ハ概シテ乾涸シアリ

- 9、擬装ニ現地ノ資材（ヲ利用）

- 10、平地ト村落トノ境界（歩砲ノ協同）

傍線は編集委員による。

工兵中佐 吉原 矩^{かど}₂₇ 期

西村敏雄³² 期 参謀本部作戦課課員
 九月一日東京発、九月三日〜七日、上海戦線を視察し、七日海軍の飛行艇で帰京した。

- 11、クリークノ橋ハ概シテ馬通ラズ、橋弱シ
- 12、井戸水ニテ飲メルモノ殆ドナシ、石井式濾水機使用ノモノノミ飲用可ナリ
- 13、(略)
- 14、(略)
- 15、白々々* 弾薬欠乏 赤々々 増援頼ム
- 16、我が砲兵火力ノ發揮ヲ要ス
- 17、敵夜襲ノ方式
- 18、夜襲ノ有利(木原大隊)
- 19、敵退却ニ追尾スル追撃
- 20、司令部ハ常ニ軍隊ト共ニアルコト

○師団長(出発時)の注意

- 1、動員完成迄ニ適材適所ニ人員ノ入換ヘヨナスベシ
- 2、輸送用ノ車輛ハ増加セラレザルニ付キ規定外員ハ何ントカシテ積ミ行クコト(積ミ方、上手ニヤレ)
- 3、方向維持ノタメノ資材整備ヲ要ス(特ニ夜)
- 4、敵ハ昼間ノ位置ニハ夜ハ居ラザル
- 5、出発マデノ紙屑ハ全部私物ノ手紙マデ焼却スベシ
- 6、防諜上師団ハ滿洲ニ行クト伝フルコト
- 7、下士官兵、十五分ノ一ノ補充ヲ準備シアリ
- 8、死傷者ヲ作ルコトニオビエザルコト
- 8、意見具申ハ将来成サントスルコトニ関スル事項ニ限ル
- 9、師団ヨリノ通報等、副官ノ所ニ止ルコト多シ

10、汽車輸送間

- 万歳ヲ受ケルトキ、腰掛ケタママ拳手ノ礼ニテ答フルコト
車長ノミ起テ敬礼スルコト
旗、手ヲ車外ニ出スヲ禁ズ
- 11、戦場掃除班ヲ各隊毎ニ作ルコト
 - 12、指揮機關ノ訓練ヲナスコト、日々事務上ニテモ積極的ニ
 - 13、十月一日マデニ予防接種ヲ完了スベシ(命令)
 - (アラユル手段ヲ尽シテ必ズ実行、十月一日ハ作戦第一日ト予想ス)
 - 14、諜者ハ同一目的ニ必ズ二人用フルコト(絶対ニ相互ノ連絡ナシニ)
 - 15、支那ノ制度ニ基ク連帶責任者ノ選定
 - 16、材料ニハ皆番号ヲ打ツコト
 - 17、「クリーク」ノ警戒

(副官)

- 従軍記者 報知新聞 戸沢英一 歩兵第104聯隊
福島民友 市の直治
福島新聞 三田英一 歩兵第65聯隊
- 上陸時荷物不明トナル、荷物ノ宰領者ヲ決メ置キ世話サスルコト
- 駄馬ノ掩護処置(大小行李)……某聯隊ト同行

(今次ノ編成ニテ困リシコト)

- 1、繁忙中ニ四種ノ予防注射ヲ完了スルコトニシテ、師団長ハ十月一日ノ上陸マデニ完了ヲ厳命セラル、先遣兵団天谷支隊?会々注射漏レノ部隊ノミコレラニ罹リタリ(百余名)

「15項」は、信号彈の意味であらう。

2、未教育者多く馬ヲ持チシコトナキ特務兵ユエ大イニ教導学校ノ世話ニナリシガ、十七日動員完結ニテ野繁、第一日ニ我正馬綱ズレ、第三日ニ副馬綱ズレテ全滅セシメラレタリ
宿舎 神戸市灘区高羽常磐木二八一三 医師 平尾重男

◇九月二十二日

午前七・二〇ヨリ師団長ト同行、桜岡神宮、招魂社、塩釜神社参拝
午後二時ヨリ県知事、仙台市長ヨリ偕行社ニテ挨拶ヲ受ク
三時ヨリ宮城野原壮行会、六時ヨリ「青葉」ニテ師団長招宴

九月二十三日（出発）

午前二回目ノコレヲ注射
午後二時私宅ヲ出テ大崎八幡、親戚ヲ回り旅団司令部ニ到リ愈々出発ナル、護郎モ同行出征ナリ

司令部トナリシ森氏酒店ノ十一日間ニ於ケル献身奉仕ニ対シ感謝状ヲ贈ル
午後六・五八親戚、知事、市長、県（会）議長、在郷将官、鷲津留守司令官等ニ見送ラレ征途ニ上ル、通信隊ト同行ニシテ師団輸送ノ最先頭ナリ

壮行会ハ盛ンナリシモ、習慣上停車場ノ淋シキハ物足ラヌモノナリ、沿道無名ノ人ノ万歳ナカナカ盛ンニシテ、家ヨリ俄カニ飛び出シテ万歳ヲ呼ブ等心打ツモノ多シ

馬匹ノ搭載等ニテ過日来大イニ教導学校機関銃隊佐藤准尉以下ノ世話ニナレリ

◇九月二十四日

仙台駅ノ淋シサニ似ズ、如何ニシテ知ルモノニヤ、沿道盛ンナル歓呼ノ声、別シテ午前三時

ノ真夜中トイフニ水戸駅ノ歓送盛ンナリ

午前七・一〇、田端駅着ト共ニ田山副官同行、東京駅ニ到リ朝食後、宮城、明治神宮、大宮御所拝賀、靖國神社ニ詣ツ

九・〇〇特急つばめニテ友部、深井、下田、長沢、菊地一家、山形中尉ノ見送りヲ受ケ出発、午後四・〇〇京都有着、車ニテ直ニ石清水八幡、桃山御陵、伏見稲荷ニ詣デ、六・〇〇近太旅館ニ泊ス

前夜来ノ胃痛故医者ヲ呼ビテ診察ヲ受ク、胃酸過多ナリト

◇九月二十五日

朝八坂神社ニ詣ツ、午前一〇・一九神戸着、両聯隊長ト湊川神社ニ詣デ、「菊水」ニテ会食シツツ打合せ、午後二・三〇ヨリ師団長宿舎ニテ打合せ

歩兵第104聯隊駄馬一頭、東京ヨリ輸送中仙痛斃死

○乗船秘話

一、歩兵部隊某小行李、弾薬全部ヲ残置出発セリ

二、歩兵某機関銃大隊、駄馬ト人員ト全然別船ニ乗リ、戦車ト幹部人員ト別船シ、シカモ上陸地数モ離レシタメ非常ニ困レリ

三、歩兵第104聯隊

上陸マデニ四種ノ注射必ズ完了セヨトノ師団長ノ嚴命ニテ旅団司令部モ仙台以東随分ヤカマシク言ヒシモ、神戸ニ至ルマデコレラ一回ノミシカ実施シアラズ、船中ニテ連日ニテモ為ス如ク命ジタリ、然ルニ第II大隊ノ軍医ハ乗リシモ注射液ヲ全部他船ニ乗セタリ

（今次ノ動員ニテ歩兵第104聯隊ハ大隊長以上皆編成事務ニ忙殺サレ、大隊ニ行キシハ出発二日前ナリ、此点歩兵第65聯隊ト大差アリ、スベテニゴタツキアルヲ認ム）

正馬、副馬Ⅱ旅団長用の乗馬、正副各一頭

九月二十五日、団隊長打合せ（神戸、師団長宿舍）

○参謀総長宮殿下御言葉

『師団ノ特質ニ鑑ミ其ノ戦力ノ發揮ニ遺憾ナキヲ期シ、以テ聖旨ニ副ヒ奉レ』

○師団長ヨリ

- 1、落失遺失残置物ナキ様（前師団某大隊、小行李彈藥全部ヲ残シ出發セリ）
- 2、前師団ハ蹴躑馬ニモ装蹄セシタメニ他馬外傷ヲ負ヒ、神戸二三〇〇頭余リ残置シアリ
師団ハ躑馬ニハ装蹄セズニ來レリ

○参謀ヨリ

- 1、生水飲用ノ嚴禁（第3師団ノコレヲ原因ハ生水ナリ、患者ノ吐瀉物、勝手ナ場所ニ用便スルタメナリ、便所ノ消毒）
- 2、ナルベク榴霰彈ヲ使用スルコト
- 3、手榴彈（着発彈）ハ乾涸地
- 4、退却ノ兆候、先ヅ住民動ク
- 5、指揮官ハ地物ヲ利用ス、固着セル者ハ狙撃セラル、絶エズ動クコト、機関銃モ同ジ
- 6、クリークト村落ト附キアル所、抵抗強ナリ、慎重ヲ要ス
- 7、戦車ニハ敵撃タズ、跟随スル歩兵ヲ撃ツ
- 8、師団内ノ勇敢ナル聯隊ニハ決シテ夜襲シ來ラズ、弱イ方ニノミ來ル

歩兵一大隊
正面 六〇〇〜一五〇〇m
深サ 一五〇〇m

歩兵一聯隊

正面 二〇〇〇m
深サ 四〇〇〇m

○重疊配備力逐次交代力、一定任務ノ付与力

前進（接敵、突撃、陣内戦）

宿営 警戒

「クリーク」通過法 此ノ態勢如何

行軍 警戒

○攻撃ノ要領（思想）

正面攻撃ハ第一回ノミ、他ハ側攻背攻ニ依ル

○陣地占領後ノ工事（土囊）

九月二十六日 各隊長打合せヲ行フ *

十月一日黎明	五・四〇	日出	六・〇〇
日没	六・一〇	日暮	六・四〇
十一月一日黎明	五・五五	日出	六・一五
日没	五・三〇	日暮	六・〇五
十二月一日黎明	六・一〇	日出	六・四〇
日没	五・〇〇	日暮	五・三〇

◇九月二十六日

午後二・〇〇ヨリ各隊長集合打合せ、主トシテ戦闘ノ実施要領等ニ関シ各人ノ研究考案ヲ発表セリ、白紙戦術的ニシテ的確ナル妙案出ツル筈ナキモ、各歩兵聯隊長未ダ明確ニ陣地戦ナルコトヲ意識セズ、敵陣ノ攻略ヲ甚ダ輕易ニ考へ、直ニ突破シ得ル如ク考へアルノ風アリ、此ノ

* 飯沼守・上海派遣軍参謀長日記
九月二十一日の項に「コレヲ様患者ハ三百余名、内菌ヲ検査シタル者百名、死亡九十名」とある。
ついで十月十日の項「十月六日迄ノコレヲ患者800余、死亡300、赤痢325、死亡5」

* わが軍が使用した手榴彈は大部分曳火式ではなく旧式の着発式で上海郊外の水田など地盤の軟弱な所に落ちた場合発火しないことが多かったため、この注意となったと推定される。
歩兵第二十二聯隊長・永津佐比呂重大佐は「こんなもの使えるか」と怒り、大西一派遣軍参謀はその参謀飾緒をひきちぎられそうになったと回想している。

上海戦線の日出、日没時刻である黎明、日暮は、それぞれ黎明時の戦闘、薄暮時の戦闘を意識したものであろう。

輕視思想ハ爾後ノ戰闘指導ニ大害ヲ及ボサン
夜、大迫齒科医息子ヲ連レテ來訪ス

乗船 (総洋丸六〇八一屯)

◇九月二十七日 細雨 霽レタリ曇ツタリ

午後二・一五宿舍出發、三・〇〇総洋丸ニ乗船、明石山丸ノ師団長ニ連絡セシモ不在、当船ノ輸送指揮官以下將校全部不在ナリ、市ノ壮行会ニ行キシモノナリ(吾等ハ通知漏レ)、出發間際ニ壮行会等ニテ將校ヲ不在ナラシムルハ大変悪シキコトナリ

四・〇〇出帆、例ニヨリ出帆前三井船舶部長等來リシャンパンヲ抜き祝ヒ呉レル。船団七隻ナリ

(三井物産船舶部長古川完三郎、部長代理崔部進、総洋丸船長勝見光重、事務長内田勇)

○スベテハ船ニ持ち越サレ、各隊瀬戸内海波静カナル所ニテ訓練ヲナス覚悟

サテ神戸出帆二時間許リニテ夜ノ帳ハ下サレタリ。万事斯クノ如キモノナルベシ

○船内ノ給養ハ現品給養ノ為甚ダ不良ニシテ、野宮地ノ御馳走ノ様ナリ

予ニ船長ノサロン日本室ノ提供ヲ受ク

◇九月二十八日

朝七・〇〇広島沖ナリ、一一・〇〇頃馬関海峡通過、六連島ニテ勢揃ヒ、五艘ニテ進發ス、午後一・〇〇過ぎナリ、注射薬ヲ運ブタメ發航三〇分位ニシテ船長ノ厚意ト努力ニテ停船、一漁船ノ仲介ニテ僚船ヨリ薬入手ノ目的ヲ達ス、漁夫ノ好意、別レニ金ヲトラス、日の丸ヲ打ち振り打ち振り去リ行クアタリ誠ニ美シキ光景ナリ、皆日本人ナレバコソ、福岡沖ヨリ駆逐艦先航ス、六・三〇老岐ヲ右手ニ見ツツ夜トナル、誠ニ平穩ナル航海ナリ

六連島^{むつしま} 馬関海峡の要地

◇九月二十九日

甚ダ平穩ナル航海ナリ、終日支那海ヲ走ル(速力十三海里ニテ)

船上ニテ各種ノ教育ヲナス、支那海ニ明ケテ支那海ニ暮ル

支那ヲスツカリなめタル海軍、日中ハ護衛モナシ、船長ニセガマレ「至誠報國」ヲヌタクル

書債(神戸市海岸通三井物産船舶部)

総洋丸ボーイ・久津輪米吉

◇九月三十日 午後細雨

午前砲声ヲ聞ク、黄浦河口ニテ、終日濁流ヲ眺メ暮ス

上陸

◇十月一日 晴

午前七時頃ヨリ黄浦江ヲ遡リ日本郵船埠頭ニ九・〇〇頃着セシモ師団司令部ノ位置不明ニテ一〇・〇〇ヨリ上陸、上海紡織本社ノ師団長ヲ訪ネ、午後四・〇〇頃マデ会谈、同興紡織ノ社宅ニ就ク

海軍陸戰隊東部支隊長海軍中佐安田^{やすだ}義達氏ト会ス、ビールノ寄贈ヲ受ク、夜敵機來襲、海軍活動、ナカナカヨキ御馳走ナリ

◇十月二日 晴

午後二〇・〇〇海軍陸戰隊東部支隊本部ヲ訪ヌ、会々^{くわくわ}竹下大將來訪、共々屋上ニテ一般戦場ノ觀望、説明ヲ聞キ、次イデ自動車ニテ遠東競馬場附近敵ノ陣地ヲ見学ス、待機間ノ教育ニ就

安田^{やすだ}義達 のち、横須賀鎮守府第五特別陸戰隊司令として昭和十八年一月一日ニューギニア・ブナにて戦死、二階級特進中將。海兵46期。

有終会(海軍將校のOB会)理事
長 海軍大將 竹下 勇 海兵15期